武田信玄

津本陽

上



講談社文庫



カバー装画　西のぼる

つ10-20



講談社文庫

武田信玄(上)

津本 陽

講談社

目次

はじめに　6
誕生　11
走馬　53
川中島　205

武田信玄（上）

はじめに

生涯に数十回、あるいは百回をこえる死闘をくりかえし、難関を乗りこえねばならなかった戦国大名は、傑出した才能をそなえるとともに、破滅の危機にのぞんでも切りぬけられる嘘のような好運に恵まれなければ大成できなかった。

武田信玄もその二つの条件を兼ねそなえた英雄であった。戦国大名の一生は全存在を賭けた博打（ばくち）の連続である。博打をうつには感情は禁物であった。

情報の収集と分析を徹底しておこない、決断を下すとき、常人にはない勇猛心をふるいおこさねばならない。

重大な損害を予測しても行動をおこさねばならないときもある。徹頭徹尾非情な理性の戦いである。相手よりも一手の読みが浅いと瓦解する碁の勝負と同様であるといえよう。

信玄は幼時から感情に動かされない冷静な性格であった。成長の過程で父信虎にうと

んじられたのは、前途の読みがあまりに鋭く、恐れられたためであるといわれる。

彼は武田家の興隆をみちびいた功労者である父信虎を追放し、親戚譜代衆の重圧をはねのけ、外様侍大将の登用をおこない扶桑随一といわれる武田騎馬軍団を出現させた。

武田軍団の強大な武力は、勝頼が長篠合戦で敗北するまで、徳川、北条の遠く及ぶところではなかった。

武田信玄の強敵は越後の上杉謙信である。信玄は甲斐二十二万石の狭隘な領土から信濃四十五万石を併呑するにあたり、当然謙信と激突せねばならなかった。

戦争の天才である謙信と幾度も戦いをかさね、北条氏康との連繋作戦で攻め悩ます信玄の権謀術数はすさまじい。

彼は勝つためには他をだまし、利用したのち容赦なく捨て去ることも辞さない。政治の鉄則は弱肉強食であることを知りぬいた、こころよさを感じさせるほどの非情な行動力である。

信玄には山本勘助、板垣直方らの軍師がいたといわれるが、実体は徹底したワンマンであった。

戦国英雄は総じてワンマンであるといえる。ナンバー・ツーの存在はありえない。信

玄の戦法は「風林火山」の孫子の旌旗に象徴されているように、無気味なまでに変幻自在である。

常に百パーセントの勝利はありえない。そのような大勝のあとは大敗の危険があり、六十パーセントの勝ちを最上とする信玄は、冷静な現実主義者であった。

謙信は永禄四年の川中島合戦ののち、身命を捧げて戦った家来たちに有名な血染めの感状を与えた。

信玄は功績に応じて所領を与えるのみであった。実利を重んじる性格があらわれていておもしろい。

謙信、信玄はともに神仏の存在を信じていた。謙信は自らを毘沙門天の化身と思いこんでいたし、信玄は神仏に合戦の勝利をみちびかせようとした。

勝利を祈願して、実際に勝てば社殿仏閣を造営し、寺社領を寄進するが、敗北すれば社殿などを焼きはらうと神仏を威嚇するのである。

中世の花といわれた二人の精神内容が超現代人ともいうべき信長の明晰な現実認識といささかくいちがう点が、興味をひく。

私は信玄とその子勝頼の事蹟を調べてみて、彼らの時代における武田の戦力が想像以

上に戦国群雄のうえに屹立した存在であったのを知り、おどろくばかりであった。

武田勝頼は実際の戦闘では信玄をはるかにうわまわる勇敢な行動をあらわしたが、時代の推移を見抜く先見力に欠けていた。

やはり信玄とは器がちがったといわざるをえない。

兵員二万五千人、軍馬一万頭を擁し、四倍の敵を撃破しうる戦力があるといわれた武田軍団も、長篠設楽原合戦ではその戦法が時代に遅れていた弱点を露呈した。

いったん時代の進歩にとりのこされた者のうえには、陽は二度とあたらないのが政治経済の原則である。

勝頼は勇猛な侍大将、軍兵の戦力を発揮しうる手段を開発しなかったために、新機軸をひらいた信長に倒されたのである。

甲斐武田の最期のだまされたような脆さは、生存競争の縮図を見るようで、いまもかわらない人生のさまをあらわしているといえよう。

誕生

灯台の黄の焔がひとところにわずかな明るみを溜めている寝所の暗がりのなかで、武田信虎はめざめていた。

大永元年（一五二一）九月十七日の丑の上刻（午前二時）頃である。

縁先の蔀戸の外にひろがる樹林で、秋の虫が啼いている。

永正十六年（一五一九）八月に起工し、暮れの二十日に完成した躑躅ケ崎館の主殿は、まだ檜の香がたかい。

信虎が石和川田（甲府市川田町）の館から、あらたな本拠に移って、まもなく二年が過ぎようとしている。

石和はふるくから甲府盆地の中心地で、古代の国府、国分寺、国分尼寺もその附近にあ

り、人口も稠密であった。

だが地形が平坦であるため、敵に対し防衛の利点に欠ける。また笛吹川の水害も防ぎがたい。

それにくらべ躑躅ケ崎館は北、西、東の三方に山をひかえ、南に甲府盆地をのぞむ要衝であった。

館は現在の甲府市古府中町にあり、その敷地は相川扇状地の開析部分に位置している。館をかこむ山地は西側に湯村山、東側に大笠山、夢見山、愛宕山が、「左右鳥翼のごとく」張りだしている。

北方には帯那山系がひろがっていた。

躑躅ケ崎館の城域は、東西百五十六間（二百八十四メートル）、南北百六間（百九十三メートル）の広大なものであった。

外郭には高さ三メートルから六メートルの土塁と、幅ひろく深い濠がめぐらされていた。

内郭は東、中、西の三つの曲輪に分けられており、北側には北曲輪がある。

外濠南方には、御蔵前衆の庁所が設けられていた。

館は信虎一族の居住と政庁にあてられている。敵襲の際の詰城として、防禦の役割りを果すのは、館の北東半里の積翠寺丸山に築いた要害山城であった。

要害山城（甲府市上積翠寺町）は、標高七百八十メートル、比高二百六十メートルの山頂

部にあり、一の曲輪から八の曲輪まで土塁をめぐらし、全山を城郭にとりいれていた。

二十八歳の信虎は、褥のうちに側女を添い伏しさせていた。

信虎の日常は、血のにおいにみたされていた。

彼はひとり寝が嫌いであった。

灯台のおぼめく光が息づいているだけの森閑とした寝所にひとりでいると、恐ろしさが身に迫ってくる。

亡霊があらわれてくるかも知れないという想像が、眠れずにいるとき、彼をさいなむのである。

信虎は甲斐国守護職である。

彼はその年の四月十三日、左京大夫、従五位下に叙せられた。

守護職は国主大名としての強力な権限をそなえている。軍勢催促、謀叛殺害人検断のほか、所領給与、交通管理の裁決をおこなうのである。

甲斐は米の生産高が二十万石前後であるが、国内は大菩薩の連嶺につづく御坂山地の稜線を境に、東西二つの地域に分れていた。

東側が郡内、西側が国中と呼ばれている。

郡内は坂東平氏の小山田氏が支配し、信虎は直接にその地に力を及ぼすことができなかった。

また、甲斐から駿河へ流れる富士川の河谷地域は河内と呼ばれ、武田親類衆筆頭の穴山氏が支配している。

信虎はこの二大勢力と、彼らに味方する地侍たちを制圧し、甲斐統一のために戦ってきた。

殺人、拷問は日常のことであった。人を殺すのに心を動揺させていては生きてはゆけない。蝗を踏みつぶすほどの気分で敵を倒し、殺戮に慣れていなければ守護職の地位を保てなかった。

信虎は戦国大名の乾いた心情を持っていたが、いままで見たことのない亡霊を眼にするのが恐ろしい。

彼の周囲には、亡霊を見たという者と、見たことがないという者がいた。

信虎はそのいずれも偽りをいっていないと見た。

「亡霊は、くらがりにはきっとおりまする。寝ておれば眼の先に顔を寄せて参るでごいす」

「いや、おらぬでごいす。手前は死人の燐でほの赤けえなかで寝てござりまいたが、何も出て参らなんだでごいす」

信虎は亡霊を見れば、どのような衝撃をうけるか、見当がつかない。

物狂いのように恐怖に駆られるか。

それとも陽炎を眼にするように無関心でいられるのか。

不可解なものへの怯えは、身近に側女がいることでうちけされる。

帳台飾りのそとに宿直の小姓が控えており、遠侍にも寝ずの番がいる。夜中にいかような椿事がおこっても迅速に対応できるよう、館のうちに大勢の家来がいたが、信虎は闇をおそれた。

彼は側女のやすらかな寝息を聞きつつ、天井の化粧梁のあたりに眼をやり、夜があければ裁決しなければならないさまざまの問題について、考えをめぐらしていた。

彼は臥しどで考えごとをするのを好んだ。

昼間は容易に思いつかない、妙案が湧いてくる。

信虎は永正四年（一五〇七）二月十四日、父信縄が没したのち、十四歳で家督を継いだが、その後の歳月は甲斐国内の諸勢力を制圧し、武田惣領家の地位を守る戦いについやしてきた。

信虎がまず直面した敵は、叔父の武田信恵であった。

信恵は郡内の支配者小山田信隆、国中の土豪・栗原、工藤、上条、河村の諸氏とかたらい、叛いた。

信虎は永正五年十月から十二月にかけての決戦で、武田信恵父子を倒し、国中へ乱入してきた小山田信隆をも討ちとり、最初の難関を乗りこえた。

だが信虎の前途に苦難はつづく。

郡内の小山田氏との戦いをなお重ね、数代前に武田家から分れた一族である大井、栗原、今井、穴山らが結束して反抗するのを、鎮圧せねばならない。

彼らは北条、今川、諏訪など、甲斐と国境を接する大名と通じ、信虎を滅亡させようとした。

永正六年から七年にかけ、信虎は小山田勢と合戦をくりかえしていたが、七年の春に和睦し、妹を小山田の当主越中守信有に嫁がせた。

信虎は郡内の支配者である小山田氏と同盟したことで、甲斐統一の見込みを得た。

その後は西郡大井荘（中巨摩郡櫛形町・甲西町）の豪族大井氏との争闘がつづいた。

大井氏は南北朝の頃、武田氏から分家した支族である。今川氏と誼みを通じており、今川の大軍が大井氏を援け、しばしば侵攻してきた。

今川は大国であった。米高百万石といわれ、甲斐二十余万石のうち、せいぜい十余万石を領有していたにすぎない信虎にとっては、脅威とすべき戦力をそなえた敵であった。

今川勢は、大兵を催し、しばしば攻めこんできたが、信虎は善戦した。

敵とは比較にならない小人数で、山間の地形を利して巧みに反撃し、退けるのである。

永正十四年（一五一七）正月、信虎は大井氏の本拠吉田城（櫛形町上野）を陥れ、大井信達と和睦し、その娘を夫人に迎えた。

躑躅ケ崎館を築いたのは、こののちである。

新しい居館と要害山城を設けた信虎は、城下の経営にとりかかった。東西南北に多くの大通り、小路を交叉させ、市街地をさだめると、社寺、豪族を居住させようとした。甲斐国主の権力機構の基盤をかためようとする強引な施策は、たちまち有力豪族の反撥を招いた。

「妙法寺記」の永正十六年のくだりに、

「甲州府中ニ一国大人様ヲ集リ居給（オリタマイソウロウ）候」

と記しているのは、この間の消息を物語るものである。

おなじく永正十七年には、

「此年五月当国栗原殿大将トシテ、皆々屋形（信虎）ヲサミシ奉ッテ、一家国人（コクジン）引退給ウ」

とある。

サミシとは蔑視することである。

信虎は栗原、大井、今井の三豪族に同時に叛かれても、動揺しない実力をそなえていた。

信虎は兵を三方に発し、永正十七年の夏が過ぎる頃に三氏を降伏させる。

国内の叛乱分子を一掃した信虎を脅（おび）やかしたのは、永正十八年（一五二一）初頭からの駿河勢の侵攻であった。

その年は、今川勢が大兵力をふりむけてくる徴候があらわれていた。以前は二、三千の人

数で襲ってきたのが、七、八千から万余の兵で乱入してくる。

信虎はいつからか不眠の癖にとりつかれた。

――儂がいま駿、遠の奴輩に攻められたなら、手のうちの卵を握りつぶされるがような目に遭いかねまい。陣触れいたせしとて、参向いたすは、たかだか二千じゃ――

甲斐の国人たちは、信虎に威服していたが、陣触れを発しても、なにかと理由を申したて、兵を出さなかった。

不穏な情勢のもとで、信虎は躑躅ヶ崎館を護る譜代衆二千を用い、いつ大敵が襲来しても応戦しうる態勢をととのえていた。

彼も寝所の隣室に鎧直垂、具足を置き、危急の場合はただちに武装して出陣する支度を、毎夜欠かさない。

枕もとには、刃渡り三尺八寸の長巻を横たえ、暗殺者の襲撃にそなえている。

九月十七日の深夜にめざめていたのも、寡兵で大敵にあたる戦法を、あれこれと考えめぐらしていたためである。

山国の夜は冷えこみがきびしい。

一番鶏のしわがれた啼き声が、静寂をかぎ裂きにして絶えてまもなく、遠侍のあたりから近づいてくる足音が聞えた。

――来たぞ――

信虎ははね起き、右手に長巻をつかんだ。
襖の外から、宿直の小姓が声をかけた。
「おそれながら、申しあげまする」
「誰ぞ仕懸けて参りしか」
信虎が聞く。
「今川の人数一万五千、昨夜亥の刻限（午後十時）に、富田城（中巨摩郡甲西町戸田）を攻め落し、大将福島正成は城に入りし由にござりまする」
「うむ、あいわかった。使い番をば虎胤がもとへ走らせ、陣触れいたさせよ」
原美濃守虎胤は鬼美濃と異名をとった猛将である。
信虎の鼓動は息苦しいまでに早まり、みぞおちのあたりが石のように固くなっていた。
どれだけ奥歯を嚙みしめても、ガチガチと歯音がたつ。
信虎はわざと手荒く襖をあけ、隣座敷へ入る。
宿直の小姓たちが、鎧装束をのせた長い台を運んできて、闇着を脱ぎすてた信虎に着せかける。
「奥は要害山へ遣るがよい」
信虎は手早く紺糸縅腹巻をつけながら、縁先にひかえている使い番に命じた。
身重の夫人を、いちはやく要害山城へ退避させなければならない。信虎は自分が討死を遂

げても、血筋を絶やすことになっては、先祖に申しわけがたたないと思っている。

今川氏親の部将、遠江土方城主福島正成の率いる敵勢が陥落させた富田城は、大井氏の居城で、躑躅ヶ崎館からは五里南方である。

武田勢は夜明けまでに二千人が館の前へ集結した。

昧爽の寒気のなかで、将士は粛然と隊伍をととのえる。

侍、槍に属する騎馬兵たちは、背に四半の差物を立て、兜蓑を垂らして猫背になり、馬上にうなだれた格好で、乗馬の足ならしをはじめていた。

黒ずくめの具足に身をかためた原美濃守は、葦毛の肥馬にまたがり、信虎に従い、全軍の先頭に出た。

出陣の法螺貝が、大、大、大と腸にひびく音を吹鳴させると、旗差物をつらねた隊列が動きはじめた。

向う先は飯田河原（中巨摩郡敷島町荒川河原）である。

将兵は決死の覚悟をきめていた。

敗北すれば、領土を失い、家族が劫掠の憂き目を見る。

二千の兵で一万五千の敵に正面からあたれば、粉砕されるのが眼にみえている。

どうすればよいかと、信虎は考えこむ。

彼は虎胤に話しかける。

「いかがいたすかのう。よき手だても思いつかぬが」
虎胤はうなずく。
「小をもって大を制するは、奇策のほかにはないでござる」
「ほう、軒猿を使うて夜討ちを仕懸けるのかや」
信虎は髭面をゆがめ、笑ってみせた。
駿、遠勢は九月十八日、躑躅ケ崎館の西方二里足らずの登美の龍地台（北巨摩郡双葉町）に布陣し、信虎勢と荒川をはさみ布陣した。

駿河、遠江勢は荒川の対岸に陣小屋をつらね、攻撃の機をうかがう。
彼らは旌旗、吹流し、纏の馬標を林立させ、日に幾度か二、三百の足軽勢を出し、合戦を挑んでくる。
信虎はそのたびに全身に鳥肌をたて、いまにも敵の総攻めがはじまるかと眦を決して、味方の先手に下知をする。
「こなたよりも取りあいに出でよ。押し負けてはならぬぞ」
こちらが敢然と立ちむかわねば、士気が衰えていると見破られ、敵は総がかりで押し寄せてくる。

そうなれば兵力の差はいかんともしがたく、撃破される運命を免れない。

信虎は龍地台の高処に兵を展開させ、敵陣を見下す態勢をとっていた。

附近の百姓を狩り集め、陣所の周囲に出没させているので、敵はこちらの兵数を多目に見積っているはずであった。

信虎の陣所で寒風にはためいているのは、竹竿に結びつけた百姓たちの古着や褌である。

それでも遠目には旗差物に見えないこともない。

信虎は張りめぐらした陣幕が風をはらみ、いまにも吹き飛びそうにはためく本陣で、篝火をさかんに焚き、幕僚たちと合戦の手順を相談しあっている。

篝火は風向きがかわると、どっと灰を舞いあげ、信虎の顔に灰と煙を吹きつけてくる。

「今川の者どもは、われらを買いかぶっておるいら」

信虎がいうと、家老の荻原常陸介が頬のそげた剽悍な顔をむける。

「仰せのごとくにございます。まず、こなたの人数を四、五千と見ておるやに存じまする。それゆえ、押し出して参らず、位攻めにいたそうとの形勢にございます」

常陸介のいう通り、今川の駿、遠勢は対陣して十日過ぎ、半月を経ても、川を渡って総攻めを仕懸けてこない。

武田勢の兵力がわずか二千と知れば、はやばやと押しかけてきて、躑躅ケ崎館を蹂躙しつ

くしているにちがいない。

彼らは地理に疎いので、行動をつつしまねばならなかった。

それに武田勢は高処に陣取っているので、攻めるに不利である。高処の敵を追い落すには、五、六倍の兵力が必要であるとされている。

当時は合戦がはじまっても、実際に激突して屍山血河の白兵戦を展開する例は稀れであった。

たがいに河川をはさんで長期対陣し、大兵を催し勢力を誇示して、戦わずして敵を威圧し、退却させる戦法をとることが多い。

今川の主将福島正成は、信虎を威圧し降参させる方針をとろうとしていた。

信虎は夜中に篝火を真昼のように焚かせ、昼間は敵陣へ遠矢を射かけさせる。

また小人数の兵を毎夜幾組か行動させ、今川の陣中に付け火をさせ、馬つなぎ場の柵を抜いて軍馬を暴走させるなど、ゲリラ戦を仕懸けた。

「いましばらくは、小攻めあいに日を暮らすがよかろうかな」

「さようにございます。今川の者どもは、仕懸けて仕損ずるをおそれてござる様子ゆえ、機をはかり夜討ちをいたすが上分別と存じまする。あやつどもは、この地の形勢、遠近、広狭、兵の多少をはかり、彼と我といずれが勝れるやを察すべく、心を労しておるやにございます。それゆえ、敵が兵を動かすに先んじて、こなたより人数を夜中に出し、一気に突き抜くが上策と

存じまする」

荻原常陸介は、おちつきはらっていた。

六十路をこえ、生命への執着も薄れている常陸介は、下手をすれば全滅するかも知れない危機にのぞんでも、感情を波立たせず冷静に戦況を分析判断する。

彼は若い主人信虎を動揺させまいとしていた。

さいわい今川勢は、高処に魚鱗の陣を敷いたこちらの戦力を過大に見ている。

「夜討ちをいたしかけるは、いつじゃ」

「ここ二、三日のうちにございす」

初雪が降り、昼間も夜のように暗くなる日が四、五日もつづいた。

風に捲かれた雪は空を荒れくるい、足もとからも吹きあげてくる。

信虎は寒気に堪えて、陣小屋で起き伏しした。

老齢の常陸介は、近所の寺院に泊らせたが、自分は陣所をはなれる気になれない。

陣小屋で戸板に身を横たえ、具足をつけたまま夜着をかぶって仮眠をとるが、壁の隙間から吹きこむ雪が顔につもり、寒さで眼がさめる。

起きあがった信虎は、ゆらめく灯台の焔のもとに身を寄せ、刀脇差の手入れをする。

刀の手入れは、まず刀を静かに抜いてみて、鯉口の詰めかげんを試す。

鯉口が緩めのときは、刀が抜け落ちる不覚をとる。きつすぎれば、敵と抜きあわせるとき

に遅れる。

つぎに切れ味を試みる。

切先三寸下の物打ちどころで、懐紙を切ってみる。刃がひっかかれば入念に寝刃をあわせねばならない。

水もたまらぬ切れ味でなければ、戦場での充分なはたらきができない。

ついで目釘をあらためる。

大小は常に手のとどくところに置かねばならなかった。

武将は常に心を弓に矢をつがえ弦を引いたときのように張りつめていなければならない。

信虎は日頃、常陸介に諭されていた。

「大将たるものは、近侍の者どもあるいは朋友にも用心いたさねばなりませぬ。心に油断は禁物にございます。昔より確執闘争は親しきあいだよりおこるものと申しまするに。何となれば、親しき者は自然と心に緩怠ありて、無礼をふるまうに至るゆえにございす」

対陣のうちに一ヵ月が過ぎた。

十月十六日の朝は晴れわたっていた。

駿、遠勢は朝からしきりに足軽勢を出し、小競りあいを仕懸けてきていた。

陣中には騎馬武者の往来が忙しくなり、陣小屋のあいだから物を焼くらしい煙が立ちのぼ

っている。

信虎は荻原常陸介、原虎胤らと、敵の状況を注視していた。

「今日は何やら敵の動きが忙しゅうなったが」

信虎がいうと、常陸介が眼を光らせた。

「さようにございます。あやつどもはまず明日を期して押し寄せるやに見えまする」

「うむ、ならば今宵(こよい)か」

「さようにございます。われらの人数をこぞり、火矢を射かけ、付け火をいたせしのちに鉾矢形(ほこやがた)にて突き入るのでございす」

鉾矢形とは、少数で大敵にあたるときの、大将を先頭に立てての密集突撃態勢であった。

敵はしきりに足軽勢を出し、武田方の応戦の様子をたしかめようとしていた。

彼らは、武田勢をどの方向から攻撃すればよいかを、探っている。

味方の足軽勢は、数倍の敵に遭遇しても屈せず、果敢に戦う。

甲斐源氏の伝統を守り、武勇練達の侍ばかりを撰りすぐっているので、白兵戦にはすさまじい威力を発揮する。

彼らは腰に二振り、背に一振りの大刀を帯び、刃が欠けると取りかえつつ戦うのである。

日暮れまで、武田勢と駿、遠勢は小競りあいをくりかえした。

身に沁(し)みる寒気をはこんでくる北風が、虚空(こくう)で口笛のような音をたてている暮れ六つ（午

後六時）過ぎ、信虎は陣所におびただしい篝火を焚かせ、百姓たちに明りのまわりを徘徊させる。

全軍二千人は闇にまぎれ、藪蔭に集結した。素槍、長巻、鉄尖棒、やがらもがらなどの兵器を手にした軍兵たちは、金具に襤褸を巻き、物音をたてないようにしていた。

信虎は闇中にひしめいている軍兵たちに、鐘音のように余韻ののこる声音で合戦の心得を告げた。

「戦場にては、命を惜しまぬ者がかえって運つよく、わが身大事と願う者が矢に当るものじゃ。人にはすべて定命と申すものがあるゆえ、それが尽きざるうちは命は尽きぬ。運が尽きねば、いかなる荒ばたらきをいたそうとも、死にはせぬ」

武田勢は闇中で、時を待っていた。

信虎は臆しているわけではないが、胴震いがしきりにおこり、とめられない。

荻原常陸介が信虎の手を引き、てのひらに何か乾いた手ざわりのものを置いた。

「これは鷹の爪にてござりまする。これを嚙めば、武者震いは治まりまするに」

信虎はそれを嚙む。

するどい辛味が口中にひろがった。

半刻（一時間）ほど経って、武田勢は河原へ移動をはじめた。

藪蔭から河原へ出ると、風当りがつよくなった。

全軍の先頭に立つ信虎に、河原に立つ道案内の小者が声をかける。
「こなたへお越しなされませ」
「こなたでごいす」
渡河点の浅瀬にのぞむ場所で、全軍は停止した。
闇中には何の物音も聞えなかった。
私語する者もなく、馬の口には馬銜をかませているので、鼻息さえたてない。
敵陣には軒猿と呼ばれる忍者が数十人、潜入していた。
しばらく見守るうち、敵陣のひとところに火の手があがった。
何事か喚く声が、水面を渡って聞えてくる。手桶を持った雑兵が河原へ駆け出て、水を汲んでゆく。
火は別の場所からも出た。
「やりおるいら」
信虎がつぶやいた。
小半刻（三十分）ほどのあいだに、敵陣の十数ヵ所から出た火が燃えひろがり、あわてふためき逃げまどう人馬の姿が対岸から見えた。
「いまじゃ、三手に分れ鉾矢形を組み、合戦取りあいをいたすべし」
信虎が大音声で下知した。

法螺貝、寄せ太鼓がいっせいに鳴りはじめ、武田勢は水を蹴って荒川を渡り、敵陣へ殺到していった。

信虎は侍槍の一団を率い、燃えあがる陣小屋から走り出る駿、遠勢を馬蹄にかけ、槍先で貫く。

三手に分れた武田勢は、敵中を縦横にふみにじる。

「武田衆がきたぞ」

「敵は二万じゃ」

「信濃衆が合力いたしおるずら」

武田の軍兵たちは大声で叫びあい、駿、遠勢を斬りまくった。

一万五千の敵勢は、わずかの不寝番を置いたのみで寝ていたので、油断をつかれ、具足をつける間もなく、素肌に刀槍を持って防戦したが、総崩れとなるのに一刻（二時間）もかからなかった。

武田勢は夜あけまえに、無人となった駿、遠勢の陣所でかちどきをあげた。

数百の首級をあげ、多くの武具、軍馬、兵粮を分捕った武田勢は、意気さかんに甲府へ凱陣した。

信虎は翌日に物見を出し、駿、遠勢の様子を探らせる。

敵の大将福島正成は、敗軍をまとめ勝山城（山梨県東八代郡中道町上曽根字勝山）に入ったとの注進がとどき、信虎はわずかに気をゆるめた。

勝山城は、躑躅ヶ崎館の南方四里にある。

甲斐、駿河二国をむすぶ中道往還をおさえる要衝で、笛吹川の氾濫原に面する小高い丘のうえに曲輪をかまえている。

「またいつ攻め寄せてくるやも知れぬずら。備えを崩してはならず」

信虎は龍地台に五百の兵を置き、敵の侵攻を見張らせ、本隊を甲府に集結させた。

「奥はまだ館へ戻しては危うい。しばらく要害に住まわせておけ」

駿、遠勢との緒戦に貴重な一勝を得たが、一国破滅の危機は去ってはいないと信虎は緊張をゆるめなかった。

甲府のはずれに忍者を配置し、勝山城に腰をすえた駿、遠勢の動向を逐一探ってはいるが、いつ急変がおこるか知れたものではない。

信虎は毎夜篝火が天を焦がす躑躅ヶ崎館で、床に就かずにいた。夜があけてからみじかい仮眠をとるのである。

駿、遠勢とはふたたび決戦をしなければならない。

もし敗北すれば、今川に従属する運命をたどるよりほかはなかった。

「ここしばらくは、儂が運気の分れ道じゃ。勝てば行手に大道がひらけようし、敗くれば儂

が名も消えうせるずら」

駿、遠勢との対峙がつづく十一月三日、信虎夫人は要害山城で男児を出産した。

妻の枕頭に駆けつけた信虎は、嬰児を抱きあげ、眼をうるませた。

「おのしは、験よき時に生れたのう。父が今川の大敵を追い払いしゆえ、おのしに勝千代と名付けるずら」

勝千代はよく肥えた嬰児であった。

身按配がよいのか、夜泣きもせず、すこやかに乳をのむ。

十日になって、躑躅ケ崎館の信虎は物見に出していた忍者から、急報を受けた。

「今川の者どもは、昨夜より合戦支度をととのえ、甲府へむけ押し出る様子にございす」

信虎の身内に胴震いが走った。

深い霧が山ひだに溜り、山顚まで溢れて陽をさえぎっている。

信虎は五千余の兵を上条河原（中巨摩郡敷島町荒川河原）に展開させていた。

十月十六日の合戦で、二千の武田勢が七倍余りの駿、遠勢を潰走させたので、その旗色になびいた国人たちが信虎のもとへ参陣してきたのである。

駿、遠勢を指揮する福島正成は、前回の敗北によって、慎重な作戦をたててきた。

彼は勝山城に五千の兵を置き、自ら一万の本隊を率い、躑躅ケ崎館の西北一里余の上条河原まで北上し、布陣した。

躑躅ケ崎館を挟撃する態勢をととのえた駿、遠勢に対し、信虎は本隊に攻撃を集中する方針をとることにした。

館にはわずか三百の守兵を置き、要害山城を千二百の精兵で固めさせる。

勝山城近辺には多数の軒猿を配置しているので、敵の動向は逐一注進されてくる。

信虎は挟撃された場合の対策をたてたうえで、主力を上条河原へ向けた。

身を裂くような寒気をはこんでくる北風のなか、荒川対岸に陣小屋をつらねる駿、遠勢は、附近村落の焼討ちをはじめた。

作物の収穫期であれば、焼討ちと同時に田畠薙ぎをするが、農閑期のため雪の積った田畑には手をつけられないので、駿、遠勢の焼討ちは徹底して、腐りかかった藁屋根の貧家といえども見逃さない。

連日雪催いの空に黒煙が幾筋もゆらめきのぼり、そのなかで火焔の舌がゆらめく。

焼討ちは、暴行掠奪をともなう。村人のおおかたは、両軍の兵が陣所を置くまえに逃亡していたが、逃げ遅れた男女が捕えられることもあった。

信虎の所領で焼討ちをおこなうのは、彼の威信を失墜させるためである。

「やりたいようにさせるずら。今度も吠え面かかせるいら」

信虎は本陣で、対岸の河原に薄の穂のなびくようにひるがえる敵勢の旗幟を眺め、太い声音でいう。

傍にひかえる幕僚たちは、声をそろえ応じる。

「さようでごいす」

信虎は足軽大将に命じ、里人を呼びあつめ山蔭、茂みへ伏兵として置かせている。

百姓たちは合戦のたびに戦場で拾い集めた武器、腹巻を持っているので、合戦になればゲリラ兵の役目を果すことができる。

「鳥目はあまるほどにはずんでやらあ。お屋形さまに加勢すりゃ、足軽にもとりたてて下さるじゃあ」

足軽大将は彼らをたくみにおだてあげる。

百姓たちは勇をふるい、敵にむかう決心をする。彼らの茅屋は駿、遠勢に焼かれ、黒煙をあげているので、鼓舞されるとたやすく敵愾心が湧きあがってくる。

「ほうけえ、ほうずらなあ、行かっか。よそ者にこれほど荒されりゃあ、放っとけねえ」

ゲリラ兵は敵陣のまわりに十四、五人の小人数で接近し、火矢をはなち、馬つなぎ場の馬を逸走させる。

川に食籠を洗いにきた兵が、いきなり矢で射られ落命する。

木蔭で尻をまくり、用足しをしている最中に、うしろからあらわれた百姓の刃にかかり、

あえなく斬り倒される者もいる。

昼夜をとわず、ゲリラに狙われているので駿、遠勢は夜も安眠できなかった。

篝火の傍に集まっている不寝番も安全ではない。濃霧にまぎれ忍び寄ってくる敵が、火のなかへ煙硝を投げこみ、彼らに大火傷を負わせるのである。

駿、遠勢は陣中見廻りの小姓勢を絶えずはたらかせ、ゲリラを近づけまいとしていたが、濃霧が低地を覆いつくす夜中と早朝は、動きがとれなかった。

「これでは長陣に利はあらず。はやばやと取りあいいたすべし」

福島正成は幕僚を集め、早急に勝敗を決する一戦をおこなうことにした。

「まえの合戦には、敵に夜討ちを仕懸けられ、不覚の後れをとりしによって、このたびは、こなたより夜討ちを仕懸くべしと存じまするが」

「うむ、それもよいが、何分にも地理にうときため、夜戦はいかがなものかのん。それに、この辺り一帯の百姓どもも、焼討ちを恨んでしきりにわれらに矢戦などを仕懸けてくるではないか」

「仰せの通りにござりまするが、敵もわれらより夜討ち仕懸くることはなしと思いこんでおりましょう。その油断をつけば、おもしろき戦ができようと存じまするが」

「うむ、さようのこともあるだわ」

福島正成は、夜討ちを敢行することにした。

一万の全軍のうち、三千人で武田の陣営を急襲するのである。

夜討ちのときは、一隊の人数を百内外の小勢とし、八方から敵を襲う。兵はすべて軽装で、夜目にも見わけられるよう白布の手印、肩印を持たせる。

号令をかける隊長は一隊に一人ときめ、上下一遍に辻風の吹きぬけるように敵陣へ斬りこみ、駆けぬける。

敵がうろたえ騒ぎたてれば、その機をのがさず諸方へ火をはなち、本隊が総力をあげ突入してゆく。

駿、遠勢が夜討ちの人数を出す支度をととのえていた日は、霧が濃く、陣前に逼っているゲリラ兵たちもその動向をつかめなかった。

霧は日暮れまえに突然晴れた。

信虎本陣で床几に腰をかけていた荻原常陸介が敵陣のほうを眺めわたしていたが、表情をけわしくした。

「あれは何事ずら。しきりに鳥が立ち、犬が吠えてごいす」

信虎も耳をそばだてる。

常陸介のいう通り、雪の野面に鳥の大群が飛びたち啼きさわぎ、野犬の吠え声もせわしい。

「あれは百姓どもを追いたてておるのでごいす」
常陸介はつぶやく。
「今川の者どもも、埋伏の者に昼夜をとわず攻めたてられ、いたたまれずに追いはじめたのであろう」
信虎も、敵陣にあらわれた動きに注目した。
「お屋形さま、これは今川の者どもが夜討ちを仕懸けてくるやも知れませぬぞ」
「なにゆえずら」
「されば、夜討ちに出ずるとき、動静を百姓どもに知られてはならぬゆえ、いまあのように追い払うておるのでごいす。
今川にては、われらがよもや夜討ちを喰らうことはなしと、気を安んじおると見てごいす。それゆえ裏をかく目算にござるじゃあ」
「いかさま、さようの目算やも知れぬずら。ならばその手当てをいたそうず」
敵が夜討ちを仕懸けてくるとなれば、まず狙われるのは先手である。
このため先手の陣営では夜間に篝火、灯火を明るくし、軍兵を夜廻りさせ、陣中を片時も寝させないようにしなければならない。
「そのほうが申す通り、夜討ちを仕懸けられしときの支度をいたすべし」
信虎はただちに麾下諸軍に命じ、今川の夜討ちへの警戒を厳重にさせた。

日が暮れそめたが、月はまだ出ていない。星がまたたく山野で、野犬がしきりに吠える。
陣所の四方へ、二騎、三騎ずつの侍衆が散開し、物蔭にひそんでいた。
「今川の奴輩は、うせおるかなあ。くれば生かせては退かせぬずら」
腕を撫して待つうち、山の端にほそい月がのぼった。
地表は雪明りで山野のかたちがわずかに見分けられるが、物蔭には闇が濃くよどんでいる。
荻原常陸介が原美濃守と顔を見あわせた。
「おのしは、敵がいつ仕懸けて参ると思うかや」
「この暗さなれば、まずは子の刻（午前零時）頃と存ずるずら」
「いかさま、さようの仕儀にてあろうよ」
二人は低い笑声をもらした。
夜が更け、寒気がつよまってきた。
子の刻にまだ半刻ほどはやい刻限、信虎本陣に軒猿の頭が駆けいった。
「ご注進申しあげまする。今川の者どもは、ただいま百ほどの小人数にわかれ、川を渡って参りまする」
「あい分ったずら。こなたよりも出でよ」
武田の陣所から、百人前後の小部隊が手分けして八方へ出てゆく。

彼らが足音を忍ばせ去ったあとは、風音と犬の遠吠えが聞えるのみである。

武田の軍兵たちは軒猿にみちびかれ、河原に出た。

そのまま林中に埋伏して時を待つ。

小半刻（三十分）を待たず、ひそやかな水音がして、武田勢の闇に慣れた眼が、今川の夜討ちの人数の川を渡ってくるのをとらえた。

「きおったじゃ。それ、手厚く迎えてやれ」

「合点でごいす」

武田の小部隊は、駿、遠の夜討ちの人数よりすくないが、弓に矢をつがえ、分散して敵勢の前後から襲いかかる態勢をととのえた。

遭遇戦は先に発見したほうが勝利を得るにきまっている。

夜討ちの人数は、続々と渡河してきた。

彼らは前後して武田陣前の河原にあがり、足音を忍ばせて迫ってくる。

火縄と油の壺をたずさえた今川の忍者たちが、先行して武田の陣小屋へ忍びいろうとしたが、闇中から音もなくあらわれた槍先に胸をつらぬかれ、あるいは一刀で首を刎ねられて倒れた。

彼らのあとにあらわれた夜討ち勢は、いつのまにか後方を遮断され、武田勢のただなかにいた。

不意に焔の尾を引いて火矢が飛び、夜討ち勢の頭領が鏃を背にうけ、みじかい悲鳴とともに地面に体をたたきつける。

「何事じゃ」

夜討ち勢は愕然と辺りを見まわすが、すでに遅かった。

武田勢が無言で襲いかかってきた。

半弓で矢を雨のように射かけたあと、大薙刀、長巻、鉄尖棒などをふりかざした軍兵が、眼前に立ちふさがる者を打ち倒し、叩きつぶす。

雪上に血の霧をふりまき、脳漿を飛び散らせ、今川の軍兵が倒される。

武田勢は、先手と二の手が入れかわる繰り引き戦法で、すさまじい威力をあらわし斬りかかって退く。

半刻（一時間）足らずのあいだに、なかばを討ち減らされた夜討ち勢は、武器を投げ捨て、われがちに逃げようとした。

そのとき侍槍の集団があらわれた。

彼らは今川勢が逃げまどうのを追い、容赦なく馬蹄にかけ踏みにじる。

悲鳴をあげ、川に駆けこむ残兵は、武田方の半弓の餌食となり、矢を受け水中に没した。

掃蕩戦は一刻（二時間）ほどで終った。

河原には折れた槍、自分差物、冑などが、屍体、ちぎれた腕、手指などとともに散乱し

た。

武田勢は夜あけまえのきびしい寒気のなかで血に濡れた具足を寄せあい、ときの声を三度おらびあげた。

彼らが意気揚々と引きあげると、信虎が出迎えた。

「敵は逃げおったか」

「さようにございす」

侍大将が地に膝をついた。

「まず半ばがほどは、討ちとってございす」

「それは重畳ずら」

押し寄せた敵の半数を討つほどの大勝利は、めったになかった。

昧爽のあかるみのなか、信虎は本陣で戦勝の酒宴をひらいた。

列座するのは、頭だつ者ばかりである。

武田の陣営は、宵のうちにもまして警戒をきびしくしていた。

勝利のあと、気をゆるめて陣所へ入り、兵具を脱ぎ、休息するのはもっとも危険であった。

せっかく勝っていたのに、戦勝のあとで重ねて攻撃を仕懸けられ、大敗した実例はめずらしくない。

信虎は床几に腰をかけ、幕僚、足軽大将らと祝いの大盃を干した。
篝火の揺れる炎に半顔を照らされた侍たちのあいだから、気負いたつ声や、笑声が聞えた。
信虎は傍にきて盃を捧げる家来どもに褒詞を与えるが、胸中からは氷塊のような緊張の思いが去らなかった。
――このたびは、まずは勝ったずら。したが、この先はいまだ分らぬ。何と申しても敵の人数は多いゆえ、ひとたび楫の取りようを過ちしならば、今日のうちにも武田は滅亡するやも知れぬ――
信虎の胸中には、要害山城にいる妻と勝千代の姿が過ぎる。
親戚の者どもは勝千代の生誕を祝い、「ボコ見」にきていた。
ボコ見とは、嬰児を見がてら産婦の枕頭を見舞うことである。
「勝千代のためにも、負けられぬじゃ」
信虎は酒がみぞおちにしみて、身震いをした。

吹雪の荒れる日がつづき、気の滅入る寒気のなかで、鴉が声もなく飛んでいた。
武田勢が駿、遠勢の夜討ちを予知して逆襲を仕懸け、敵を敗走させたのち、数日が経って

いた。

両軍は陣を引かず、対峙したままたがいの出様をうかがっている。

武田方には国中、河内から新たに千余人の援軍が加わった。信虎の旗色がよいと見て、なびいたのである。

信虎は敵陣の動静を軒猿に探らせていた。

駿、遠勢はゲリラ兵の掃蕩を絶えずおこない、雪中に鳴子、逆茂木をつらね、奇襲を防ぐ態勢をとっている。

「敵は総人数のうち、三分の一を昼夜をとわず物具をつけさせ、陣中に置いて用心をいたしおりまする」

本陣へ注進にくる軒猿たちも、敵の陣所へ近寄りがたいという。

「うかと忍び寄れば、雪中に掘りし穴にひそみおる敵の物見に、矢を射かけられるゆえ、危のうございす」

信虎は荻原常陸介に聞く。

「あやつどもが仕懸けて参るのは、いつずらか」

「さよう、この雪中ゆえ、長陣はいたさぬでござりましょうが、いまだ機を計っておるやと察しまする」

「ならば、相手に急に仕懸けられ、泡んぶく吹くこともねえずら」

常陸介は、扇子で敵陣を指し示す。

「悪しき陣場と申すはあのようなる、四方高く、中窪き処にごいす。敵の大将福島は、合戦の場数を踏みし古つわものにござれども、人数多きをたのみ、雪風を避け、窪みに本陣を置いたのでござりましょう。いざ合戦取りあいとならば、一気に本陣を突き抜けば味方の勝ちは疑いなしと存じまするに」

駿、遠勢は陣所を構えるとき、附近の集落をことごとく焼き討ちしているので、長期の滞陣をするつもりはないと見ていい。

敵の大将福島正成は、夜討ちを仕損じたのち、陣形を岩のように手堅くそなえている。

信虎は雪が目路を覆って降りしきっている昧爽、足軽勢を敵の左翼に進出させ、我攻めを仕懸けさせた。

千余人の足軽勢は遠く迂回して渡河し、雪中を忍び寄る。

敵の見張りは、木立をつたい接近した足軽勢が、間近でときの声をあげるまで気づかず、矢を射かけると転がるように逃げうせた。

逆茂木を叩きつぶし、敵中に乱入した足軽勢は、たちまち三手に分れ、陣小屋から走り出る敵影に半弓を射かける。

軒猿がカジキをはいた足で敏捷に駆けて、陣小屋の諸所に火をかける。

黒煙が噴きあがると、駿、遠勢は動揺し、豆を撒くように雪上に逃れ出た。

深い雪のなかでの白兵戦に慣れた武田勢は身軽に動き、敵を斬りたてる。

三手に分れた足軽勢は交互にときの声をあげ、寄せ太鼓を急霰のように打ち鳴らし、崩れたつ敵を追い散らし荒れ狂ったのち、迅速に引き揚げた。

駿、遠勢の他の陣所から加勢が駆けつけたときは、武田の足軽勢は川を渡って味方の岸に戻っていた。

荻原常陸介は、信虎に告げる。

「敵は雪に慣れておりませぬゆえ、不意に仕懸けなば、いかに用心いたしおるともあのようにうろたえ拙なき取りあいをいたすのでござい す。

されば、今日よりのちは昼夜を問わず攻めかけ、矢比にてときの声をあげ槍を組ますならば、敵はわれらのいきおいにひるみ、ついには総崩れとなるは必定にござい す。ただ、福島は賢しき大将ゆえ、かえっていきおい猛に打ちかかって参り、一挙に勝敗を決せんといたすやも知れませぬ」

信虎は全軍に合戦支度を命じた。

「今朝よりの取りあいに負けたる駿、遠の者どもははやばやと勝敗を賭けての総攻めを仕懸けてくるに違いねえずら。総勢あい構えて油断いたさず、敵に後れをとるでないぞ」

武田勢は刀槍の鞘をはらい、弓に矢をつがえて敵襲を待ちうけたが、その日は何事もなく暮れた。

荒川をはさむ両軍は、それぞれ陣所に篝火をつらね、警戒をきびしくして朝を待った。

鶏鳴とともに吹雪の朝を迎えると、武田本陣のある高処から一望の駿、遠勢の陣所に炊煙が立ちのぼりはじめた。

「お屋形さま、あれを御覧なされませ。いっせいに炊煙の立ちのぼるは、合戦支度をいたしおるに違いござりませぬ。われらは鋒矢形の陣形をとり、寡にしてよく衆を制する攻めくちをとらねばなりませぬずら。また伏奸を二ヵ所に設け、敵を引き寄せて討ち倒す方策をとるがよしと存ずるでごいす」

「それはよき思案ずら」

信虎は常陸介の方策を容れた。

敵陣には、午の刻限（正午）に、多数の援兵が到着した。

旗差物をつらねる人数は雪中に延々とつらなり、二千や三千ではない。

物見に走った軒猿が、息をきらせ戻ってきて、信虎に注進した。

「ただいま勝山城より別手の人数が敵陣に着到いたしてごいす」

勝山城にいて躑躅ヶ崎館を狙っていた駿、遠の別動隊が、本隊と合流したのである。

「これにて福島が手のうちは読めてごいす」

荻原常陸介が、猿頬をつけた顔をうなずかせる。

駿、遠勢は未の上刻（午後二時）頃、左右にひろがり鶴翼の陣形で河岸へ押しだしてきた。

武田勢は鉾矢形の密集隊形のまま動かない。信虎は河岸に近い樹林の二ヵ所に、千人ずつ伏兵を置いている。

駿、遠勢は寄せ太鼓を打ち、法螺貝を吹き鳴らし、先手の弓衆に遠矢を射かけさせつつ、粛々と浅瀬を渡りはじめた。

武田勢は楯をならべ、動きをあらわさず待ち構えている。

駿、遠勢は渡河を終えたが、河岸に密集して前進の足どりを停めた。

常陸介が信虎に告げた。

「あれをご覧じませ。押しきたる敵人は、鶴翼の陣を張るといえども、左右の手先にて馬上の使い番の忙しく馳せまわるが見ゆるでございす。

あれは合戦の間際にて一手になるべききざしと存じまするに」

「うむ、寄せてくる足を停めしは何故ずら」

「お味方が伏奸の埋伏いたす気配を、察せしやに見ゆるでございす」

信虎は黙ってうなずく。

彼は二倍半の優勢な兵数をたのむ敵勢が、こちらの思う壺にはまりかねない状況になってきたので、胸の高鳴りをおさえられず、目の下頬当のうちでこきざみに歯をうちあわせる。

信虎は常陸介のすすめに従い、伏奸を二段に置いた。

一段めの千人は、わざと敵に動静を看破られやすい場所に伏せ、二段めはそのうしろへ二町ほど離し伏せさせた。

一段めの伏奸は、敵に発見され攻撃を受けると、すみやかに退却する。

駿、遠勢は埋伏の兵が去ったのに気を安んじ、総攻めをしかけてくる。

そのとき、二段めの伏奸が槍先をそろえ、敵勢の右手から突入するのである。

二段めの軍兵たちが埋伏しているのは森蔭ではなく、まばらに木の生えた窪地で、見通しが悪くないように思える地形であったが、接近してくる敵勢の視野からは死角になっている。

密集隊形で押し寄せてくる軍兵たちは、槍、薙刀、長巻、熊手、薙鎌などの長柄の武器を、左手を前に右手を後ろにして持っているので、左方から仕懸けてくる敵には迅速に対応できるが、右方からの攻撃には全軍が方向を転換しなければならない。

このため、一万五千の敵勢が突撃してくる際、千人の小勢でも右側面から斬りこめば、その足取りを容易に乱すことができる。

信虎は、味方にくらべはるかに華麗な軍装の駿、遠勢がふたたび動きはじめ、背負い太鼓、銅鑼、拍子木を打ち鳴らし、ゆるやかに迫ってくるのを馬上で眺めるうち、胴具足の裾板がカチャカチャと音をたてるほど、足が震えてきた。

弓の名手である彼は、三人張りの尺籐弓をかかえ、二十四本の征矢を差した漆塗空穂を腰高にくくりつけていた。

「今川の臆病侍どもが、やって参るずら。手痛きほどに矢の馳走を参らせてやらあず」

信虎はさきほどまで右手から吹きつけていた風が、背後から吹きはじめたのに気をよくした。

強い追い風を受ければ、遠矢の射程は一町ほども延びる。

駿、遠勢は頭形兜、桃形兜、烏帽子形兜など新しい南蛮風を加味した兜をかぶり、壺袖、胴腹巻、鎖佩楯、伊予佩楯などの軽快な武装をしていた。

武田勢は直垂のうえにふるびた鎖腹当をつけ、頭には額鉄を巻いただけの軽装の者が多い。

今川の名のある武将は、馬鎧のうえに鳥毛の覆いをつけた軍馬にまたがり、ビロード、毛長ビロード、更紗などのあざやかな色どりの陣羽織を着ている。

「今川の侍どもは、男なるに化粧をいたすと聞くが、戦支度も女性が衣裳のごときものじや」

信虎は気をたかぶらせ、吐きすてるような口調でいい、幕僚たちが低い笑声をたてる。

まもなく合戦がはじまる。

午後になって雪はやんだが、北風は吹きつのって、白皚々の野面に雪煙をたてている。

武田勢の陣列がどよめいた。

駿、遠勢が長く尾を引く法螺貝の音とともに急進してきたのである。

横列の陣形のあいだを母衣武者が忙しく馳せちがい、敵は両翼をちぢめ、本陣勢を中心に密集隊形をとりはじめた。常陸介が小手をふりかざしていう。

「やはり一手になってごいす。相手が一手ならば、こなたよりは鉾矢形にて突き抜くのみにごいす」

原美濃守は父の能登守とともに、精兵千人を率い、二段めの伏奸を指揮していた。

駿、遠勢は、河岸の森陰にひそんでいた武田勢の一段めの伏奸を発見し、右翼の兵が襲いかかった。

伏奸は円陣をつくり、槍衾をつらね退却してくる。

彼らは雨のように射かけられる矢を木楯で防いでいたが、投石兵が三方からとりかこみ、縁を刃物のように磨いだ石を投げはじめると、たまりかねて陣形を乱し、われがちに逃げ走る。

石に打たれ薙ぎ倒される軍兵の数がふえ、雪上に胡麻を撒いたように倒れ、動かなくなる。

「防ぎ矢をいたせ」

信虎は弓衆に命じ、みずから陣頭に出て強弓を引く。

駿、遠の投石兵は、遠矢を浴びてひるんだ。味方の伏奸はその隙に得物を捨て、味方の陣営へ逃げこんだ。

「いよいよ、総攻めずら」

信虎は全軍に鉾矢形の密集隊形をかためさせ、陣頭に出た。

たがいの矢戦がはじまっていた。

双方の主力が激突する決戦がはじまろうとしている。

信虎は馬上に身をのばし、大音声で全軍を叱咤した。

「まっすぐに指しかけたる軍勢を廻さず、ひとつらふたつら斬り崩すべし。敵中を突き抜かざれば討死いたすと覚悟せよ」

武田勢のあいだからまばらにときの声があがり、やがて総勢が雪雲のたれこめた空にとどろく喊声をあげた。

寄せ太鼓が乱打され、寄せ貝が大、大、大と鳴りわたる。

男たちは闘争本能を沸きたたせ、歯をむき、なだれのように敵にむかって走った。

信虎は侍槍の一団の先頭に立ち、敵将福島正成本陣の旌旗をめざし、槍薙刀をふりまわし殺到してゆく。

矢が耳許に不気味な唸りをあげ、みじかい絶叫とともに落馬する者がいるが、ふりかえる余裕もない。

信虎は恐怖を忘れ、槍をふりかざし敵中に駆けいり、雑兵を馬蹄にかけ、眼のまえを横切る騎馬武者の兜を槍先で殴りつける。

喚声と絶叫、剣戟の打ちあう響き、馬のいななきのうちで信虎は敵に襲いかかり倒すと、次の敵に馬首をむける。

味方は勝っているようだと、信虎は戦いつつ漠然と感じている。彼は槍を棄て、頭から敵の返り血を浴びつつ大太刀をふるう。

汗と血に濡れた彼の若い体軀は、まだ力を消耗していない。

味方の軍兵は多勢の敵に斬りこみ追い退け、狂ったように闘っている。

突然、駿、遠勢が動揺した。

天にとどろく喊声とともに、原能登守、美濃守の二段めの伏奸が敵の右側面から斬りこんだのである。

信虎と必死に斬りむすんでいた敵勢がひるみ、背をむける。中陣に突入されたので、隊形が乱れた。

乱軍のなかで、大音声が敵味方の耳にとどいた。

「原能登守、ただいま、今川の大将福島正成を討ちとったり」

武田勢はつづけざまにときの声をあげる。

駿、遠勢は伏奸の奇襲に前後の陣形を断たれ、怯えて総崩れとなった。

わずか半刻（一時間）ほどの合戦は、武田方の大勝となった。

「追え、一人もあまさず追い討ちいたせ」

信虎は馬上に躍りあがって叫ぶ。

かれは躑躅ケ崎館へ戻り、勝千代を抱きあげるわが姿を、雪空にえがいていた。

走馬

冴えわたる秋の陽ざしが、山中湖の水面のあおみをふかめていた。天文四年（一五三五）八月二十一日の昼さがりである。

山なみの樹林にしみいるようにひぐらしが啼きしきり、薄の銀の穂のゆらぐあたりに赤とんぼの群れが浮いている。

武田勢は湖畔の高処に旗差物をつらね、陣を敷いていた。

郡内の小山田越中守信有の小山田勢と、信虎の弟勝沼信友の勝沼勢をあわせ、二千人である。

信友は勝沼（東山梨郡勝沼町）を領し勝沼氏を称しているが、常時郡内にいて小山田氏ら郡内諸侍の動向を監視するとともに、関東からの北条勢力の進攻にそなえていた。

武田信虎は武田勢の主力を率い、駿河との国境万沢口（南巨摩郡富沢町万沢）で、今川氏輝と交戦状態にはいっている。

六月五日、信虎は富士川沿いに南下し、今川氏輝と二十七日に対陣した。

いずれも大兵を投入したので、決戦の機をつかみにくい。五十日ほどのあいだ対峙したのち、八月十九日に合戦となった。

武田勢は今川にくらべ兵力、武備ともに劣るが、戦闘になると、山地に育った足腰のつよい精兵が、変幻自在の白兵戦を挑んでゆくので手ごわい。

氏輝はさっそく小田原の北条氏綱、氏康父子に救援をもとめた。

氏輝の父今川氏親と北条氏綱は従兄弟で、氏輝の姉が氏康に嫁している。

氏綱父子は大軍を率い、八月十六日に小田原を進発した。

「妙法寺記」によれば、総勢二万四千人である。

彼らは籠坂峠を越え、山中（南都留郡山中湖村）の小山田、勝沼ら武田支隊を一蹴し、郡内へ侵入して武田信虎の背後を衝こうとした。

山中湖畔に陣取っている武田支隊は、北条の大軍が迫っていることをまだ察知していない。

武田の軒猿の頭領である小次郎という坊主は、甲斐、信濃から関東一円に名のきこえた辣腕の忍者であったが、万沢口に従軍していた。

勝沼信友の本陣に、信虎の嫡子太郎勝千代がいた。十五歳の太郎は傅役の板垣信方につきそわれている。

太郎は父信虎にうとまれていた。太郎の母は信虎に敵対した大井信達の娘である。躑躅ケ崎館にいる彼女は、大永五年（一五二五）に次男の次郎（のちの信繁）を生み、大永八年（一五二八）に三男孫六（のちの信廉）を生んだ。

信虎は太郎を疎んじ、次郎を愛していた。

太郎が舅の大井信達に似た慎重な性格であったためである。

信虎は十四歳で家督を相続してのち、叔父信恵父子をはじめ国中の諸侍の叛乱を制し、北条、今川、諏訪らの隣国大名の侵攻を排除した。大永元年の今川方の大攻勢をしりぞけたのちは、扇谷上杉朝興を援け、北条氏と対抗し、関東に覇をとなえるべく勢力を伸張してきた。

幾多の困難を乗りこえ、戦国大名の実力を養ってきた信虎は、気性がはげしい。

彼は少年期から、敵を一人でも多く殺傷するために戦場へ出て、死闘をかさねてきた。

大名たちは、自らの権力を拡張するために死を賭して戦う。家来を犠牲にするのをためらう余裕はない。

当時の大名の惨忍な所業は、枚挙にいとまのないほどであった。

美濃の斎藤道三は、わずかな罪を犯した者を捕えると、牛裂きの刑に処するのを好んだ。

絶叫しつつ、五体を引き裂かれて死んでゆく人を眺めたのしむのである。
また大釜の油に罪人を入れ、釜の下の火をその家族に焚かせ、人体の空揚げをするのも好んだ。

信虎もそのような狂暴性を身につけていた。

大永七年（一五二七）鷹狩りで獲物がすくないことがあった。

信虎は機嫌を損じ、こめかみに青筋をたてた。たまたま附近の百姓が通りかかると、彼は弓をとった。

「あやつめがうろつきおるゆえ、鳥がこぬずら」

家来たちがとめる間もなく、信虎はいきなり矢を放ち、百姓を射殺した。

また、あるとき外出すると、道端に妊った女が土下座していた。

信虎は通りすぎかけて馬をとめ、近習に命じた。

「あの女子の腹子を見たいけえ、連れて参れ」

恐怖におののく女を館に連れ帰り、戸板に縛りつけ衣服を剝ぐ。

「お屋形さま、気狂いなされたかや」

「人のなすべき事にはありませぬずら」

重臣が二人、顔色をかえて留めようとした。

「うるさや」

信虎はいうなり氷のように磨ぎすました大脇差を抜き、一人を肩口から乳下まで斬りさげ、いま一人を脳天から鼻柱まで割りつけた。

実戦で殺人に慣れた信虎の手のうちはあざやかであった。

彼は頭から浴びた返り血を拭いもせず、妊婦の傍へ歩み寄ると一刀で腹を裂き、胎児をとりだした。

またあるとき、信虎の小姓頭が「日山」という大猿を誤って殺してしまった。

「卒爾なるふるまい許しがたし。腹を切れ」

信虎は即座に小姓頭に切腹を命じた。

歴戦の家来を、猿一匹殺したことで死なせるのを見かねた重臣たちが諫めようとしたが、信虎はこのときも腰刀をふるい、二人を殺害した。

このような挿話が事実であったか否かはさだかではないが、信虎が悪逆無道のおこないをかさねたという説は、「妙法寺記」「塩山向岳禅庵小年代記」にある。

信虎が太郎を疎んじるようになったのは、沈着で考えぶかい性格の息子に、板垣信方ら家老たちが期待を寄せはじめたためであるかも知れない。

板垣は武田一統衆で、謀将として知られていた。彼は武田家では諜報をあつかい、素っ破、軒猿を駆使して諸国の情勢を探っていた。

彼は戦陣では常に信虎の帷幄にいて、作戦立案にかかわるのが常であったが、太郎が山中の守備を命ぜられると自ら頼んで同行した。

太郎は三百人のむかで組を率いてきていた。

むかで組とは、侍大将原美濃守虎胤が訓練したレインジャー部隊である。

美濃守は兵卒のうちで、山登りに長じた者を選抜し、特殊な訓練をほどこした。

むかで組の軍兵は、鉤縄や、手首にとりつける手甲鉤、足につける猫足と呼ぶ鉄爪を用い、絶壁、大木に猿のように駆け登ることができる。

山間での合戦で、むかで組を用いると敵の意表をつく奇襲が思いのままである。

板垣信方は、信虎が太郎を山中の勝沼信友のもとへ派遣するのには、理由があると見ていた。太郎を身辺からはなし、危険な場所に配置したいのである。

信虎は次郎を要害山城に置いている。彼は太郎が万一討死を遂げても、次郎にあとを嗣がせればよいと考えているようであった。

板垣信方は山中湖畔に着くと、崖の下に陣所をさだめた。

勝沼信友は反対した。

「それは悪しき地形ずら。陣取るべき地形は、前に切所をかまえ、背に味方つづき平陸なるところを用うべしと申すじゃ。敵がこの地へ押し寄するときは、柵のうちをかため、外へ斬っていずることなく、長陣といたさばよい。

そのうちに味方の後巻き（救援）が参らば、勝ち戦は疑いないずら。おのしどももわれらが陣とひとつになれ」

勝沼信友のいう通り、武田勢は湖畔の小高い場所に木柵をつらね、堀をふかくして砦を構えていた。

板垣信方は信友のすすめに従わなかった。

「城を守るに、再々と討って出でず、門戸をかため討って出でざるは落城しがたしと存じまする。

されども、われらはむかで組を引具しておりますれば、山を登るは坦途をゆくがごとき者どもばかりにございす。されば、わざと御本陣よりはなれ、山際に逆茂木をつらね陣小屋を置き、敵来らば山中を駆け走ってその意表をつくはたらきをいたすでございす」

信方の目的は、勝沼信友援護にあるのではない。

太郎を無事に府中へ帰陣させることにある。

信方がえらんだ崖下は、小山田、勝沼連合軍の本陣から半町とはなれていないが、むかで組にとって都合のよい地形である。

背後の山は富士の裾野につらなっており、奥がふかく、昼なお暗い一帯の樹海である。しかも、陣所の背後には、およそ百尺の苔むした断崖が屹立していた。

その崖は、むかで組の男たちでなければ登れない。太郎は陣所に着くと兵卒に背負われ、

崖を登ってみた。

頑丈な体軀の小頭が、太郎を負い紐で背にくくりつける。兵卒のひとりがさきに崖の要所へ鉄くさびを打ちこんでいた。

「さあ、参りやしょう」

小頭は背中の太郎の体重をものともせず、身軽に動いた。

彼は鉤縄を用いず、手甲鉤と猫足のみで飛ぶように崖を登り、たちまち頂きの草地にとりついた。

「よかろう、下りてこい」

信方が満足の笑みをみせ、下から声をかける。

下りるとき、小頭は鉄くさびを使いつつ、慎重に動いた。

板垣信方は山中に着陣してのち、小田原から北条勢が攻め寄せてくるときの道筋である籠坂峠、須走(すばしり)から、御殿場にいたるまでの要所に、軒猿を配置していた。

軒猿は、小田原城下にも潜入しており、北条勢が甲州攻めの兵を動かせば、ただちに飛脚篝火と呼ばれる狼煙(のろし)によって連絡してくる。

飛脚篝火での通信は、三本の狼煙を揚げたり消したりして、かなり複雑な内容をも伝えることができた。

太郎が山中に着陣してから一ヵ月ほどが過ぎていた。
八月十九日に駿河国境の万沢口で合戦があったとの注進が太郎のもとへ届いたのは、その日の深夜であった。
「これはきびしきことになるやも知れぬでごいす」
板垣信方は表情をひきしめた。彼のもとへは、小田原へ潜入させている軒猿から、何の報告も届いていない。
小山田信有、勝沼信友もそれぞれ素っ破を放ち敵の消息を探っているが、やはり北条方の動静にさし迫った様子はないと見ていた。
北条勢二万四千がすでに小田原を進発しているのに、情報が武田方に届かないのは、こちらの放った諜者がすべて身許を探知され、隠れがを急襲され討滅されていたからであった。
信方はむかで組の使い番に命じた。
「小田原表の軒猿どもより何の知らせもなきは、不審ずら。おのしが探って参れ」
使い番が籠坂峠を越え、小田原へ向ったのは八月二十日の明けがたで、二十一日の昼すぎになってもまだ戻ってこない。
「ちと面妖にごいす。用心いたすにしかずと存じまする」
信方は、軍兵を指揮して陣所のまえに落し穴を掘らせた。
底に竹串を植えた穴は、草束で覆いかくした。

連日、時雨がしぶいたかと思うと陽がさす不安定な日和がつづき、気温がさがってきていた。

朝夕には濃い霧が谷間から這いだし、湖面を見る間に隠してしまう。

太郎は本陣にいて、守備の様子を見まわると、小山田、勝沼の陣所をおとずれる。

叔父の勝沼信友は、太郎をかわいがった。

「おう、参ったかや。このところ毎日霧雨が降ってうっとうしいずら。おのしは馬を責めては稽古にはげんでおるが、身を濡らすのは毒じゃ。ちと酒なと食べて休むがよいわ。かような山家暮らしをいたしおれば、府中へ帰りたかろうが」

信友は髭面を崩して笑い、瓶子を引き寄せる。

「かように、今川、北条といがみあうのも、兄者が河越の上杉との腐れ縁を断たぬおかげじゃ」

信友は、吐きすてるようにいう。

関東はながらく関東管領の家柄である山内、扇谷両上杉家が支配してきたが、しだいに両家は勢力を失い、かわって北条家が抬頭していた。

信虎は、大永四年（一五二四）に北条氏綱に江戸城を逐われ、河越城（埼玉県川越市）に拠る扇谷上杉朝興を支援し、関東へ進出しようとはかっていた。

そのため、信虎は北条、今川の二大勢力との戦いをくりかえしてきた。和睦しても平穏な

時期は長続きしなかった。

天文二年（一五三三）に、十三歳の太郎は上杉朝興の娘を室に迎えた。新妻は一年余を太郎とともに暮らし、翌年十一月に懐妊したまま世を去った。

政略結婚によって迎えた妻であったが、太郎ははかなく世を去った彼女への情愛を、いまだに身内に残していた。

勝沼信友は、武田一統のうちでも将来を嘱望される大器で、信虎とちがい、人情をわきまえていた。事をなすにあたり、綿密に情勢を分析判断して勝機をつかむ鋭敏な感覚は、衆にぬきんでている。

彼は山中湖畔の砦を、四方へ等分に兵を配置する四武陣という陣形に構築していた。

山中は甲斐と駿河をむすぶ御坂路の宿駅として、ふるくから栄えた集落である。

御坂路は延喜式にも記載されている甲斐国三駅の設けられた官道で、当時は鎌倉街道と呼ばれていた。

信友は、民家のあつまる地域からはなれ、砦を築いた。

「一昨日万沢口にて合戦があったというに、小田原表より便りがなきは何故かのう。今川と北条は、戦出入りがおこれば、きっと後巻きしあうのに、いまだ出てうせぬ」

太郎が聞く。

「物見をお出しなされてごいすか」

「うむ、五、六人を今朝がた須走あたりまでつかわしたゆえ、おっつけ戻るずら」

「われらが陣所よりも、昨日の明けがたに使い番を小田原へむけ立たせてごいすが、いまだ戻りませぬ」

「それはさきほど信方より聞いたが、何ぞ変事が出来しておるやも知れぬ」

信友も、小田原からの軒猿の注進がないのを警戒していた。

傍にいて、長囲炉裏の燠で焼く自然薯を、ときおり火箸で動かしている小山田信有は、酒気を帯びた顔をむけた。

「軍監殿のお気懸かりなるは、もっともにごいす。それがしも、嵐の前触れがごとき戦気の身に迫るを覚っており申す。

されども、この辺りの間道、杣道はわれらの知りつくせしところなれば、小田原より大兵の押し寄するとも、いったんは吉田に退き、たてこもってお屋形の後巻きを待てば、危うきことはなきものと勘考いたすずら」

信友がうなずく。

「繋ぎ城も幾つか置いておるゆえ、それを伝うて退陣いたさばようごいす。今朝がたより柵のまえに逆茂木、堀のまえに鹿垣を幾重にも結わせてござれば、万余の大敵といえどもたや

すくは踏みやぶれぬでごいす」

小山田信有が盃をかたむけ、吐息をついて口をぬぐう。

「まさか万余の敵が寄せくることもあるまいが、ひと支えして手ごわき戦をしてみせたきものでごいす」

太郎が信友にたずねる。

「湖面のかたより船、筏にて押し寄せる敵は、いかに御あしらいなされまするや」

信友が答えた。

「それはよきところに気づきしものよ。たしかにこの陣場は左手に湖面をひかえおるゆえ、それへの備えが肝要じゃ。船、筏には炮烙火矢を支度いたしおるゆえ、惜しむことなくふるまえるずら」

炮烙火矢とは、丸い銅器のなかに爆薬と多数の鉛弾を詰めたものである。口火をつけておいてそれを投げれば、敵の頭上で爆発し、人馬を殺傷する。

「いまひとつ、投石の支度もいたしておる。こなたへ出てみよ」

信友は太郎をともない、本丸の庭に出る。砦の右前方に雑木林がある。

そこで大勢の人夫がはたらいていた。

「あれは投石の支度でごいすか」

「いかにも」

樹木の梢に縄をかけ、十数人でかけ声あわせて引く。
樹幹が弓なりに曲ると、縄尻を地面に打ちこんだ杭にしばりつけておく。
梢に近い部分に笊をくくりつけてあり、敵が籠坂峠を越え肉迫してくると、笊に大石を入れ、縄を切るのである。
石は二貫目ほどのものでも樹幹のはねかえるいきおいで、一町ほどは楽に飛ぶ。
太郎は立木を利した投石の威力がすさまじいものであると、聞き知っていた。
「あの林で三百個あまりの石を飛ばすゆえ。わざわざ山越えの客をもてなすに、よき馳走ずら」
信友は太郎と眼を見交し、口辺に笑みをうかべた。
武田支隊の陣場は縦百五十間（約二百七十三メートル）、横九十間（約百六十四メートル）で、柵と堀を構えている。
堀の幅は二間（約三・六メートル）、深さ一間半（約二・七メートル）である。
陣場の前後左右には四門を建て、四隅には高さ九尺（二・七メートル）、方五尺（一・五メートル）の矢倉を置いている。
陣中に兵粮の蓄えは充分で、用水もありあまるほどである。
二千の兵で籠城すれば、指揮官の手際に遺漏さえなければ十倍の敵を支えるのも不可能ではなかった。

信友は太郎に夜中の心得を教える。

「夜中は人に近寄るをつつしまねばならぬ。日頃見知りおきたる者といえども、五、六間より近寄らせてはならぬのじゃ。反間と申すことがあるゆえずら。

大将の傍には、篝火を多く燃やしてはならぬ。敵の首級を提げて実検を頼む者とても、たやすく近づけるではない」

八月二十一日は何事もなく暮れた。

武田支隊の諸陣から小田原へ向わせた使い番、物見は、一人も帰らない。

勝沼信友は夕刻に籠坂峠へ五十人ほどの軍兵を向わせた。まもなく北条勢が押し寄せてくると判断したのである。

辺りが暗くなると、陣場の外周に捨て篝火が焚かれた。

夜討ちにそなえ、柵門の外に埋伏の兵が散開し、叢に身を隠した。

闇がふかくなっても、火光に照らされた林に、鳥の声が絶えなかった。

太郎は崖際の陣中で、行水を浴びたあと下着を替え、香をたきしめる。

むかで組の軍兵たちは、板垣信方の指図で小荷駄の牛馬を屠り、夕餉にあてた。牛馬一頭で五十人の一日分の食糧となる。

「今宵か明日の明けがたには合戦になるにちがいなし。いまのうちに身に精をつけておけ」

信方は身辺に迫る戦のにおいを嗅ぎあてていた。

「小旦那さま、あれをご覧なされませ」
陣小屋の軒下に置いた床几に腰かけた信方は、暮れはてた空を指さす。
「かようの晩景に及び、群鳥の飛びまわるは異変にございす。北条の人数が峠に近づきおるにちがいござりませぬ」
闇中で何の鳥とも知れず、騒がしく羽音をたてている。
腹巻をつけた太郎は、空を見あげつつ胴震いをした。
彼には合戦の経験がある。
北条氏康の軍勢との小競り合いで、都留郡の甲、相国境で戦った。
彼我ともに千余人の寡勢であったが、太郎は野戦の凄惨な殺戮の有様を眼の辺りにした。
軍兵たちは合戦がはじまると、それまでの柔順な物腰を一変させ、獣のように吠え、白刃に火花を降らし敵と斬りむすんだ。
血を満した皮袋である人体は、槍先につらぬかれ、刀身で切り裂かれると、おどろくほど多量の真紅の液体を噴出させる。
草原での白兵戦は、たがいのなかばが死傷するまで続き、旗本本陣勢で近習に取り巻かれている太郎の周りにまで、なまぐさい血のにおいが粘りつくように濃くたちこめた。
太郎は首筋に斬りつけられた雑兵が、ちぎれかけた頭をななめに傾げたまま十歩ほど走ってから、地面に体をたたきつけたのを見て鳥肌をたてた。

信方が太郎の耳もとにささやきかけるようにいう。
「小旦那さまは、たとえ敗軍とあいなるとも御身を全うなされねばなりませぬ。それがしがお護りいたしまするゆえ、陣中よりお離れになりませぬようなされて下されませ」
夜が更け、亥の四つ（午後十時）頃になると、冷えこんできた。
陣中には昼のように篝火を焚き、見廻りの横目役、小姓衆が槍先を光らせ徘徊する。
子の九つ（午前零時）過ぎ、夜空に狼火があがった。
物見の兵が、本陣へ駆けこんできた。
「ただいま、籠坂にて狼火があがってございす」
太郎は太刀を腰にして、外へ出た。
朱色の狼火が闇中に鮮明に光りつつ、二条になり、三条にふえた。
右手の火が消え、つづいて左手の火が消える。やがて左手からあらたな狼火が打ちあげられた。
「うむ、北条の奴輩が大兵を催し、峠にさしかかるとのことにございす」
板垣信方は呻くようにいった。
武田の陣営には士卒が駆け走り、馬がいななき、戦支度に騒然となった。
小山田、勝沼の陣所から、騎馬侍衆の率いる足軽の小部隊が幾組か出て、闇に消えてゆく。

炮烙火矢のはいった重い木箱を担いだ小者が四、五人で太郎の陣所へきた。
「信友旦那からのお届けものにございす。敵が寄せて参らば、お使い下されませ」
柵の内側は弓衆が楯をつらね、配置につく。
弓衆の持楯は、筋金を縦横に張った杉板でこしらえたものである。
矢狭間をあけた、長さ六尺、幅一尺二寸の持楯は、運搬しやすいよう下部に車がついている。
両脇に掛け金があり、横につらねた楯を連結すれば塀のようになる。
太郎が信方とともに陣備えを検分していたとき、籠坂峠のほうから一隊の人馬があらわれた。
「何者じゃ、さては北条の奴輩か」
「矢を射掛けよ」
「いや、しばらく待て」
槍を構えた足軽勢が駆け寄ってゆく。
草を分けて近づいてきたのは、信友が籠坂峠へ派した一隊であった。
百足の足のように鉄の棘を植えたやがらもがらを担いだ足軽頭は、全身から血のにおいを放っていた。
彼は陣所へ戻ると信友のまえに膝をつき、注進する。

「小田原の奴輩には、須走より籠坂に押し寄せてごいす。夜明けの霧の晴るる頃を見はからい、山中に乱入いたすは必定の形勢と存じまする。われらは敵の先手に仕懸けられ、囲みをやぶり戻ってごいす」

信友は具足の肩当の紐を小姓に締めさせつつ聞く。

「敵の人数はどれほどじゃ」

「とても一万ほどの数にてはなく、二万のうえと見てごいす」

信友の周りに集まった侍たちが、低くどよめいた。

「五兵衛はいずれにおるかや」

連尺胴をつけ、筋兜を目深にかぶった使い番が、人垣を分けて出た。

「そのほう、組子三人を引き連れ、万沢口のお屋形に急を知らせよ。北条勢三万が押し寄せしゆえ、後巻きを頼むとな」

「承知つかまつってごいす」

五兵衛は白母衣を負い、馬に乗ると、中間三人を連れ、土をはねちらし駆け去った。

「この一日を凌げばよし。されば後巻きの人数が着到いたすゆえ、城は保つずら」

武田支隊は合戦支度をととのえ、敵を待った。

明けがたに濃い霧がたちこめた。

砦の前方に配置している物見が、しらじら明けの頃、櫛の歯をひくように注進に戻ってき

た。

「北条の先手は弓衆を先にたて、峠をこえてごいす」

「敵は二手にわかれ、一手は正面から、別手は東へまわりこむ様子にごいす」

「あいわかった。炮烙放ちどもは湖水の側へまわれ。北条の人数は東手から陣場のうしろへまわりこもうぞ」

勝沼信友は急ぎ下知した。

太郎は朱漆塗肋骨胴具足のうえに朱ビロードの陣羽織をつけ、長巻を傍に置かせ床几に腰かけていた。

陣所のうちに霧が流れ、篝火の焔がぼやけてゆらめく。

柵内には弓衆が矢束をひき寄せ、合戦のはじまるのを待ちかまえている。

辺りが明るくなってくると、視界が塞がれているのが分った。

耳をすませていた太郎は、峠の方角でかすかな地響きを聞いたような気がした。

「いま、音がしたずら」

「さようにごいす。峠路を下りて参りし様子にごいす」

板垣信方は霧の奥を睨んでいた。

地響きは間を置いて聞えていたが、しだいに切れめがなくなってきた。やがて馬のいななき、車のわだちのきしむ音が聞き分けられるようになった。

まもなく、さほど遠くない場所で、蜂の唸り声のような音が聞えた。
「何じゃ」
「石を飛ばせておるのでございす」
東手の林にある投石の仕掛けを、足軽たちがつかいはじめたのである。
大石が風を切る音が、太郎の耳にとどいた。
人馬の悲鳴が聞える。
敵勢が石に打たれ、被害をこうむっている。
「あれでしばらくは寄せ手の足をとめられまするずら」
信方がいう。
巨石が雨のように飛んでくれば、敵勢は退却するほかはなかった。
視野は霧にふさがれ、対応のすべもない。
太郎たちが待ち構える陣所の間近に迫っていた北条勢の気配は消えた。
陽が出たあとも、霧は乳を流したようにわだかまったまま動かなかったが、昼前に風が出て、湖面からしだいに晴れてきた。
霧が流れ動き、湖面が見えてくると、砦の前面に出ている武田の足軽勢がどよめいた。

湖上に大小の船を浮かべ、北条勢が漕ぎ寄せてくるのを発見したからである。
砦の柵内から、船上に楯をつらねる敵兵に矢が飛ぶ。
東手の林で投石をおこなう足軽たちが、焙烙火矢を投げはじめた。
空にむかい投げあげられた銅球は、くるくると回りつつ反転して、船上へ落ちてゆく。
最初の一発は狙いをはずし、水面で爆発したが、周辺の船が楯を吹きとばされ、二、三人が湖に落ちた。
二発めは狙いを誤たず、敵兵を満載した船上で、蒼白の閃光を放ち雷のような轟音とともにはじけた。
船に乗る数十人の敵兵は暴風に吹きとばされるように舷から転げ落ちる。
竿をあやつっていた船頭も倒され、船は動きをとめた。湖面にあかぐろい血の色がひろがってゆき、傷つきつつも岸辺へ泳ぎつこうとする軍兵は、武田方の矢を受けて沈む。
三発めの炮烙火矢も命中した。
狼狽した船団は向きを変え、懸命に漕ぎ戻ってゆく。
霧は急速に晴れてきた。
幕が引かれるように霧が去り、前方の斜面が浮きあがるように鮮明になってくる。
そこには左右に長く鶴翼の陣をつらねた北条勢がいた。
四半、簾、輪貫、蝶羽など、とりどりの自分差物をゆらめかせた敵の軍兵は、槍を立て

た徒武者、馬首をつらねる侍衆が数も知れずひしめきあい、突撃の機を待っていた。

板垣信方は密集した敵の軍団を見ると、太郎の耳もとにささやく。

「これはいけませぬ。勝沼殿がいかに駆けひき巧者にても、勝てませぬ。北条が陣備えを見れば、氏綱父子が在陣いたすに相違なく、われらが小人数にてはとても敵わぬにございす」

辺りが明るくなるにつれ、北条方の旌旗、馬標の模様が見分られるようになってくる。

武田の砦は、二万をはるかに超えると見える北条の大軍に、半円形に取りかこまれた。

「小旦那さまには、一時もそれがしが傍をお離れになられてはいけませぬ。このままにては袋の口を絞るがように取り詰められ、味方は逃げ場も失う大敗軍となるやも知れませぬでございす」

「うむ、爺の申す通りに動くずら」

太郎も、眼前に展開した北条勢のおびただしい人数を見て、息を呑む。

馬のいななき、組頭、小頭の叱声がさわがしく聞えていた北条勢が、急に静まりかえった。

旌旗、馬標が巻かれる。

「いよいよ寄せて参りまするぞ」

信方が鉾矢形の隊形をあらわした敵の先手を注視する。

やがて北条勢は突撃を命じる押し貝を吹き鳴らした。

はじめをみじかく刻み、終りを長く引く押し貝が、諸隊で吹かれたあと、押し太鼓がトントン、トントンと二打ちずつ急調子で鳴りはじめた。

寄せ手はまず砦の東方の林へ、足軽勢を散開突撃させる。

投石の仕掛けを守っている武田の足軽たちは、もはややむをえないと見て、まだ半ばが残っている樹木の引き綱を切り、石を飛ばせた。

北条勢は雨のように落下する大石のために幾らかの損害を受けたが、林中へ駆けいり、白兵戦をはじめた。

斬りあいになれば、人数の多い北条勢が有利である。

武田の精強な足軽も、一人に三人、四人が取りつき、前後左右から突かれ、殴りつけられ、足搦(あしがら)で倒されて、見る間に首級を取られてゆく。

総崩れとなって砦へ逃げこもうとした残兵は、背後から矢を雨のように浴び、柵内へたどりつくまえに、草原へ倒れ伏す。

投石兵が掃蕩されたあと、北条の主力が押し寄せてきた。

先手の徒武者(かちむしゃ)は歩楯(かちだて)、車仕掛けの竹束を先頭につらね、砦からの防ぎ矢をものともせず接近し、濠の向いまで進出すると、楯にうがった矢狭間から火矢を射かけてくる。

「あやつらは、火矢を押っこんで焼くつもりずら。気をつけよ」

小山田、勝沼の陣所では、小屋に火がつき白煙をあげかけたが、かろうじて消しとめる。

太郎の陣所へも、火矢が降りそそいでくるが、小屋には泥を分厚く塗っているので火の出るおそれはない。

勝沼信友は、怒濤のように肉迫してくる敵勢が、草束を濠に投げこみ埋めてゆくのを見ても動揺せず、ひたすら防ぎ矢を命じる。

「あわてることはねえだ。引き寄せて射ってとれ。矢を無駄にすな」

押しあい殺到してくる敵を狙う矢に無駄はなかった。

北条勢はときたま兵を引き、柵内から武田勢をおびきだそうとするが、信友は敵の策に乗らなかった。

彼はいよいよ支えきれないと判断すれば、ただちに全軍を退却させるつもりでいる。

「まだ持ちこたえられよう。兄者の後巻きがくるようだら、一日保てば勝ち戦ずら。勝てば望みのままに褒美をつかわすじゃ。精だしてはたらけ」

信友はもし敵の猛攻を支えきれなくなっても、退却する余裕はあると見ていた。

敵勢は濠を埋めて渡り、鹿柴（ろくさい）、逆茂木を打ちこわしはじめたが、楯で防いでも死傷者が続出する。

信友、信有は軍兵を叱咤（しった）する。

「決して浮き足立つでないぞ。このまま柵にとりつく敵を打ち払うておれば、陣場を落されはせぬ」

二刻（四時間）ほどのあいだ、武田勢は巧みに戦い、寄せ手に甚大な損害を与えた。太郎の陣所に肉迫してきた北条勢は、落し穴に悩まされ容易に近づけない。弓衆は持楯をつらね身を隠し、矢を放つので死傷者はわずかであった。

信友の陣所で、法螺貝が三度短かく鳴りわたり、つづいて五度は長く尾を引いた。

「あれは軍神勧請の貝にございす。勝沼殿はこの陣場を守りぬくお覚悟と見え申すら」

武田勢は善戦していたが、板垣信方は太郎の耳に口を寄せていう。「まずはこののち二刻（四時間）保てば、よほどのことにございす。ご覧なされませ。敵の先手ははや柵際に取りついてございす」

太郎の陣所に押し寄せる敵も、持楯、車楯で矢を防ぎつつ、落し穴を埋めてゆく。敵の人馬が駆け走る地面は地震のように揺れ、砂埃がたちこめてきた。

「爺、あれを見よ。あれは何じゃ」

太郎が指さす前方に、異様なものが見えた。

材木を方形に組んだ、高さ十間（十八メートル）もあろうと思える矢倉が、砂埃のなかを揺れながら近づいてくる。

それはあとから幾つもつづいてくる。

信方はひと眼見ていった。

「あれは組上井楼にございす。あのようなるものを持ち出されたなら、もはや柵を守れませぬ

ずら」

組立て式の井楼は、揺れながら小山田、勝沼の陣所のまえに出ると停止した。

厚板で囲われた井楼のうえから、敵の弓衆が砦のうちに矢を飛ばしはじめた。

井楼は十数基が横列となり、武田勢の頭上から矢を降らす。

武田勢は混乱した。

「おちつけ、小屋のかげにまわり防ぎ矢いたせ」

組頭たちが声をからし下知したが、矢を受け戦列を離れる者が続出してきた。

ついに柵が破られ、敵勢がなだれこむ。

「退け、退陣じゃ」

勝沼信友が大音声で退却を下知し、法螺員が陣払いの長声を五度流す。

北条勢が組上井楼を用いたので、信友の作戦は失敗した。

小山田、勝沼勢は持場を放棄し、潰走したが、北条の大軍が追いすがり殺戮する。

武田の騎馬武者が踏みとどまって、北条の侍と馬上で組打ちをはじめると、たちまち敵の他の一騎がうしろにまわり、ぼんのくぼへ小刀を突きたて、引きずりおろす。

援けようと駆け寄る武田の徒衆は、籠手のうえから刀を持つ右手を打ちおとされ、背中から槍先でつらぬかれる。

勝沼信友は近習勢に守られ脱出しようとしたが、北条の侍槍の猛攻を防ぎきれず、ついに

槍玉にあげられ、脇のしたから肺臓をはみださせ絶命した。

小山田信有は、三百余人の精兵とともに敵中を突破して吉田をめざし撤退しようとして、数千の敵に前途を遮断され、絶望して重囲のなかで血刀をふるう。

小半刻（三十分）ほどの血戦のあと、信有も主従もろともに討死を遂げた。

小山田、勝沼の陣所を陥れ、火を放った北条勢は、太郎の陣所をひと揉みに蹂躙しようと襲いかかった。

いましがたまでさかんに軍兵が出没し、矢戦をつづけていた太郎のむかで組は、一兵残らず消えうせ、陣小屋は黒煙を放ち、燃えあがっている。

「あやつどもは、いずれへ逃げおったか。陣場より外へ出でし姿を見かけなんだが」

殺気立った北条の軍兵が、残された陣小屋に槍を突きいれあらためたが、辺りは森閑として、火焔がひろがるのみであった。

「面妖至極じゃ、まさかこの崖を這いあがったわけでもあるまいにのう」

彼らは切りたった岩壁を見あげ、首をひねった。

太郎と坂垣信方は、むかで組の三百人とともに、崖上の茂みにひそんでいた。

彼らは味方の惨澹たる敗北のさまを、くわしく見届けた。

「あれほどまでに討たれたからにゃあ、叔父上も、もはや御存命ではなかろう。爺よ、かく

なりしうえは、あやつどもに一矢を酬いねば引き退けぬずら」
「いかが方略をなさるるでごいすか」
「夜になりゃあ、あやつどもは上、下の吉田あたりまでいったのが、ここへ戻るずら。そんだら気が弛み、酒盛りでもいたそうずら。そののち寝込みしを狙うて夜討ちを仕懸けりゃあ、仕損じはなかろう」
信方はうなずき、ほほえむ。
「上々のご方略にごいす。敵の油断をついての夜討ちは、かならずやお味方の仇討ちとあいなりまするずら」
太郎たちは崖上で日暮れを待った。
武田の砦は炎々と燃えあがっている。
戦死者の遺骸は、北条の足軽たちが湖畔に大穴を掘り、具足、腹巻をはずし素裸にして投げこんでいる。
むかで組の軍兵たちは、葉蔭から声もたてず、味方の屍体が褌まではずされて穴のなかへ折りかさなってゆくのを眺めていた。
湖畔には北条勢が千人ほど残留し、附近の百姓を駆りだして、戦場の掃除をさせている。
北条氏綱父子の本陣は、合戦のあとただちに二千余の旗本勢を率い、籠坂峠を越え、引き揚げていった。

「大将が小田原へ戻りしは、お屋形さまが後巻きに馳せきたるを按じてのことにござるずら。されば家来の者どももこのうえ深入りはいたさず、明日には退陣いたすに相違ござりませぬ。そこをひと当ていたすは、おもしろき趣向にござる」

氏綱父子が山中で武田支隊を粉砕したにもかかわらず、さらに侵入せず急遽引き揚げたのは、河越城の上杉朝興が北条主力出撃の隙をついて、小田原城を急襲するとの情報がはいったためであった。

太郎主従は藪蚊を払いつつ夜を待った。

日暮れまえに、地を震わせ北条の騎馬隊が湖畔に戻ってきた。

あとを追い足軽勢が到着する。

吉田の集落を焼き払った彼らは、それぞれ持ちきれないほどの掠奪品を運んできた。

彼らは湖に入り、体にこびりついた血と汗を流すと、篝火をつらね、炊煙をたてはじめる。

喚声、笑い声、口笛が聞える。

戦勝によって恩賞が手にはいるので、彼らは浮かれていた。

太郎たちは、篝火のまわりで酒宴をはじめた北条勢の様子を、眼下へ一望にできる。

侍たちは酒に酔い、戯れ唄をうたい、手拍子をうって剽げ舞いを舞いはじめる。

「いましばらくでございす。あやつどもが寝しずまりしところを見はからい、突っこんで斬り

まわり、そのまま山手へ走るがようごいす」
「うむ、存分にはたらいてみせるずら」
太郎と信方はうなずきあう。
戌の五つ半（午後九時）頃、むかで組は信方の指揮で崖を静かに伝い下りた。
太郎の周囲は屈強の精兵二十人が護衛した。
「小旦那さまは、ここにおられませ」
信方が崖下の闇に身をかくしているようすすめたが、太郎はかぶりをふる。
「儂が先に立って斬りこむほどに、おのしどもはついて参れ」
むかで組は、二万余の敵勢が寝静まった頃を見はからい、ときの声をあげ斬りいった。
不意をうたれた北条勢は、大軍であるだけに深刻な混乱をひきおこした。
彼らはわずか三百のむかで組に散々に討たれ、味方の謀叛とまちがえ、具足をつける間も惜しみ、直垂姿で峠へ逃げ走った。
「大兵といえども不意をうたれなば、あれほどまでに見苦しきふるまいをいたすものか」
太郎は土煙をたて潰走する敵を見送った。

太郎が元服して、将軍足利義晴の偏諱をもらい、晴信と名乗ったのは、翌天文五年三月で

ある。

三月なかば、甲斐の山なみには、遅咲きの山桜が白いはなびらをかざっていた。

前日に元服の式を終えた武田晴信は、要害山城の温泉に身を浸している。

昼さがりの城内は静まりかえっていた。要害山に詰めている武者の数はすくなく、前日は夜をあかしての晴信元服の祝宴で、家来たちのおおかたはまだ閨のうちにいるようである。

晴信は夜あけまえに、躑躅ケ崎館から京都へ出立する家老、板垣信方を見送った。

信方は三百人の供を連れ、綺羅を飾り、晴信に挨拶した。

「小旦那さま、それがしが上洛いたしおるうちにも、何事がおこるやも知れませぬでございす。合戦のときは心ききたる近習どもを傍にひきよせ、ご油断召されますな。お屋形がお抜かりなきはもとよりながら、小旦那さまも、とりわけ夜討ちにはご用心召されませ」

晴信はほほえみ、応じた。

「あいわかったずら。爺も道中はくれぐれも気をつけてゆくがよい。道中諸国には、父殿が頼み状を送りしゆえ、邪魔いたす者もおるまいが、他国で寝首を掻かれてはならぬ」

「それがしが身は、むかで組の面々に護らせまする。また軒猿どもも十人ほど連れてゆきまするゆえ、夜中の警固に手抜かりはござりませぬ」

信方が上洛するのは、晴信が将軍足利義晴の偏諱を頂戴したことを奉謝するためであった。

晴信は、信方がおびただしい貢物を積んだ駄馬の列を従え去ってゆくのを、行列が見えなくなるまで見送った。

晴信はこの年、正月十七日付で従五位下に叙し、大膳大夫に任ぜられていた。晴信が甲斐守護の嫡男としてふさわしい待遇を朝廷、幕府からうけたのは、信虎の強大な武力が中央にも知られるようになっていたからである。

晴信は信方を見送ったあと、要害山城の湯で体を休めることにした。元服式の前後十日ほどは、酒宴がつづいていたので、若い彼も疲労をおぼえている。

十人ほどもはいれる広い湯壺には、あたたかい湯が筧からはこばれ、あふれている。湯殿のそとにひかえている小姓は、ひっそりと物音をたてない。

「今日もよき日和ずら」

晴信は甲府の野面を斑にかげらせ、ゆるやかに北方へ動いてゆく白雲に眼をやる。

遠い山なみは霞んでいた。

――まずはこれまで命をつないできたが、この先は分らぬずらなあ。父者とておなじ思いじゃ――

晴信の身内には、常に死の恐怖がわだかまっていた。

北条、今川の二大勢力との衝突は、断続しておこっている。国外だけではなく、甲斐の国でいつ叛乱が起るかも知れない危険は、いまだ去ってはいない。

信虎は、倒されるまえに敵を倒す先制戦略をつらぬき、あいついで襲ってくる危難を排除してきた。

彼は甲府城下に武田一門衆をはじめ諸豪族に屋敷を設けさせ、社寺をあつめ市街地をととのえ、戦国大名として実力をたくわえたいまも、晴信に内心を洩らすことがあった。

「人は死ねばすべてが仕舞いずら。いかに巧者に立ちまわろうとも、命運尽きたれば死に、地獄の餓鬼となるだあ」

信虎の言葉は、晴信の胸に沁みわたる。

合戦では、大将だけが安全な場所にいるわけにはゆかない。

戦場での大軍の進退は、おおまかなように見えて、突然意表をつかれる変化のあらわれることがある。

旗本勢の人楯に取り囲まれている本陣が、敵の奇襲をうけ、みる間に士卒を薙ぎ倒され、大将が首級をあげられるのはめずらしいことではない。

戦場だけが危険なのではない。

屋形で夜中に斬りかかられることもある。

曲者は外部から潜入する刺客ばかりではない。小姓、侍女のうちに敵からのまわし者がまぎれこんでいる。

家来の身許はすべて調べているが、それでも敵は巧みに警戒の間隙をすりぬけ、知らぬ間

に間近へ忍び寄っている。
天災、飢饉もくりかえし襲ってくる。
甲斐では台風の被害がすさまじかった。暴風雨になるとおそろしい山津波がおこり、大勢の死傷者が出る。
「大海のはたは皆浪に引かれ、山家は大木に打ち殺され、堂寺宮ことごとく吹きたおし申し候。
地下の家は千に一、万に一御座候。鳥けだもの皆々死に申し候。世間の大木は一本も御座なく候」
というような災害が、年ごとにおこった。
疫病もしばしば流行した。疱瘡、喉痺、麻疹、咳病などである。
台風、旱魃、大霜、長雨などの異常気象がつづけば、地下人たちは飢饉に苦しめられる。
百姓町人は飢饉の際の非常食として里芋を穴蔵に貯え、干し葉をこしらえる。
非常食を食いつくすと山菜、雑草で命をつないだ。
天文三年（一五三四）には、つぎの記録がある。
「この年は、はじめの年八月より明くる年の四月まで、わらびを掘り候て、皆自命をつなぎ候」
晴信は飢饉となっても、地下人のように飢えることはないが、常に毒殺の危険にさらされ

ていた。毎日はこばれる膳部はすべて小姓が毒見をするが、それでもわずかな隙をつかれ、毒をいれられることがないとはいえない。

信虎は両頬にくらいかげをきざみ、血走った眼には猛獣のような殺気を宿している。彼が人を殺すのを、芋大根を切るように無感動におこなえるのは、そうしなければ危険にみちた世を生き抜いてゆけないからである。

蝗を踏みつぶすほどたやすく敵を斬れるほどの男でなければ、戦場で総崩れになりかけた味方の軍勢をたてなおし、反撃させる冷静なはたらきはできない。

信虎は一族に信頼されるに足る将器であったが、ながく死の恐怖を堪えてきただけに、ときたま常軌を逸した残虐のふるまいをして、家来どもを畏怖させた。

晴信は日夜神経を張りつめて生きる父の気持を理解していた。

今日があっても、明日は生きているか否か自分でも分らない日常である。

晴信は湯にひたりつつ、山鶯が啼きかわす声を聞く。

――死ねばいずちへ参るのか。死後は彼岸とやらへゆくというが、いってみなければ分らぬ――

武田氏の氏神は、韮崎の八幡神社であった。同社は宇佐八幡宮を勧請したとも、石清水八幡宮を勧請したともいわれていた。

塩山の恵林寺も、武田氏の保護を受け、栄えていた。

晴信の先祖武田信成は、恵林寺住職絶海中津によって、生前にわが死後の冥福を祈る逆修供養をおこなった。

――死後に地獄極楽があるとして、われらはとても極楽へはいけねえずら――

晴信は戦場でのわがはたらきをかえりみる。

前年の八月二十二日、山中湖畔に布陣していた武田支隊が北条勢の急襲をうけ壊滅し、勝沼信友以下多数が討死を遂げたとき、信虎は復讐を誓った。

彼は年があらたまるとまもなく、兵を率い積雪を蹴って相模へ乱入した。

武田勢は相模津久井郡青根郷（津久井郡津久井町青根）を襲う。

郷内の地侍はことごとく逃げうせ、残っているのは年寄り、婦女子の足弱ばかりであった。

信虎は歯がみして、老幼婦女を百姓家から曳きださせる。その数は百人をこえた。

彼は捕虜を村はずれの小高い丘に立たせ、周囲の野山に反響する大音声で呼ばわった。

「北条が手の者ども、よっく聞け。われら甲斐より推参いたせしに、ひとりの迎うることもなく、逃げうせしは卑怯のきわみなり。いまより汝らが出でて参らば勝負をいたしてつかわす。

出てこぬなら、ここなる足弱どもの素っ首をのこらず刎ねてやらあず」

信虎の声は、遠方の山肌に反響した。
武田勢は寒風のなかで、敵のあらわれるのを待つ。
晴信は父に聞いた。
「もし敵が姿を見せねば、まことにこれらの足弱を成敗いたすのでございすか」
信虎は険しい眼差しをむけた。
「きまっておろうが。出でて参らぬ者は、わが親、妻子の首をはねられ、胸をひきさかるる思いをいたすのじゃ」
肌をつんざく寒風の吹く丘のうえには、老幼と女人たちがひきたてられ、声もなく涙を流している。
嬰児がたまに泣き声をあげると、母親が懸命にあやし、声を鎮めようとした。
彼らの周りには、目の下頬当をつけた足軽たちが抜刀して看視している。
七、八歳の男児が丘へ連れられてくる途中、襤褸に着ぶくれた背をまるめ、藪陰へ逃げこもうとしたが、追いすがった足軽が一瞬に首を刎ねた。
野太刀を軽く一閃させただけで子供の首はいきおいよく宙に飛び、四、五間もはなれた雪上に落ちた。
首の斬りくちから、三、四尺ほども血液が奔騰し、捕虜の列中から激しい泣き声が湧きおこった。

捕虜たちはそのあと従順であった。彼らは命ぜられるままに動き、反抗の気配を見せない。

彼らはもはや斬られる運命であると観念しているようであった。

半刻（一時間）が経ったが、雪を踏んであらわれる人影はなかった。

信虎は野山にむかい、もういちどおらびあげた。

「さきほどより待ちうけしが、誰ひとり出てうせぬ。さればこれより足弱どもを撫で斬りにしてつかわすゆえ、いずこからなりともゆるりと見分いたせ」

信虎は刀を抜いた。

「さて、儂がまずは血祭りにあげてやらあず。ひとり曳いて参れ」

足軽が白髪の老爺を引きたててきた。

「皺ばみし細首は、切り味わろきものずら。仕方ねえ」

信虎は老爺が坐らされて、何か叫ぼうとしたとき、長い刀身を振った。

音をたて黒血の棒が延び、信虎は身をひねって返り血を避ける。

足軽たちが切りくちから血が噴きでている屍体の両足を持ち、信虎の前から引きずってゆき、丘の下の藪へ放り投げた。

そのあと皆殺しがはじまった。

晴信は信虎とともに床几に坐り、刀の柄に手をかけ様子を見守る。

足軽たちは返り血に顔をしかめつつ、捕虜を斬る。
「なるべく一太刀で眠らせろ。それがせめてもの情というものだあ」
殺戮は小半刻（三十分）で終った。
武田勢は屍体の折りかさなった丘に、寒鴉の群れが集まってくるのを見つつ、引き揚げていった。
晴信は鴉の声を聞きつつ、眼裏に焼きついた無惨な光景を思いだし、背に鳥肌をたてた。
当時の庶民は、大名からみれば塵芥のようなものであった。
人を質にとることは、ひろくおこなわれている。その命をとるのも、乱世であれば仕方のないことであった。
だが晴信は無力な足弱に刃をむける気になれない。
彼はそのとき信虎に、捕虜の一人を手にかけるよう促されたが、拒んだ。
「それがしは、据え物は斬りとうござりませぬ」
信虎は声を荒げ、とがめた。
「なに、足弱が斬れぬか。さような気弱きことで、この波風荒き世間を渡れると思うかや」
晴信は、父が身を挺して強敵との戦いをかさね、甲斐統一のために苦労をかさねてきた過去を、板垣信方ら傅役から聞かされている。
だが、晴信は老幼に白刃をむける気にはなれなかった。

晴信は湯からあがり、書院にはいる。

二十畳の書院には畳が敷かれ、襖障子、腰障子の帳台飾りがまあたらしく、軒先からさしこむ陽光に映えている。

座敷の柱には、それぞれ釣り灯台がかけられ床の間には花鳥の掛軸がかけられている。

前机には香盆と香炉、花瓶、燭台の三具足、碁盤が置かれていた。

晴信が床の間を背にあぐらを組むと、小姓が膳部をはこんできた。

膳のうえには錫の瓶子が置かれている。晴信は酒を好む。

地下人のあいだでは一日二食であるが、晴信は京都の風習をうけ、中食をとった。

彼はまもなく権大納言転法輪三条公頼の娘を正室に迎えることになっていた。婚儀の日取りは五月に定められている。

晴信が三条公頼の娘を妻に迎えたのは、駿河の今川義元の斡旋によるものであった。

晴信夫人となった女性の姉は管領細川晴元の妻で、妹は本願寺顕如光佐の裏方である。

武田と敵対していた今川氏の当主氏輝の弟義元は、当時富士郡瀬古（富士市）の善得寺で承芳と称し仏門に入っていた。

年齢は十八歳であるが、信虎は承芳とひそかに誼みを通じていた。

今川氏輝は二十四歳であるが重病でいつ世を去るかも知れない状態である。

氏輝は自分が亡きあと承芳を還俗させ、あとを継がせようと考えていたが、彼の外祖父福島上総介は承芳の異母兄弟である、志太郡花蔵（藤枝市）の遍照院住職良真（玄広恵探）を擁立しようと画策していた。

このため承芳は隣国武田の戦力を頼ろうとしたわけであった。

天文五年（一五三六）三月十七日、氏輝は病没したが、遺言で後嗣を承芳とさだめた。

承芳は還俗して義元と名乗り、今川家の当主となったが、かねて噂のあった通り福島上総介が義元を廃嫡し、良真に継がせようとしたため、肉親があいせめぎあう内戦がおこった。

今川家の重職はほとんど義元に就き、北条氏綱も義元を援けた。

このため、六月八日の合戦では良真は敗北して自害を遂げ、福島上総介は北条氏綱の攻撃を受け、滅亡した。

義元に叛いた良真派の残党前島氏らは、甲斐に逃れ、甲府にきた。

信虎は義元と結んでいたので、前島一門に切腹を命じた。

「妙法寺記」天文五年のくだりには、つぎの記載がある。

「この年四月十日、駿河の屋形御兄弟死去めされ候。さるほどにその年六月八日花蔵殿（良真）福島一門皆相模の氏綱の人数が責め殺し申され候。

さるほどに善得寺殿屋形になおりめされ候。
この年五月より七月まで雨降り候て、言語道断餓死。ことさら疫病はやり申し候。この年六月、当国府中にて前島一門皆上意にそむき腹を切り申し候。
さるほどに一国奉行衆ことごとく他国へ越され申し候」
武田家中の奉行衆がすべて、前島氏の処断を不服として甲斐を退散するという非常事態がおこったが、信虎は断固として義元支持の方針を変えなかった。
信虎は近臣に内心を洩らした。
「今川と同心いたさば、信濃へ出ずるに後顧（こうこ）の憂いが消えるずら」
義元が相続したのち、武田と今川の対立は解消し、同盟関係が生じた。
天文六年（一五三七）二月、信虎は晴信の姉を義元に嫁がせ、婚姻のつよいきずなをかわした。
信虎は今川との同盟により、南方からの侵略のおそれが消え、北条への防衛戦略を有利に運べるようになった。
そうなれば信濃経略に力をそそぐことができる。
甲斐は四郡で四千四百六十平方キロの山国で、人口も十七万人前後であった。
信濃は十郡で一万三千五百八十六平方キロの大国である。人口は五十万人近い。
だが地形が山岳で分断されているので、大勢力が存在しない。

生産力がたかく、名馬の産地として知られているが、国土が山脈、河川、湖沼で縦横に区切られ、盆地や谷に分れている。

その狭隘な地域ごとに地侍が城砦を構えていて、たがいに抗争をくりかえしている。

信濃守護の小笠原氏は松本平の府中（松本市）にいるが、筑摩、安曇の二郡を支配しているに過ぎない。

木曽谷は木曽義仲の後裔である木曽氏が所領とし、木曽福島城に拠っている。

伊那谷には小笠原氏の同族が、松尾（飯田市）に城を構えており、諏訪氏の支族である高遠氏が高遠（上伊那郡高遠町）にいた。ほかに藤沢、知久、下条らの地侍がそれぞれ猫の額の所領を分けあっている。

諏訪郡は諏訪上社の大祝家諏訪氏を中心として神氏一族が、古来からの伝統を伝えている。下社の大祝家金刺氏も、諏訪氏に対抗する勢力であった。

佐久平には平賀、伴野、大井の諸豪族が割拠し、埴科、更級二郡は村上氏が葛尾城に拠って支配下に置いている。

北信濃は高梨、綿内、島津、栗田の諸勢力。北安曇には仁科氏がいた。

小県は海野、禰津、望月の諸氏がいる。

これらの主だった豪族のほかに、城を持つ小勢力は数えきれないほどである。

信虎が信濃へ兵を向けはじめたのは、大永三年（一五二三）の頃からである。

天文六年、七年にかけて、甲斐の住民は大風、疫病で悩まされた。

「妙法寺記」にはつぎの記載がある。

「天文六年。

この年正月あたたかに候。疫病はやり申し候。ことさら言語道断餓死候て売買なし」

「天文七年。

この年正月十七日夜、大風吹き候て、その後二月三月大風たびたび吹き申し候。去年冬の寒に大麦ぬけ一向なくござ候。

こなたにかぎらず大原も皆損し、ござなく候。この春も皆人餓死し候て、つまること無限」

信虎は飢饉のなかで、信濃経略の方針を着々とすすめた。

彼は天文四年（一五三五）秋、神長（諏訪上社神官）守屋頼真に斡旋を頼み、諏訪頼満と境川北岸で会い、頼真が諏訪社の宝鈴を振り鳴らし、双方和睦の誓いをたてさせた。

甲府から信濃へ進入するルートは、八ケ岳東方からの佐久口と、南西方からの諏訪口の二道があった。

佐久口からは釜無川の支流塩川沿いに関東山地を経て信州峠を越え、佐久に入るのだが、途中は険阻な山道が多く、渓谷にはばまれ迂回を重ねなければならない。

諏訪口は八ケ岳と赤石山脈の中間を抜け諏訪郡に入る。道路はわりあい平坦で、軍勢、小荷駄の通行が容易であった。

信虎が諏訪氏と和睦したのは、その勢力を信州侵攻に用いようと考えたためである。

諏訪頼満が天文八年（一五三九）十二月に没し、二十四歳になる孫の頼重（よりしげ）があとを継ぐと、信虎は晴信の妹禰々を彼に嫁がせた。

「神使御頭之日記」によれば、天文九年十二月九日、頼重が甲府に婿入りをした。さらに同月十七日、信虎が諏訪におもむき、両家の間柄は親密であった。

諏訪氏と同盟してのち、信虎は佐久侵略に全力を傾けた。

「妙法寺記」天文九年の項には、つぎの記載がある。

「この年五月より武田殿信州へ取り懸けめされ候。さるほどに弓矢に切り勝ちめされ候て、一日に城を三十六落しめされ候と聞え候」

信虎の指揮する武田勢の大兵のまえに、信濃の小豪族たちは抵抗するすべもなく、たちまち席捲（せっけん）されたのである。

だが武田の軍兵たちは、息つく間もない戦闘の連続で田畑の仕事もできず、不満の声がたかまるばかりであった。

天文九年五月、信虎は八千の兵を率い信濃へ乱入し、諸所の地を蹴散らしつつ佐久郡海の口城に迫った。

海の口城は現在のＪＲ小海線佐久海ノ口駅に近く、千曲川をはさみ北方の城山山頂に遺構がある。

標高八百九十メートル、比高二百十メートルの山頂に本丸、二の曲輪、三の曲輪を構える城郭は佐久郡の最南端にあり、海尻城とともに甲斐からの侵攻を防禦する境目城であった。

城主は平賀一族のうちで大剛の名が聞えている平賀源心であった。

源心は七十人力といわれる大力者で、身の丈は七尺（約二メートル十二センチ）に及ぶといわれ、四尺三寸（約一メートル三十センチ）の大太刀を常佩きにしている。

彼は二千の城兵に諸門をかためさせ、押し寄せる武田勢を迎え撃った。

五月になって連日大雨が降りつづき、道路は泥濘となり、河川は増水して矢のような水勢である。

山間ではしきりに山津波がおこり、武田の将兵は山中での露営には厳重な警戒をはらい、仮寝の夢をむすぶ余裕もなかった。

晴信は三百人のむかで組を率い、全軍の後陣をかためていた。

彼は陣小屋の庇から滝のように落ちる雨のすだれを通し、ぼんやりと煙ってみえる海の口城を見あげる。

本丸は屏風岩という巨大な大岩壁のうえにあり、四方を見下せる。

源心はそこにいて、二の曲輪、三の曲輪の兵を督励し、手ごわい反撃をしかけてくる。

信虎は着陣すると連戦連勝のいきおいを駆って我攻めの攻撃を仕懸けた。だが城兵は寄せ手が堀切りを渡ろうとしたときを見はからい、大石を雨のように転がしてきた。

軍兵たちは寄せ太鼓に追いたてられ、遮二無二尾根伝いに攻め登ったが、斜面をはね飛びながら転げ落ちてくる巨石から逃れるすべもなかった。

持楯で身をかばってみても、たちまちはね飛ばされ、踏みつぶされた沢蟹のようになった。

その朝まで三日間攻撃をくりかえしたが、五百に近い死傷者を出し、三の曲輪にも寄りつけないままでいる。

陣小屋には怪我人たちの呻吟の声が湧いている。

息をひきとりかけている男のまわりに親戚の男たちが寄りつどい、手足を撫でさすり、薬湯を与え、大声で名を呼んでいる。

白兵戦で槍疵、刀疵を受けた者は身を横たえることもできず、血縛り薬、酢、玉子の白身を塗った晒を幾重にも疵口に巻きつけ、あぐらを組みうつむいている。

雨中の板囲いには戦死者の遺体が積みかさねられていた。

雨の小止みのときに土葬するのだが、褌ひとつの裸体にされ、血を洗い流された疵口は牡丹のはなびらのようにひらいている。

晴信の傍にひかえている板垣信方は、つぶやくようにいう。

「この城は、我攻めにいたせしとて落ちませぬ。小旦那さまは手勢を動かしなされますな。お屋形さまは、ここ一両日のうちにかならず囲みを解かねばならぬでござる」

信方は、信虎の性急な攻撃が失敗すると見ていた。

海の口城の守兵の戦意は、これまで陥れてきた群小土豪のそれとは比較にならなかった。

堅固な城郭に、矢玉兵粮を豊富にそなえ、猛将平賀源心の指図を仰ぐ二千の守兵は、信虎の攻撃をはねかえす自信に満ちていた。

鉄楯をかつぎ、巨石から身をかばいつつ三の曲輪に接近する武田勢は、土居に取りつくまでに矢を浴び薙ぎ倒される。

晴信は二十歳になっていた。

彼は父の信虎とは性格がちがう。

信虎は強引な戦法で甲斐統一を果し、強力な戦国大名として抬頭してきた勇将であるが、気性がはげしすぎた。

彼はわが愛刀で、不埒をはたらいた家来五十余人を手討ちにしたと自慢する残虐を好む性格であった。

甲斐国内は連年災害、天候不順がつづき、住民は人馬の餓死するものが数知れずといわれ

る窮乏に耐えている。

信虎はそのような状況を顧みず、陣触れにつぐ陣触れを発し、侍、百姓を戦に駆りだしていた。

合戦に出ると焼討ちができるので、軍兵はそれを楽しみに出陣する。

焼討ちは暴行掠奪であった。

だが、合戦がつづき死傷者がふえてくると、厭戦の声が出てくる。

信虎は、そのような軍兵たちの声に耳をかそうとしない。

晴信は地面にしぶきをあげる雨脚を見つめながら、いま海の口城を攻略するには、どのような作戦を用いればよいかと、考えをめぐらし、計略を思いつく。

「爺、父上はこの城をいつまで攻めるかのう」

「さよう、まず三日とはなされませぬずら。八千の人数に食わす兵粮が、底をついてきておる様子にございます」

「さようか、ならば儂は退陣のときに殿を承ろう」

信方はうなずいた。

「それはおもしろきご了簡にございます。殿におつき召され、なにをなさるるおつもりかや」

晴信は信方の耳もとに口を寄せ、何事かささやいた。

信虎の攻撃は、信方の予想よりはやく、二日めに頓挫した。

甲府との連絡路を守備していた軒猿たちから急報がとどき、百姓一揆が起りかけていると知ったからである。

武田勢は豪雨のなか、旗を巻き粛々と引き揚げてゆく。

信虎は、晴信が殿を引き受けたいと申し出ると、即座に許した。

殿軍は敵の追撃を受けた場合、踏みとどまって防戦し、犠牲となって本軍を退かせねばならないので、危険な役割りであったが、信虎は嫡男の晴信をそのような立場に置くことに、ためらいを覚えないようであった。

信虎は諸事に思慮ぶかく油断ならない晴信よりも、温厚な次子信繁を愛していた。

晴信のむかで組は、山間のつづら折りの道を、黙々と進む。

使い番が隊列の先頭へ走り、先を急ぐなとの晴信の下知を伝えたので、軍兵たちの泥濘を踏む足どりはゆるやかである。

突然地面が揺れ、軍馬が怯える。峯ひとつへだてた辺りで山津波がおこったらしく、腹にひびく轟音が空にひろがる。

武田勢の本隊が通過したあとは、足首を没するほどにぬかるんでいた。

彼らは深手を負った者を、畚にいれて運んでいったが、途中で息をひきとると手の小指だ

けを切りとり、道端に埋める。
遺骸を埋めた土饅頭のうえには目印の木切れが置かれていた。
晴信は馬の背に揺られつつ、退陣のときの信虎のいいぐさを思いだしていた。
晴信が殿軍をつとめようと申し出ると、信虎は嘲笑した。
「武田家の名折れとなるごときつとめをいたすきゃあ。人が笑うずら。たとえおのしが儂に殿を申しつけられようとも、さような役は弟の次郎に仰せつけられたしと拒むのが、惣領となるべき者にふさわしき了簡じゃ」
そういいつつも、口調に厳しさはなかった。
晴信には信虎の胸のうちが分っていた。
突風が行手から吹き通り、顔に雨滴を叩きつけた。
晴信のうしろに介添役板垣信方、傅役金丸虎義が馬を進めていた。
後方から軒猿が敵の情況を注進にくる。
「いまだ追うては参りませぬ」
「平賀の手の者どもは曲輪うちにいて、姿をあらわしませぬ。矢倉に物見の兵が少々おるのみにございす」
晴信は信方をふりかえった。
「間なしに日も暮れるずら。この辺りで足を停めっか」

信方は兜の庇から滴をしたたらせつつ応じる。
「さようにございす。お味方とは十里ほどもへだたりおれば、ようござるずら」
晴信は馬上に背をそらせ、使い番を呼ぶ。
「皆の者どもに足を停めさせよ。ここにて火を焚き、腹ごしらえをいたせ」
軍兵たちは何をするのかと不審がったが、いわれるままに小荷駄の陣営具をとりだし、雨を避ける瀬降り小屋をこしらえる。
「皆の者に酒をやれ」
小荷駄の兵が濁酒の瓶を配ってまわる。
辺りが暮れはてた頃、晴信は下知した。
「これより海の口に取って返し、城攻めをいたす。平賀入道は今時分にゃ、武田の人数を追い払うての祝い酒に酔うて、さだめし寝ておるら。いまからゆきゃあ、海の口に着くのは夜なかじゃ。酔うて動けぬものを討ってとるに手間はいらねえら。さあ、いかざあ。勝てば恩賞は思いのままに取らすだ。気張ってはたらけ」
むかで組の精鋭は、思いがけない命令をうけ、きおいたった。
「さすがは小旦那ずら。家来になってよかったつら。海の口の城へ斬りこんで金銀財宝を手当り次第に分捕らざあ」
腹ごしらえをすませ、酒気を帯びた軍兵たちは、飛ぶような足取りで海の口城へむけ、引

き返した。

城下に着いたときは、子の刻（午前零時）をいくらか過ぎていた。

むかで組は闇に溶けこみ、物音をひそませている。

数人の軒猿が影のように走り出て、柵門を乗りこえ、外曲輪に潜入した。

柵門の哨兵は降りしきる雨をきらい、番所のうちにいた。

灯芯の明りがゆらめく番所から、酒をくらい酔っているらしい軍兵の談笑する声が流れ出てくる。

「やはり思いしごとき緩みようで、都合はいいら」

「この様子なら、人数が一丸となって突っこめばようごいす」

晴信と信方がささやきあい、闇中で眼を光らせる。

しばらく待つうち、軒猿たちが戻ってきた。

「三の曲輪には、宿直の者が二人おりしゆえ、始末いたしてごいす。ほかには軍兵三十人ほどが、酒に酔うて高いびきに寝てごいす」

「二の曲輪には百人あまりいて、一人ものこらず寝こんでごいす」

「本丸には大将源心が五、六十人の侍どもと杯盤狼藉のあげく、前後不覚にごいす」

晴信は聞く。

「ほかに人数はおらぬかや」

「さようにございす。はや在所へ帰せし様子らしゅう見えまする」
平賀源心は武田勢が退却をはじめたとき、ただちに追撃しようと柵門を出かけたが、雨脚がはげしく霧が出て見通しがきかないので断念した。
物見を派して武田勢のあとを追わせてみると、敵は退却してゆくばかりで引き返す様子がなかった。
早朝に退いていった武田勢が、十里ちかく遠ざかったのをたしかめ、夕刻から戦勝の祝宴をひらいたのである。
「さようなる次第のようだら、我攻めをいたす。まずは番所の者どもを始末せしうえで、根小屋に火をかけよ」
十人ほどの軍兵が、白刃を手に番所へ走った。
床へ倒れる音、みじかい絶叫が湧き、哨兵のひとりが走り出て喚いた。
「夜討ちじゃ、出会え」
声は瞬間にとぎれた。
背から胸へ、大身の槍先につらぬかれたのである。
柵門をひらき、外曲輪にむかで組が入りこむ。
「それ、仕懸くるぞ。ときの声をあげよ」
軍兵たちが喉も裂けよと、ときの声を三度あげ、猛然と突進した。

彼らは松明を手に三の曲輪へ乱入し、うろたえ起き出た城兵たちを撫で斬りにして、怒濤のように坂道を駆けのぼり、二の曲輪に斬りいった。

「これは武田の奴輩か」

「卑怯なり、寝込みを狙うてきたか」

城兵たちは打ち物をとって必死に抵抗するが、泥酔しているので身が重く、おおかたが具足を外していたため、斬りたてられ屍の山を築くのみである。

むかで組はよろめきつつ逃げる者は追わず、本丸へ殺到した。

平賀源心は熟睡していたが、揺りおこされたときは、武田勢にとりかこまれていた。

「これはしてやられしか。かくなるうえはせんすべもなし」

従う者はわずか数人であったが、源心はとっさに覚悟をきめ、野太刀をふりかぶり、寄せ手のただなかに斬りこむ。

合戦の場では敵を寄せつけない威力を発揮する源心の膂力も、前後左右から取りかこまれ斬りかけられるのを凌ぐばかりで、たちまち守勢に立たされた。

「えーい、小癪な奴輩めが」

赫怒した源心が力まかせにふるった野太刀は、立木にふかく切りこみ、抜けなくなった。

得物を失った彼は、突きかけてくるむかで組の一人を組みとめ、槍を奪って阿修羅のように荒れ狂う。

寄せ手のうちから投げられた松明が顔にあたり、たじろいだ瞬間、源心は四方から槍玉にあげられ、血を噴いて最期を遂げた。

八千の武田本隊が落せなかった海の口城は、わずか三百の晴信隊の一刻（二時間）余の攻撃で陥れられた。

「津金文書」によれば、信虎は天文九年（一五四〇）八月、占領した海の口に伝馬制を実施したとある。

翌天文十年（一五四一）は、甲斐は飢饉に見舞われた。

「この年春餓死致し候て、人馬とも死すること限りなし。百年のうちにもござなく候と、人に申しきたり候。千死一生と申し候。

この年六月十四日に武田大夫殿様親の信虎を駿河国へ押し越し申し候。

あまりに悪行をなされ候あいだ、かようにめされ候。さるほどに地下侍、出家、男女ともによろこび満足致し候こと限りなし」

信虎はこの年五月、晴信とともに諏訪郡の諏訪頼重、埴科郡の村上義清と協同し、小県郡に乱入した。

小県、佐久一帯の支配者は、海野、禰津、矢沢、望月らの滋野一族である。

彼らは必死に抗戦したが、兵力の差はいかんともしがたい。

五月十三日に尾山（小県郡丸子町）が陥落し、翌日海野平（小県郡東部町）が蹂躙された。

海野平の海野棟綱と支族の真田幸隆は、上野国平井（群馬県藤岡市）に逃れ、禰津元直、矢沢綱頼ら滋野一族はおおかたが降伏した。

信虎は六月に甲府へ凱旋した。

彼は六月十四日、駿河の今川義元をたずねた。帰陣ののち、ひさびさに娘と婿に会おうという、保養かたがたの忍びの旅であった。

晴信の家来駒井高白斎政武の記した「高白斎記」に、つぎのように記されている。

「六月小丙辰十四日己巳、信虎公御立チ駿府へ御越シ。甲府ニオイテ十六日各々存ジ候」

信虎の近臣でさえ、二日後に主君の駿河行きを知ったほどであった。

信虎は重臣板垣信方、飯富兵部（虎昌）にすすめられ、駿河府中へ出向いたが、そのまま二度と甲府へ戻らなかった。

晴信がただちに足軽勢を駿遠国境の河内境へつかわし、街道を封鎖したからである。

「甲陽軍鑑」によれば、晴信は信虎の供をして駿河へ出向いた侍たちの妻子をことごとく捕え、人質とした。

このため信虎のもとに踏みとどまる家来は一人もおらず、すべて甲斐に逃げ帰ってきた。

信虎は晴信が板垣信方らの重臣たちと仕組んだ無血クーデターの計略に乗せられ、駿河へ

追放されたのである。

信方、兵部らは、今川方の重臣太原雪斎、岡部常憲らとあらかじめ連絡をとり、信虎を駿河に留めおく手筈をととのえていたといわれる。

「塩山向岳禅庵小年代記」に、信虎追放につき記されている。

「信虎平生悪逆無道なり。

国中の人民牛馬畜類ともに愁悩せり。

然るに駿州大守義元、信虎の女を娶り、これに依り辛丑六月中旬、駿府にゆく。

晴信、万民の愁を済わんと欲し、足軽を河内境に出しその帰道を断ち、位に就き国々を保つ。

人民ことごとく快楽の咲いをふくむ」

「王代記」も簡単に触れている。

「武田信虎六月十四日駿州へ御出。十七日巳刻晴信屋形へ御移。一国平均になる」

諸記録には信虎追放を惜しむ声がなく、晴信のクーデターを褒めたたえるのみである。

二十一歳の晴信は四十八歳の信虎を追放し、甲斐の国主大名となった。

信虎追放の真相は分らないが、およそ三つの理由が推測されている。

第一は信虎が晴信を廃嫡し、信繁に相続させようとしたためであるとする。

第二は信虎が残虐の行い多く、民衆の怨みを買っており、飢饉あいついで餓死者続出する

領国経営の失敗が覆いがたくなったため、家臣からの反撥を回避するにはクーデターをとらざるをえなくなったとする。

信虎はそれまで武力で制圧し従属させてきた甲斐の国人勢力に疎まれ、孤立の状態に追いこまれていたのである。

第三は、「甲陽軍鑑」人物伝にあり、今川義元の謀略によるものとする説である。

義元はかねて甲斐併呑の機をうかがっていたが、信虎は舅にあたり、道義のうえからも討つことができないうえに、武勇すぐれた豪傑である。

そのため晴信を甲斐国主に取りたてれば、野望実現の機もあると考え、晴信に謀叛をすすめ、信虎を駿府へ引きとった。

真相はいずれであるか分らないが、信虎追放のもっとも重要な理由である「悪行」「悪逆無道」のふるまいについて、信虎在世当時の文書には、具体的な例がまったく述べられていない。

近世はじめになって、「甲陽軍鑑」で乱行について語られる。

信州伊那で八十過ぎの信虎が孫勝頼と会い、伝家の宝刀左文字を抜きはなち、振りまわした。

「この刀では五十人に余る者を手討ちにいたせしが、そのうちには、ここに侍る内藤修理（昌豊）と名乗る者の兄もおりしことであった。儂は袈裟がけに斬って棄てたのじゃ」

信虎が自ら過去の乱行を口にしているが、これはフィクションであろう。

江戸期正徳、享保年間に出された「武田三代軍記」のなかではじめて信虎が妊婦の腹を裂いたとか、愛猿を誤殺した家来を切腹させたという行状が語られる。

このような事情をいろいろ考えてみると、信虎が追放された最大の原因は、やはり領国経営の失敗であったといえる。

彼の治政は国内統一につぐ領土拡大の合戦がつづくなかで、家来、領民に苛酷な負担をかけざるをえなかった。

農民たちは合戦がはじまれば雑兵として駆りだされ、死傷者も続出した。

甲斐の国内に敵が侵入してくれば、田畑は踏み荒され、荒廃してしまう。

大軍の移動、情報収集に必要な、伝馬制度、狼火台の強化にも、大勢の百姓が従事しなければならない。

戦費を調達するための、各種の税金も課されるうえ、毎年天災、疫病、飢饉がつづく。このような国内の不満を爆発させないための唯一の手段が、信虎追放であった。

信虎の駿河追放は、今川義元の同意があって実現したことである。

「甲陽軍鑑」によれば、晴信が義元に内状をうちあけ、協力を頼んでいる。

「父信虎は次郎（信繁）を惣領にし、私を庶子とする意向である。私をあなたのもとで勉学させるという名目で、駿河へ追放しようと企てている。このため私はあなたの援助がほしい」

義元は晴信の頼みをうけた。

舅で剛強の信虎が甲斐の国主にとどまっているよりも、いまだ若輩の晴信があとを嗣いでいるほうが、脅威をうけることもなく扱いやすいと判断したのである。

信虎をうけいれておけば、彼を人質として甲斐の内政に干渉することも可能である。

義元は太原崇孚（雪斎）、岡部美濃守（貞綱）ら重職と相談のうえで、信虎をうけいれた。

天文十年（一五四一）九月二十三日、義元はつぎのような書状を晴信に送った。

「内々使者をもって申せしむべくのところ、惣印軒参ずべくの由承り候あいだ、啓せしめ候。

信虎女中衆のこと、十月の節に入り易筮を勘ぜられ、お越しあるべくの由もっともに候。こなたにおいても申しつくべく候。

かたがたもって天道あい定められ候わば、本望に候。

なかんずく信虎御隠居分のこと、去る六月雪斎ならびに岡部美濃守進め候刻、御合点の儀に候。

ようやく寒気に向い候。毎事御不安御心痛候。一日も早く仰せつけられ、員数等つぶさに承り候えば、かの御方へ御心得あるべきの旨申し届くべく候。
なお惣印軒口上申し候。恐々謹言

九月二十三日　　義元（花押）

甲府へ参る」

大意はつぎの通りである。

「内々使者をもって申し入れるつもりでいたが、惣印軒（冷泉為和の門人由比安星）が甲府にゆくと聞いたので、彼から言上させようと思う。

信虎女中衆については、十月に入って吉日をえらびお越しとのこと、もっともである。こちらも受入れの支度をととのえておこう。いずれにしても道理に適うように定めてもらえれば、当方は満足である。

とりわけ信虎隠居分の手当てについては去る六月、雪斎（太原崇孚）と岡部美濃守（貞綱）を甲府へつかわしたとき、御了解を得ている。

ようやく寒気にむかい、信虎は何事につけ不便をかこち、心痛している。

一日も早く、信虎のために派遣する人数をくわしく知らせてもらえれば、信虎に納得してもらうよう申し伝えよう。

なお詳しくは惣印軒が口頭で申しあげる」

この書状によって、義元は信虎が駿河に追放された六月、雪斎と岡部美濃守を甲府に派し、信虎の隠居分、女中衆の件につき交渉し、晴信の了解を得ていることが分る。

晴信は信虎を追放して三日後の天文十年（一五四一）六月十七日に躑躅ヶ崎館に入り、二十八日に家督相続の祝宴をひらいた。

祝儀の酌は温井丹波守がおこない、晴信は武田家重宝である新羅三郎義光伝来の日の御旗、楯無の鎧を受け、武田家十九世当主の座につき、甲斐守護職に任ぜられた。

二十一歳の晴信が武田家頭領となったとき、今川義元は二十三歳であった。

義元は駿、遠二国を版図に収め、三河に勢力を及ぼしている。

徳川家康の父松平広忠は当時十六歳。岡崎城にいて今川、織田の双方から圧迫を受けていた。家康は翌天文十一年に誕生する。

小田原の北条氏では七月十九日に氏綱が世を去り、二十七歳の嫡男氏康が家督を継いだ。

後年、晴信の好敵手となる越後の上杉謙信はまだ十二歳で、越後府中（柏崎）にいた。

晴信は詩文に堪能であった。

当時、京都の高名な禅僧、公家たちが応仁の乱以来の戦乱に追われ、地方の戦国大名を頼り保護を求める動きがあった。

甲府にも惟高、策彦、速伝、南化、鉄嘴、岐秀、高山、藍田などの禅僧がおとずれてい

た。晴信は彼らから詩を学ぶ。

和歌の師は、冷泉大納言為和である。

為和は和歌伝授のため、甲斐に幾度も足をはこんだ。

為和御集によれば、天文七年（一五三八）八月、同八年某月、同九年八月と毎年甲府をおとずれている。

当時の晴信のものした和歌に、つぎのようなものがある。

春ながらながめにまがうわが宿の
　花のこずえの雪のむらきえ

すみれさく野分の袖におく露を
　はらうもよしや春の名ごりに

とう人もあらじふけゆく冬の夜は
　篠のはしのき霰（あられ）ふるなり

晴信が家督を継いだ前後の年は天災があいついだ。

天文九年秋の大風では、領内の民家はほとんど吹き倒された。倒壊した寺社もおびただしく、諏訪大社の大鳥居も倒れるほどであった。

天文十年には八月、九月の二度にわたり大風が吹き荒れ、洪水、山崩れが諸方でおこった。

「妙法寺記」にはその惨状が簡単に記されている。

「この年秋、世の中一向悪く候て、大風三度まで吹き申し候。人々餓死候こと限りなし。されども売買安し。銭飢渇にてござ候。ならべて三年餓死なし候」

庶民は生きのびるための食物を手に入れかねる有様であった。

晴信は国主の座につき、領内を巡視して荒れはてた山野を眼にすると、一日も早く治山治水に力を傾けねばならないと気が焦った。

釜無川、御勅使川の沿岸は、例年の洪水のため、一望の砂原となっていた。

応仁の大乱以後、甲斐の国内は兵乱がつづき、武田氏の同族あい争い、領主は自領の保護に力をつくす余裕さえなかった。

このため池溝は毀れたままとなり、堤防の崩れも放置され、雨期になれば河流は氾濫して田畑を砂に埋れさせ、荒蕪地と変えるのである。

天文十一年秋の御勅使川の洪水はすさまじかった。

御勅使川、釜無川の合流点は中巨摩郡竜王村の西北にあり、水防の難所といわれていたが、その一帯に泥水が充満し、連日去らず、湖水のようになった。

駒ケ岳の西に発した釜無川は、甲信国境から七里岩の崖沿いに南へ下り、御勅使川と合流

したのち市川西北で笛吹川と合流し富士川となる。

「甲斐国志」には御勅使川について、ふだんは水が至ってすくなく、跳んで渡れるほどであるが、大雨のときには水量が際限なくふえると記している。

そのうえ地形険しいところを流下するので水勢は激しく、洪水のたびに土砂、岩石を流して田畑を埋めるのである。

怒濤奔激すれば、千貫の巨岩をたたんだ堅堤も、ひとたまりもなく押しきられた。

御勅使、釜無両川の合流点を見下す台地に馬を停めた晴信は、随行の板垣信方ら宿老衆をふりかえっていう。

「かようの水勢をおさうるには、いかに力つくそうとも、人為にてはなしがたきことじゃ。敵の力を用いて敵の力を殺ぐは合戦にて勝ちを招く妙諦なれども、治水もおなじことだ」

板垣信方が聞く。

「仰せの趣は、ちと分りかねまするが」

「川中に石積みをいたすが、水を防ぐ堤ではねえら。水の向きを変えさするほどのものずら。水の流れは、あなたへ向きこなたへ戻るほどに、いきおいを減ずるものじゃ」

宿老たちは晴信の一言で、その着想の卓抜さを感じとった。

晴信は治水普請をおこないつつ、信虎の信濃進撃作戦を一段と強力に展開する機を待っていた。

その時はすみやかにめぐってきた。

晴信は諏訪氏の内紛に乗じ、諏訪上社大祝の諏訪頼重を襲おうと企てた。父信虎とは戦略を一変させたわけである。

信虎は諏訪を信濃進攻の拠点として、利用しようとした。

このため諏訪氏と和睦し、天文九年（一五四〇）七月に諏訪頼重に長窪城（小県郡長門町）を知行させ、十一月晦日に晴信の妹禰々を嫁がせて諏訪氏を武田の藩屏とし、信濃経略に協力させる方針をとってきた。

晴信は国主の座に就くと、信濃攻めに諏訪頼重の協力は不要であると判断した。

彼は板垣信方、甘利虎泰、馬場信房（信春）、飯富虎昌、原虎胤、多田満頼ら宿老にひそかにはかった。

「儂は諏訪を取ろうと思うておるだ。諏訪の惣領は、大将の器にてはねえら。あれとともに組みて戦いしとてこなたの助けにはならず、足手まといになるずら。それよりも諏訪をわがものといたし、伊那、高遠へ乱入いたすが上々の策と存ずるいら」

宿老たちは内心おどろいた。

晴信は諏訪頼重の義兄となって、まだ日が浅い。

頼重と禰々のあいだには、寅王という嫡子ができている。

信虎が協力の相手としていた諏訪氏を倒すという晴信の企ては、情誼をかえりみない冷酷

なものではあるが、作戦として見れば卓抜な着想であった。

たしかに諏訪頼重は凡庸な将で、晴信が盟友として行動をともにして、得策となる人物ではない。

また諏訪一郡を頼重の領土としておくよりも、武田氏の占領地とするほうが、その後の信濃全土への進攻にはるかに有利である。

板垣信方が、まず意見を述べた。

「お屋形さまがご方略のほど、感佩つかまつってございす。仰せのごとく、諏訪を掌中に収むるは上々の策と存じまするが、当家と諏訪家は上社神前にて紙を交して和議をいたし、お屋形さまは頼重殿が小舅にございす。それを亡ぼすには口実が立たねば世のそしりを招きまするに」

「うむ、そのことじゃ」

晴信は信方をはじめ、宿老の顔を見まわした。

「諏訪の一統は仲違いいたしおるいら。高遠信濃守頼継と上社の禰宜大夫矢島満清は気脈を通じあい、折りあらば頼重を亡ぼさんと狙いおるら。また下社の大祝金刺も、上社の膝下に屈するをいさぎよしとせず、これもまた頼重を打ち倒さんとうかがいおるだ。儂はまずこの者どもをはたらかせ、頼重を自滅いたさするずら」

信方らは、晴信の利害の判断に徹底した、甘さのみじんもない方針に賛同した。

諏訪氏の一族伊那高遠城主高遠頼継は、先祖の信濃権守頼継が南北朝の頃、諏訪の惣領職を継ぐべき立場にありながら分家し、弟の安芸守信嗣が惣領家となったことに遺恨を抱いていた。

信嗣の子孫は連綿とあとを享け、頼重に至っている。高遠頼継は自らが惣領家になるためには頼重を倒さねばならないので、その機をうかがっている。

頼継は信虎が駿河へ追放された事件により、頼重と晴信との間が疎遠になったのを見て、晴信と結ぼうと考えた。

頼継の意中は、晴信がかねてその側近に同朋とし潜ませている軒猿によって探知された。

「これはおもしろや。さようの仕儀ならば、頼継を味方にひきいれてつかわそうず」

晴信は密使を頼継のもとへ派し、提携をもとめた。

頼継はよろこんで応じた。

「頼重は例年の大風にて諏訪一円荒れはて、地下人が公事（年貢）をも払いかぬる有様なるに、府内の小笠原長時と干戈をまじえ、小県に兵を出すなどいたし、民心もようやく離れてございす。

それがしと意を通じおるは、上社の禰宜矢島満清、下社の大祝金刺殿にございす。われら三人が合力しあい、府中のお屋形殿が助勢を願いしならば、頼重を打ち倒すはたやすきことにございす」

晴信は頼継を通じ、矢島満清、金刺氏と密議をすすめ、頼重打倒の計画をまとめたうえで、信方らに企てをうちあけたのである。

信方は晴信に聞いた。

「頼重殿滅亡ののちは、頼継を跡目にお立てなされ、矢島、金刺らに諏訪郡をお任せあるご所存にございすか」

晴信は笑うのみである。

「さて、いかがいたすか。そこまで勘考いたせしことはねえら」

信方は晴信の眼をみつめ、うなずく。

晴信は御勅使川治水の工をおこすにあたり、敵の力をもって敵の力を殺ぎ、勝利を得る方策をとるといったが、諏訪進攻におなじ戦略を用いようとしていた。

信方は、晴信が頼継ら諏訪の一類をそそのかして頼重を攻めさせたのち、彼らをも討ちほろぼすべく策を練っている内心を、すみやかに理解した。

戦評定が終ってのち、重臣たちはささやきあった。

「大旦那も諸事に気性荒しと存ぜしが、晴信旦那には、焼刃を首筋にあてられしごとき、うす気味わるさを覚ゆるずら。親子いずれがおそろしきか分らぬ」

「うむ、乱世を斬りぬくにはあつらえむきのお方じゃ」

天文十一年六月、晴信は甲斐の兵をこぞって甲府を進発し、諏訪郡へ乱入し、御射山原に

布陣し、諏訪頼重の居城上原城に迫った。

諏訪頼重の居城上原城（茅野市上原）に、武田勢が大挙して堺川を渡河し、攻め寄せてきたとの注進が届いたのは、天文十一年（一五四二）六月二十四日の夕刻であった。

「なんと申す。晴信殿が軍勢を催し、諏訪に乱入いたせしとな。それはいつわりじゃ。この頼重の小舅なるに、攻め寄するなどあることきゃあ」

暮れ六つの鐘が野末に消え、頼重は胸騒ぎをしずめようと、酒宴を催した。

武田と諏訪上社の神前で誓盟を交して和睦したのは七年前のことである。

義兄の晴信が攻撃することはないと、頼重は自分にいい聞かせる。万一、晴信が兵を率い押し寄せてきたとすれば、対抗する手段がなかった。

頼重の兵力は、武田に対抗しうるものではない。

近年、小県郡長窪へ兵を出したため、軍兵は疲弊している。

頼重は妻の禰々に聞く。

「武田の人数が堺川を渡って攻め入りしと物見の注進じゃ。さようのことがあろうか」

禰々はたちまち気づかわしげな面持ちになった。

「私と寅王が起き臥しするこの城へ、兄さまが矢を射かけようはずもござりませぬに。根も

葉もなき流言と存じまする」

頼重は禰々の言葉に救われた思いであったが、禰々は晴信が大兵をともない押し寄せてきたのは事実であろうと察した。

彼女は父信虎のあとを継いだ晴信が、敵を倒すためにはいかなる策謀をも辞さない男であるのを知っていた。

諏訪郡は三年にわたる凶作で、地下人たちは常時飢えにさいなまれている。

兵は痩せ、体力を失い戦意に乏しかった。

頼重は武田勢が接近してくるとの物見の注進が織るように密であるのに、二十五日から二十八日まで、なすこともなく過ごした。

二十八日の亥の刻（午後十時）になって、はじめて甲州の人数が御射山原に布陣していることが確認された。

「甲州の人数はおよそ二万にございます。御射山原には篝火つらなり、炊ぎの煙が山火事のごとくひろがりておりまする」

物見の注進を受けた頼重は、みぞおちを揺さぶられるような衝撃に顔をゆがめる。

「それがまことのようだら、もはや城を枕に斬り死にのほかはねえら。われらが一党に陣触れいたし、呼びあつめよ」

上原城の矢倉から、危急を知らせる法螺貝が吹き鳴らされた。

つづいて籠城をうながす鐘の澄んだ音が、蒸し暑い闇のなかにひろがる。
山峡に散在する大小の砦にいる地侍たちは、突然の貝鐘の音に色めきたち、小者を城へ走らせ様子をうかがわせた。
頼重の郎党近習どもは、小県郡への出兵と小笠原長時との対戦で受けた損害を補充していない。
そのうえ三年にわたる飢饉で体力衰え、軍馬も痩せて戦える状態ではなかった。
彼らは武田勢が押し寄せてきたと知ると、戦意を失った。
「甲州の人数は二万と申しておるようじゃ。そうなりゃ、動かぬがよし」
七年前に武田信虎が頼重の祖父諏訪頼満と和睦した際、仲介の役をした諏訪上社の神官守矢頼真が、具足に身をかため、家来を引き連れ上原城に入城すると、頼重は近習三十人ほどに囲まれていた。
主従はいかめしく具足に身をかためているが、気勢はあがらない。
痩せおとろえ、足どりも乱れがちな馬に、貧寒とした古具足をつけた武者が乗ってくる。
夜通し篝火を燃やし、法螺貝、鐘を鳴らすが、集まってくる家来はまばらであった。
さいわい夜があけても敵は見えず、無事に一日が過ぎ、つぎの日も敵はまだ姿を見せない。
上原城には騎馬武者三百五十騎、徒歩武者八百人が集結していた。

武田勢は降りつづく細雨のなか、御射山原に陣小屋をつらねていた。
「甲陽日記」によれば、
「二十九日御射山原御陣所鶉取り候て御調美」
とある。
晴信は鶉を狩らせ、料理させるなど戦うまえに敵を呑んでいる。
頼重が抵抗したところで、鎧袖一触で戦は終ると見ていた。
頼重は戦機をとらえるに拙ない愚将であるが、いちおう千をこえる軍兵が集まると強気になった。
「われら諏訪の神人には加護がある。むざと負くることはねえら」
七月一日の朝、頼重は上原城を出撃し、南東およそ十町（約一キロメートル）の矢崎原、犬射馬場（茅野駅附近）へ兵を進めた。
雨が降ってはやみ、霧が出ていた。
「この先の長峰、へたか馬場へ物見を出せ」
黒母衣を背負った物見の武者が、霧のなかへ馬を走らせていった。
宿老たちは強気の意見を口にした。
「甲斐の者どもが二万というは、多過ぎまする。まずは四、五千にてございす。そうだら、地の利を知ったるわれらが夜討ちを仕懸けなば、勝機はあると見てようございす」

彼らの推測は当っていた。
武田勢は四千余人であった。
だが物見の兵は、霧の晴れ間にみえる武田の陣所の、おびただしい旗差物に怯えきって戻ってきた。
「甲州の奴輩の人数は、二万よりも多うごいす」
「人馬の物音は遠雷のごとく聞え、地震のごとく地を踏み震わせてごいす」
頼重は注進を聞くと、たちまち闘志が萎えしぼんだ。
「今宵こそが、敵を制するただひとつの勝機なれば、もろともに斬り入らねばなりませぬぞ」
宿老たちがはげますが、頼重は応じない。
彼は味方が逆襲をくらって総崩れとなり、敵の剛の者に追われた自分が地面に突き転ばされ、首を押し切られている血まみれの姿を想像して、ふるえあがった。
「二万に千の人数にて当りしとて、なすところもなく蹴散らされるずら。こうなりゃ、陣を引くしかねえ」
頼重は日没ののち、犬射馬場に居たたまれず、上原城下の十日町に後退した。
武田勢は物見を派して、諏訪勢の動静を絶えず探索し、退却したと知ると長峰、田沢（茅野市）へ進出し、さかんに篝火を焚く。

諏訪勢は夜討ちを仕懸けるどころではなく、厳戒のうちに朝を待つ。
彼らはわずかな物音にも浮き足立ち、流言の交錯するなか、武田からいつ夜討ちを仕懸けてくるかと戦々恐々として時を過ごした。
七月二日、諏訪勢はふたたびおそるおそる犬射馬場まで進出した。武田勢との距離は十町よりみじかい。
敵兵の咳ばらい、馬のいななきが聞える。
いつ白兵戦がはじまるかも知れない緊迫した状況のなか、突然西方に人馬の物音とときの声を聞いた。
物見の兵が駆け戻って注進する。
「伊那高遠頼継の人数が、杖突峠（茅野市・上伊那郡高遠町との境界）を越え、乱入してございます」
南面の武田の大軍と睨みあう諏訪勢は、窮地に陥った。
高遠勢は諏訪勢の前哨陣地を蹴散らし、安国寺門前（茅野市）に火を放った。
頼重は日没ののち、上原城へ引き揚げた。
晴信は頼重への攻撃をためらっていた。彼は頼重のもとにいる禰々と寅王を救出したい。このため、諏訪勢を一気に粉砕しないでいる。
上原城一の曲輪から山裾を見おろせば、城を包囲する武田勢、高遠勢の篝火、松明（たいまつ）がかが

やきあっている。

上原城は諏訪氏の本城にふさわしい要害であった。

霧ケ峰山地が南へ張りだし、諏訪盆地を二分する尾根の末端に位置する、比高百八十メートルの山頂にあり、八ケ岳山麓から諏訪湖までを見渡すことができる。

頼重は上原城にたてこもり、討死すると家来どもに告げた。

「城を枕に斬り死にいたす覚悟をきめしゆえ、退散いたしたき者はすみやかに去ね。儂はただ一人になりしとて、ここを退かぬだわ」

頼重は自暴自棄になっていた。

彼の一族、近習たちは、頼重をなだめる。

「諏訪の名跡をこの地にて絶やさぬために、いったん桑原城（諏訪市上桑原）へ引き移り、御身を全うなされよ」

頼重は家来たちに手を引かれ、むりに馬に乗せられ、北方半里の桑原城へ退却させられた。

時刻は亥の刻（午後十時）頃であった。

諏訪勢が退却に際し、上原城の屋形に火をかけると、武田勢が城下へ殺到し掠奪をはじめた。

「守矢頼真書留」によれば、

「諏訪のうち西東の躰、なかなか目もあてられざる次第」
という騒動になった。
桑原城は比高百九十メートルの丘陵上にあり、天然の要害である。
三日は押し寄せた敵勢と数度の衝突があったが、武田勢はあいかわらず満を持して大攻勢を仕懸けてこない。
日中は小雨まじりの風が吹いていたが、夕刻から大雨となり風勢がつよまってきた。
「明日の合戦支度は整いしか」
頼重は味方の配置をたしかめるため、山頂の一の曲輪から尾根筋を下り、帯曲輪、袖曲輪の防備を見廻りにでかけると、浮き足立って逃走のきっかけを探していた城兵たちは総立ちとなった。
「あれを見よ、はや御大将がいずかたへか逃ぐるぞ。われらも取りのこされては詮なし。逃げよ」
侍大将がおどろいて制止する。
「こりゃ、静まれ。逃ぐるでない。明日の合戦にそなえての、陣場見廻りじゃ」
声を嗄らして制止するが、軍兵たちには頼重とともに玉砕するつもりはなかった。
諏訪の老臣たちが頼重をいさめて桑原城へ後退したのは、武田の間者にすすめられてのことであった。

晴信は多数の軒猿を桑原城へ潜入させ、降伏すれば助命すると触れさせている。

頼重は、桑原城の守兵がまたたくうちに激減したのを見て、茫然としてなすすべもなかった。

頼重のもとに残留したのは、二人の弟をはじめ一族近習わずか二十人ほどである。

風雨の夜があけると、武田勢は桑原城を完全に包囲していた。

「こうなれば斬りまくって死ぬのみじゃ」

頼重兄弟が水盃を交し、敵中へ斬りこむ支度をととのえているところへ、武田方から使者がきた。

「ここに及んでなお一戦のお覚悟あっぱれ至極なれども、このうえのおはたらきは無駄死にと申すものにござりまする。

城を明け渡されなば、われらは異存なく和睦いたし、甲州へ引き退きまする。われら主人には諏訪家を滅ぼす存念はなく、親族の誼みをむすばれし間柄なれば、また復縁もなし給うべし」

頼重は和睦に応じた。

彼は晴信よりも、一族の高遠頼継に憎悪をむけていた。

彼は頼継が禰宜大夫矢島満清、下社大祝金刺氏と語らい、晴信に応援を頼んだと見ていた。

自分を滅ぼす計略を仕組んだのが、晴信であるとは見抜けない。

「このうえは甲州へ降参いたし、武田殿の人数申しうけ、高遠信濃守（頼継）に腹を切らすべし」

頼重はまだ晴信を頼っていた。

二十七歳の彼は、二十二歳の義兄弟に瞞着（まんちゃく）されていた。

翌五日に、頼重は板垣信方の兵が取りかこむなか、輿（こし）に乗せられ甲府へ護送された。

禰々と寅王の姿は見えない。

二人は頼重から遠ざけられ、小山田昌辰が案内して甲府にむかった。

晴信は頼重を切腹させるよう、板垣信方に命じていた。

妹の禰々は頼重に深い情愛を抱いているが、寡婦となるのもやむをえないと、晴信は心を動かさなかった。

戦国の世を生き抜いてゆくためには、情は禁物である。敵を寛大に扱えば、寝首を掻かれる結果を自ら招くことになると、晴信は考えている。

少年の頃から信虎に従い、敵を容赦なく殺戮してきた経験が晴信の身内につみかさなり、いかなる手段を用いても敵を侵略し滅亡させるという、頑強な意志をかたちづくっていた。

頼重は甲府に到着して、ようやく自分が囚人であることに気づいた。彼は躑躅ケ崎館へ案内されず、城下の古屋敷に閉じこめられた。

晴信は姿をあらわさず、禰々と寅王の安否は、たまにおとずれる板垣信方から、躑躅ケ崎館にいると知らされるのみである。

九日に躑躅ケ崎館に凱陣していた晴信は、十九日に板垣信方に命じた。

「頼重を、一両日のうちに腹切らせよ」

しばらくの日時を置いたのは、晴信にも彼を助命すべきか迷いがあったためである。

頼重はその日、板垣信方が管轄する会下の東光寺学寮（甲府市東光寺）に移され、二十一日の寅の刻（午前四時）に切腹させられた。

諏訪頼重滅亡ののち、諏訪郡は宮川より西を高遠頼継が領地とし、東は武田の直領となった。

晴信は上原城を侍大将秋山信友に守らせた。

高遠頼継は諏訪惣領家となることを望み晴信に協力したが、宮川以西の地を得たのみであったので、不満であった。

頼継の内心を上社禰宜矢島満清が察して、ひそかにはたらきかけた。

「諏訪一郡は先祖より伝来の地にございます。それを甲州者に取られしは不覚と存ずるいら。かくなれば武田を打ちはらうほかはねえずら」

頼継は応じた。

彼らは晴信が諏訪郡の半ばを占領したことに、警戒の眼をむけていた。いま武田を一撃しておかねば、さらに侵略の手をのばしてくるかも知れないと危惧している。

頼継と満清は急遽挙兵を決め、九月十日に突然、上原城を襲った。

上原城の守将秋山信友は千に足らない城兵を叱咤し防戦したが、敵勢は数も知れない大軍で、雨のように矢を射かけ、空濠に草を投げこみ埋めると、鹿柴をやぶって外曲輪へなだれこむ。

「退け、このままにては防ぐ手だてもないわ。甲州へ去ね」

情況を見て敏捷に判断を下した秋山は、城兵をまとめ夜闇にまぎれ城を棄て、退却した。

晴信は甲府へ戻った秋山から注進を受けると、ただちに陣触れを発し軍勢を召集した。

彼は高遠頼継の心中を読み、戦いを仕懸けてくると予想していたのである。

諏訪氏の領地と大祝の神職を獲得するため、かならず攻撃してくると見ていた頼継は、二カ月後に押し寄せてきて、上原城を陥れたのち諏訪上社、下社を占領した。

高遠、矢島連合軍は五千余の大兵であるという。彼らは下諏訪の町に焼討ちをしかけ、逃げまどう住民を追いはらい、掠奪をほしいままにしているという。

晴信は九月十一日、板垣信方に二千の兵を与え、先手として出撃させる。

自らは本隊三千余を率い、十九日に甲府を出陣した。
晴信は頼重の遺児寅王を擁し、頼重の一族とその領民を味方につけようとした。
自分が頼重に腹を切らせたことをいわず、生後六ヵ月の寅王に父の復讐を遂げさせる名目で、兵を進めたのである。
武田勢は若神子（北巨摩郡須玉町）から諏訪に乱入し、境川に布陣する。
晴信の作戦は図にあたった。
寅王を擁していたため、亡き頼重の叔父満隆、満隣をはじめ、一族の矢島、小坂、有賀、千野らのほか、上社神官守矢頼真が武田方に就いた。
当時諏訪の領民は、晴信よりも、同族でありながら頼重を攻めた高遠頼継につよい怨恨を抱いていた。
二百年も以前に諏訪家から分れた高遠氏が諏訪惣領職に就くことを、領民たちは許さなかった。
晴信は諏訪頼重を亡ぼした元凶でありながら、高遠、矢島に頼重の弔い合戦を仕懸ける奇妙な立場にいる。
彼は二十四日、つぎの願文を諏訪社に捧げ、戦勝を祈った。
「奉納願書のこと。
右の意趣は、今度のはたらき利運については、具足壱領、馬壱疋、伊那郡に於て百貫文、

神領これを付くべきものなり。
よって願書かくの如し。
天文拾壱年壬寅九月廿四日
武田大膳大夫晴信（花押）
諏訪法性上下大明神
御宝前」

翌二十五日、武田勢は安国寺門前、宮川の畔に進出した。
川をはさみ、対岸に敵勢がひしめきあっている。
高遠頼継に属するものは、矢島満清をはじめ、有賀遠江、同伯耆、諏訪能登らであった。
晴信は板垣信方と作戦を練り、前夜のうちに河原の叢中に一文字の土居を築かせ、そのうえに鹿柴を置き、内側へ弓衆五百人、侍槍の一隊と遊兵千人ほどを潜ませた。
朝霧が晴れるまえ、全軍は土居の前面に出た。
合戦は未の刻（午後二時）頃にはじまった。高遠、矢島連合軍は果敢に戦い、一歩も引かない。
寄せ太鼓が雨のように打ち鳴らされ、眼の下頬当をつけた腹巻姿の足軽勢が、乱髪をなびかせ血しぶきをあげ斬りあう。

白兵戦は一進一退して、容易に勝敗は定まらない。
「敵もなかなかのはたらきにございす」
武田勢旗本本陣勢を指揮する板垣信方が、晴信にいう。
「あと半刻もたつうちに、手だてをお使いなさるるがよしと存ずるでございす」
「うむ、そうするいら」
晴信は使番の黄母衣武者を呼び、何事かを命じた。
使い番は馬を躍らせ、敵味方が砂埃をたて怒号叫喚して激突する河原へ駆け去った。
まもなく武田勢の先手が浮き足だってきた。白刃に火を降らして斬りむすんでいた足軽勢がまず崩れ、退却しはじめる。
先手の部隊も、動揺にまきこまれた。
敵はいきおいに乗り、天地も崩れんばかりの喊声とともに突撃してきた。
武田勢先手はなだれるように潰走し、左右へ逃げ散る。
高遠、矢島勢の物頭たちは、深入りを警戒し、声を嗄らして制止した。
「返せ、返せ。押し込んで囲まれるな」
だが逆上した軍兵たちは足をとめない。
敵勢は土居の横手を、地響きたてて通過する。先陣の功をあげようと揉みあい疾走する彼らは、不意に右手から矢が降りそそいできたのに気づいた。

「伏奸(ふせかまり)じゃ、返せ」

血槍をふるい、武田の徒衆(かち)を追いあげていた高遠勢が、ようやく危険に気づいて足をとめたとき、土居のうしろから長槍を抱えた侍槍の一団があらわれ、右側面に突き入ってきた。同時に、逃げ走っていた武田の軍兵が、寄せ太鼓もやぶれよと打ち鳴らし、三方から襲いかかってくる。

戦況は一瞬のうちに逆転した。

いままで荒れ狂っていた高遠、矢島の軍兵は狼狽し、悪鬼のように馬上で槍をふるう武田勢に隊形を寸断されると、眼前に死が迫っているのに恐怖し、得物を捨てわれがちに引き返してゆく。

武田勢は追撃に移ると、ときの声をあげ、凄(すさ)まじい殺戮を展開した。

地にひざまずき命乞いする者も、容赦なく首を刎ねられる。

踏みにじられた草原は、血にいろどられ、人馬の屍体はうずたかく折りかさなる。

酉(とり)の刻（午後六時）まで武田方の掃蕩戦はつづき、高遠、矢島勢は七百余人の死者を遺棄して逃走した。

高遠頼継の弟頼宗（蓮芳軒）、矢島満清の二子も討死を遂げる。

頼継は近習勢に護られ杖突峠を越え、ようやく伊那郡高遠へ辿りついた。

武田勢は敵を追い藤沢口と上伊那口（有賀峠口）から伊那に乱入し、残敵を攻撃した。

晴信の武将駒井高白斎政武は二十六日に、守矢頼真の道案内で藤沢口に火をかけ、福与城（箕輪城）の藤沢頼親を攻め、二十八日に降伏させた。

諏訪郡を完全に掌握した晴信は、板垣信方を郡代とし上原城を護らせた。

「これにて諏訪郡は手のうちに入り、高遠が領分をも申しうける理が立つことにあいなったずら。まずは祝着と存ずべし」

「まことに仰せの如く、御武運の栄えは時とともにますますお盛んなるものと、勘考いたしてございす」

晴信と板垣信方は、信濃侵入の拠点として諏訪の地を得たよろこびを語りあった。

天文十二年（一五四三）正月十九日、晴信の妹禰々が自殺した。享年十六歳であった。

彼女は夫の諏訪頼重が兄に亡ぼされてのち蟄居ケ崎館にいたが、亡夫の菩提をとむらい、読経三昧の日を送るうち、世をはかなみ命を断ったのである。

晴信は寅王が成人すれば諏訪家の名跡を立てさせるといってはいるが、あてにはならない。禰々は兄が自らの欲望のためにはなにものをも犠牲にしてかえりみない、冷酷な一面をそなえているのを知っていた。

晴信は頼重を自刃させたのち、彼の先妻の娘である諏訪御料人をわが側妾とした。

禰々と諏訪御料人は同年であった。

妹の心中をもかえりみない晴信のふるまいが禰々を自殺に追いやったのであった。

晴信は天文十二年九月、信濃小県郡長窪に出兵し、大井貞隆を攻めて捕虜とし甲府で殺したが、大規模な作戦はつつしんでいた。

彼は全兵力をあげての信濃侵攻の機運は、まだ熟していないと見ていた。

正月に大風が吹き、甲府に大火がおこり躑躅ケ崎館も類焼したが、年末には新館が落成した。

翌天文十三年十月末、晴信は伊那に出兵し、藤沢頼親を福与城の出城荒神山（上伊那郡辰野町樋口荒神山）に攻めた。

頼親は天文十一年九月に、武田の部将駒井高白斎政武に攻められ降伏したが、ふたたび高遠頼継と結び、叛いたのである。

「小平物語」によれば、合戦の展開はつぎの通りである。

「天文十三辰の歳。上伊那の福与城に箕輪（藤沢）頼親在城なり。

同所より一里半ほどへだたる下諏訪の境、平出というところの近辺荒神山に砦を構え、小笠原長時より草間肥前、山上伊那衆少々籠めおき給うなり。

武田信玄公仰せらるるは、伊那長時持ち分へ出馬いたすべきあいだ、諏訪者案内のため先（導）をつかまつるべしとて、尾輪、高木、青柳、高梨、三沢、諸角、小野沢外記、小平、小沢、矢島、このほか大将武田典厩組同心に仰せつけられ、諏訪伊那の境有賀峠通りを二刻

（四時間）ばかりに打ち越え、平出、赤羽に着く。

未の刻（午後二時）より荒神の取手（砦）を取り巻き、三刻（六時間）の間ばかりに攻めやぶるなり。

雑兵百二十余、武田方へ首を討ち取るなり。味方も大勢手負い死人これあり。

長時公より差し置かれ候大将いまはかなわじと天竜川を渡り、七八丁川向うの羽場、北大出と引きとるなり（下略）」

典厩信繁（晴信の弟）は藤沢頼親を一蹴して凱旋したと記しているが、事実はそうではなかった。高遠頼継と、頼親の義兄小笠原長時が頼親を援けたため不成功に終ったのである。

甲州勢が退陣すると、高遠頼継がすかさず攻勢に出た。

「甲州の悪党どもが根も尽きはて、逃げ帰りおったずら、いまこそ諏訪へ乱入いたすべし」

天文十三年十二月八日夜、高遠頼継が大兵を率い、降雪のなか諏訪に乱入し、上社の神長守矢頼真の屋敷に火をかけ、劫掠をほしいままにして引きあげた。

頼継は諏訪郡奪回を念願していた。

彼はまだ晴信の実力を理解していなかった。

「武田は二万余の兵を動かすというが、いまだ弱輩なれば采配の振りようも知らぬ。恐るるほどの剛の者にてはねえずら」

晴信は雪融けを待っていた。

彼には高遠攻略の名分がある。

天文十四年（一五四五）四月十一日、晴信は四千の兵を催し、高遠攻略に出陣した。

十四日に上原城に着き陣容をととのえ、翌十五日昧爽（まいそう）に杖突峠を越え、高遠城を包囲した。

その日、細雨が降りしきるなか、武田勢は高遠城を包囲し猛攻を加えた。

高遠城（上伊那郡高遠町東高遠）は、月蔵山の西側山麓、比高五十メートルの丘上に位置し、三峰川と藤沢川の合流点に位置していた。

本丸を三峰川にのぞむ断崖上に置き、半円形の堀をへだて二の丸、三の丸を配置する要害であるが、晴信にとっては陥れるにたやすい目標である。

彼はあらかじめ城中に素っ波（すっぱ）、軒猿を潜入させ、夜に入って諸所に放火させた。

火の手があがり、城兵が消火に奔走する騒動の隙をついて、むかで組が三の丸に乱入する。

川べりの断崖をよじ登ったむかで組は、城内の要所に火薬を仕掛け爆発させ、諸門をひらき友軍を導きいれた。

「城中に謀叛の輩（やから）がおるいら。これは手のうちようもねえずら」

高遠頼継は大混乱のなかで、近習勢と必死に本丸を守っていたが、ついに十七日朝、万策尽きて抜け道を用い、逃亡した。

晴信は兵力をほとんど損ずることなく高遠城を陥れ、二十日には全軍を福与城攻撃に向けた。

福与城（上伊那郡箕輪町福与）は、高遠の北西三里の距離に位置している。天竜川東岸の河岸段丘、比高四十メートルの場所にあり、藤沢頼親が千五、六百の兵を率いてたてこもっている。

城方には藤沢織部、大泉上総という剛弓の射手がいて、寄せ手は彼らの矢を受け、大勢が死傷した。

福与城攻めは、武田方に損害続出し苦戦の状況となった。

そのうちに、信濃守護として安曇（あづみ）、伊那を中心に、南北朝の頃から勢力を伸張していた小笠原長時が、林城（松本市大字里山辺）を出て十数里を南下し、竜ケ崎城（上伊那郡辰野町宮所）に入った。

竜ケ崎城は伊那谷から善知鳥（うとう）峠を越え、松本平へ抜ける交通の要路にある山城であった。

福与城にたてこもる藤沢頼親の妻は、長時の妹である。

晴信が本陣を置く荒神山と竜ケ崎城は、天竜川をはさみ半里の距離にあり、両陣の旗差物のなびくさまはものものしく、近辺の百姓どもは狼狽恐怖して山奥へ逃げこむ。

武田の物見は敵陣の様子をうかがい、駆けもどって注進した。
「小笠原の総軍は一万五千と称すれども、実数は五千ばかりと目算つかまつってごいす。また小笠原長時が舎弟信定が、二千余の人数を率い、後詰として伊那郡に控えてごいす」
戦況は一進一退の膠着状態となった。
晴信は背後に小笠原勢をひかえているので、福与城を我攻めに陥れることができない。
板垣信方は無理な行動をつつしむよう進言した。
「いましばらくは動きをつつしみ、機をうかがうが上策と存じまするいら。敵が仕懸けて参りしうえにて、隙をつくのがようごいす。腹背に敵を受けしときは、こなたより動きてはかえって隙をつかるることとあいなりまするに」
晴信は信方の意見を容れた。
昼間は足軽衆を繰りだし、福与、竜ケ崎の両城をうかがわせ、敵の先手の兵が出撃してくると果敢に攻撃させる。
終日喊声をあげ、寄せ太鼓を山肌にこだまさせての小競りあいをくりかえし、日没とともに夜討ちを仕懸ける。
武田勢のむかで組数百人が、二十人ずつの小集団に分れ敵の柵際に忍び寄る。
一隊が木蔭から柵内の敵兵に矢を射かけ、篝火のなかに煙硝を投げこみ騒ぎをおこす。
敵は狙撃され、篝火が閃光をあげて爆発するなか、うろたえつつも防戦に繰りだす。

そのとき別の一隊が鹿柴をやぶって敵の曲輪うちへ侵入する。

むかで組の兵士たちは、空濠を渡り断崖をよじのぼること平地を走るようである。

彼らは敵砦の要所に火をかけ、馬繋ぎ場の柵門をあけ、軍馬を疾走させ、陣中に大混乱をひきおこさせる。

「武田の人数千人推参」

「こなたよりも千人推参つかまつったぞ」

むかで組の兵士が喚きたてると、敵は脅え、闇のなかから刀槍をふりかざし走り出てくる者が味方であってもたしかめもせず、恐怖にかられ斬りかかる。

夜討ちの人数は、敵が同士討ちをはじめたのを見て、風のように引き揚げるのである。

晴信は陣中にいて、昼間は馬を歩ませ将兵を督励し、夜になると幕僚たちと酒をくみかわしつつ作戦を検討して、深更に至った。

彼が手足に使う軒猿どもは、毎夜敵城に潜入し様子を探ってくる。

「福与の者どもは、去ぬるところもなければ、腰をすえ手向いいたす様子にござれども、竜ケ崎にては毎夜の討ちいりに音をあげ、浮き腰になりおるように見えてございす」

晴信は予想通りに、小笠原の援軍が戦いに倦みはじめたのを知って、満足する。

「長時が後巻きの兵を引かば、福与の城は自然にわれらが手に入るずら」

彼は敵を威嚇する手段を用いることにした。

一ヵ月に及ぶ対陣のあいだに、討ちとった敵の軍兵の首級は、塩漬けにして保存しているが、梅雨期の湿気のなかで腐りかけている。

「首級の数はどれほどになりしかや」

本陣の首小屋の大樽からとりだした首級は、五百をこえている。

「これを今宵のうちに竜ケ崎の城際へ、串刺しにして立てならべよ」

腐臭をはなつ首を三尺ほどの竹串に刺し、夜更けに竜ケ崎城の大手口へ運び、地面に立ててゆく。

作業は明けがたまでつづいた。

城兵は東の空がしらみはじめる頃、野犬の群れの吠え声にめざめた。

「何事じゃ、犬どもが集まってきおったのう」

彼らは睡い眼をこすりつつ柵外を眺めて驚愕した。

「おう、あれは味方の首級ではねえか」

彼らは睡気も吹っ飛び、柵をつかみ眼をこらす。

「そうじゃ、あそこにおるのは権十ずら」

「平作もおるいら。あの天辺の禿げておるのは、甚内が親父殿でねえか」

悲鳴のような声があがる。

腐った首は乱髪を額際に貼りつかせ、血の気の失せた鉛色の肌に蠅をとまらせている。

「犬が食いにきおったずら。こりゃ、やめい」
雑兵たちは矢を放ち、首を喰いにくる野犬の群れを追いはらおうとした。
風が吹くと、外曲輪に屍臭が充満した。
軍兵たちは、味方の変りはてた首を眼前にすると、戦意を失い怯える。
「あげなざまになるのだら、去にてえ」
「まことじゃが。去んでお母に会いてえ」
小笠原長時は、幕僚に揺りおこされた。
「お殿さま、寄せ手の奴輩がわるさをいたしてごいす」
「なんと、いかなるわるさじゃ」
長時は柵際へ出て、顔色を変えた。
「臭いではないか。あれは儂が手の者どもか」
「わが手の者と、藤沢さまが手の者の首級にごいす」
「さようか、ならばすぐに引きとってねんごろに葬ってつかわせ」
長時は小心者であった。
刀創のあとも生々しい首級の群れを見て吐きけをもよおし、蒼ざめて引きさがった。
晴信の威嚇は効果があった。
竜ケ崎の小笠原勢が急速に戦意を失っていったのである。

「藤沢を後巻きせんがために、命を捨てることはねえずら」
「そうずら、去ぬべえ」
五月二十二日、晴信のもとに今川、北条からの援兵三百人が到着した。
人数はすくないが、関東、駿遠二大勢力からの増援は、晴信にとって心強い。
まもなく竜ケ崎城内に動揺の様子があらわれた。
軒猿が探索して、晴信に注進する。
「小笠原長時は、舎弟信定が荒神山を取りあいいたすべしと進言いたせしに応ぜず、このため信定が陣を引きはらいしため、後詰なく、自らもまた今明日のうちに退陣いたすとのことにございます」
「長時もようやくに腰をあぐるつもりになりしかや」
長時が藤沢頼親の懇願をふりきって、竜ケ崎城をひきあげたのは、六月一日であった。
竜ケ崎城内へは、板垣信方がただちに入った。
援軍に去られた藤沢頼親は長期の籠城に力つき、六月十日和議に応じた。
翌十一日、頼親は弟を人質に出して退散した。
武田勢は城中に放火し、猛焔は天に沖した。
晴信は十三日、全軍を率い荒神山を出て筑摩郡塩尻に兵をすすめ、小笠原長時の領地を蹂躙して、十七日に甲府に凱陣した。

武田の版図は諏訪から上伊那一帯に及び、小笠原長時は領地を中断され勢力を弱めざるをえなくなった。

七月になると、今川と北条の関係が悪化し、北条勢が駿河に侵入してきた。

晴信は今川義元を救援のため、駿河に出兵する。先手には、降伏して間のない藤沢頼親の軍勢が参加した。

諸国の情勢が急変するなか、晴信は義元との同盟の絆をつよめつつ、信濃侵略に全力を傾けようとした。

天文十五年（一五四六）、諏訪御料人が男児を出産した。のちの四郎勝頼である。

晴信はいかなる困難をも克服する意欲を身内に秘め、躑躅ヶ崎館で重臣たちと作戦を練った。

この年三月、晴信は高遠に新城を建て、伊那一帯の拠点としたのち、五月三日に佐久へむけ出陣した。

佐久の内山城には、諏訪頼重滅亡の際晴信に降伏した大井貞隆の子貞清がたてこもっている。

武田勢五千余人は、六日に前山城（佐久市前山）に到着し、九日に内山城を包囲した。

内山城は標高八百六十メートル、比高八十メートルの山城である。

南側は断崖で内山峡谷にのぞみ、北側も嶮しく切りたった数十メートルの断崖で、攻め口は本丸側からの一方しかない。

本丸の東側にある四つの曲輪は、三方が切りたった斜面で、要害として知られている。

大井貞清は本丸にたてこもり、五百余の城兵とともに激しく抵抗したが、十日には城内の水源地をはやくも武田勢に押えられ、窮地に陥った。内通者が知らせたのである。

武田勢には、諏訪衆、伊那衆ら新参の兵が参加し、彼らは先手として駆りたてられ、城兵の矢面に立ち、損害をかえりみることを許されず、無二無三に攻めたててくる。

一歩ずつを血であがなう白兵戦をかさねつつ崖をよじ登り、十四日には本丸と四つの曲輪へ大井貞清を追いつめた。

貞清は百余人に減った城兵を督励して懸命に戦い、なお五日を持ちこたえる。

晴信は十九日の夜、東方の絶壁からむかで組を登らせ、曲輪へ乱入させた。

大井貞清は、思いがけない方角から斬りこんでくるむかで組を撃退するすべもなく、ついに降参した。

「大井左衛門尉貞清、もはや矢数も尽きしゆえ、このうえはお手向いをいたさず、降参つかまつる」

近習が大音声で告げ、寄せ手は攻撃をやめた。

大井貞清が野沢（佐久市）へ去ったあと、七月に武田の部将上原伊賀守昌辰（のちの小山田備中守）が内山城に入った。

晴信は内山城陥落ののち、佐久地方の諸豪族を降伏させたが、志賀城（佐久市志賀）の笠原新三郎清繁は、服属を拒んだ。

笠原は村上の支族で佐久平の地侍がすべて降伏したあと、頑強に孤塁を守っている。

城は標高八百八十メートル、比高百七十メートルの山頂にあり、上野の西牧の谷から志賀峠を越え、佐久平に入る要所をおさえている。

「あやつは上野の侍どもが後巻きを頼りといたし、従わぬのでござる」

板垣信方が、軒猿どもに探索させ、志賀城の動静を詳しく調べていた。

「笠原が城兵はまず五、六百がほどにござるが、親戚の上野国菅原（群馬県甘楽郡妙義町）の城の主人高田憲頼が、合戦取りあいのおこらば、後巻きに押し出して参るに相違ござりませぬ。そのうえには伊那の小笠原も後巻きに出るものと思わねばなりませぬ。さらには、上野より管領が合力のため押し出すやも知れませぬでござる」

西上野一帯の豪族は、晴信がやがては佐久から彼らの領地へ進出してくると予想していた。

武田進攻の時期を一日でも延引させるため、彼らは笠原清繁を応援するのである。

笠原は、晴信が志賀城攻撃を開始するとの情報を得ると、ただちに急使を高田憲頼のもと

へ送り、増援を要請した。
高田憲頼は一族の高田右衛門佐父子に千余の兵を預け、志賀城へ向わせた。
晴信は天文十六年（一五四七）七月十八日、八千の兵を率い志賀城攻めのため諸軍を甲府から進発させた。
山城ひとつを陥れるのに、兵力が過大であるのは、上杉憲政の来援があると予想しているためであった。上野国平井（群馬県藤岡市）に本拠を構える関東管領が兵を動かせば、万をかぞえる規模になるのを覚悟しなければならない。
閏七月上旬、先鋒部隊が志賀城を包囲する。
晴信は同月十三日に甲府を出馬し、二十日に桜井対馬守の居城稲荷山城（南佐久郡臼田町）に着いた。
武田の軍兵たちは、合戦のまえから意気込んでいた。
敵勢の男女への暴行掠奪が許されているからである。
「このたびの合戦では、敵を一人もあまさず撫で斬りにせよとのお指図じゃん。女子も奪い取れと許されておるずら。ひとつ腕によりをかけ、眉目よき女子をひっ捕えねばならねえ」
雑兵どもは、歯を剝き舌なめずりをしかねない顔つきであった。
城攻めがはじまったのは、二十四日未明である。
朝霧をついての攻撃は、樹幹をバネに利用しての投石からはじまった。

数十貫の石塊が雨のように空を飛び、鹿柴、木柵のうちにいる軍兵をはねとばし、叩きつぶす。

外曲輪の城兵をなかば殺傷し、戦力を減殺した頃をみはからい、武田方は水の手を押えにかかった。

志賀城の水源は、武田勢が到着して二日めに奪われた。

山城が水源を断たれることは、落城の日限をきめられたと同様の、重大な痛手である。このため、築城の際には敵が容易に察知できない場所に水源をさだめ、平時から秘匿している。

武田勢は山城攻囲をはじめると、数日後にはたやすく水源を発見し、金掘り人足を駆使して水の手を断った。

晴信麾下の足軽大将曽根下野守昌世が、水源奪取の任務を与えられている。曽根は武田勢の情報将校で、日頃から多数の軒猿を敵地へ潜入させ、内状を探索させていた。

軒猿たちは合戦のはじまる前、敵城へ小者、雑兵として雇われ、水汲み仕事をするうちに水源を探りあてておくのである。

志賀城主笠原清繁は、水源である外曲輪の井戸が急に水位を落しはじめたとの注進を受け、顔色を失った。

「それはまことか、虎生谷の曲輪を検分に参らねばならぬ」
笠原は本丸の根小屋を出て外曲輪空濠際の井戸をあらためにゆく。
径一丈もある石枠にかこわれた大井戸は、たしかに水位を下げている。
「昨日よりは三尺ほども下ってごいす」
番兵が不安の眼差しを水面に落す。
「この井戸はいかなる日照りのときも、一尺たりとも水の減りしことはねえずら。これは水の手を断たれたのにちがいねえ。このまま見過ごさば井戸は涸れようぞ。いまある水を人手をあつめ汲みだし、瓶に移しておけ」
笠原は満山をゆるがす蟬の声のなかで、放心したように暗く光る水面をのぞきこむ。
彼は幕僚たちとともに重い具足を揺さぶりつつ山道を走り下り、虎生谷曲輪を検分にゆく。
虎生谷曲輪は本丸の北にあり、香坂川に通じる湿地にのぞんでいる。
狭隘な五十畳敷きほどの広さの曲輪を守っているのは、二十人ほどの雑兵であった。
笠原は低い土居のうえに身を乗りだし、笹の密生した斜面を見おろす。
急傾斜であるが、五十間ほど下の沢に通じる小道が笹の下につづいている。
「こなたへは敵が回りこんできてはおらぬようずら」
彼は幕僚たちと血走った眼を見交し、うなずきあう。

一帯の地形は険しく、足を踏みこめば底なしといわれる湿地帯であるので、武田勢の近寄るおそれはないと見てよい。

笠原は笹原を吹きあげてくる風に鬢の毛をそよがせ、大手曲輪を攻めている武田勢の喊声を聞きつつ幕僚に命じた。

「人足を百人ほどこの曲輪に回し、いまのうちに幾何なりとも水を汲みあげさせておけ」

本丸に帰った笠原は、思いがけない吉報を得た。

使い番が頬を紅潮させて注進する。

「ただいま伊那郡松尾城（飯田市松尾城）より、小笠原殿が後巻きの人数八百、着到なされてござる」

信濃守護小笠原氏が送った援軍は、間道伝いに志賀城へ入城した。

笠原清繁は気力をとりもどす。

「小笠原殿の後巻きを頂くならば、信濃国中の侍どもをふるいたたせるほどのはたらきをいたしてござる。管領上杉殿も合力下されるとのことなれば、孤城よく持ちこたえて、甲斐の奴輩を追い退けてみせまする」

彼は小笠原勢を率いる部将に、意気たからかに挨拶をした。

武田勢は猛攻をかさねるが、十日を経ても陥落しない。

「これは我攻めいたさば、死人手負いが出ずるばかりじゃ」
晴信も腕をこまねくばかりであった。
城兵は礫を投げ、大木を投げ落し大童の防戦をつづける。
空濠の底には削ぎ竹が針鼠のように植えられ、濠の縁をよじ登ってゆく寄せ手は矢を浴びるばかりである。
「夜討ちを仕懸けるよりほかに、手はござりませぬぞ」
足軽大将多田淡路守満頼が申し出た。
「もはや今宵で城攻めは十二日めとあいなりまする。さすれば亥の下刻（午後十一時）をもって、搦手口より押し登ってごいす」
晴信は多田の申し出を許した。
城攻めをはじめて十一日が経過している。城兵も連日の激闘に疲労困憊しているはずであった。
寄せ手は先手を入れ替え攻めたてる繰り引きをおこない、休息をとりつつ戦っているが、城兵は昼夜の別なくはたらいて睡眠をとる暇もない。
夜討ちは敵に気配を察知され、やり損じれば大損害を覚悟しなければならないが、成功すれば一挙に城を制することができる。
その日は昼過ぎから細雨が降りはじめ、風が出てきた。

日没前には気温が下降し、霧がたれこめる。
「これはあつらえむきの日和だが、攻めくちを見分けるのに苦労いたすずら」
多田はむかで組の軍兵を率い、亥の下刻に志賀城の搦手にまわった。
道案内の百姓は、濃霧のなかでも道を違えることなく多田隊を導いてゆく。
樹々のあいだを縫いつつ爪先上りの道を辿ってゆくと、険しい斜面に前途を阻まれた。
「ここは虎生谷と申す切所にございます。この辺りの崖下は底なしの沼地にて、人も近寄れぬところなれば、このうえの曲輪には城方もわずかに詰めおるばかりにございす」
多田満頼は武田家中で聞えた猛将である。
彼は屏風のような崖を手で撫でてみて、こともなげにいう。
「これは岩場にてはねえじゃ。草の生いしところなれば、登るに何の苦もなし。それ、先陣をあらそうて登ってみせよ。登りしならば、曲輪うちの者どもは撫で斬りじゃ。恩賞は晴信旦那に願い望むがままに貰うてつかわすほどに、粉骨いたせ」
細雨のなか、軍兵たちは草をつかみ手足の金具をつかいよじ登ってゆく。
小半刻（三十分）ののち、多田は頂上の曲輪に忍び寄った。
道案内のいう通り、曲輪うちには二十人ほどの雑兵が陣小屋のうちで篝火に暖をとっているのみであった。
夜討ちに慣れたむかで組の軍兵たちは、一人ずつ音もなく曲輪うちへ入りこむ。

三百人のむかで組が間近に迫っても、城兵たちは気づかない。

「それ、撫で斬りじゃあ」

寄せ手が襲いかかり、不意をつかれた城兵たちは仰天して得物を取るが、四方から斬りかけられ、抗う暇もなく斬り伏せられてしまった。

多田は本丸へ押し寄せようとしたが、思いとどまった。

味方は三百人のむかで組である。本丸には数千の城兵がたてこもっている。

虎生谷曲輪から本丸への通路が、一間に足らない崖沿いの小道であるのを知った多田は、曲輪を占拠したまま翌朝を迎えることにした。

夜があければ、味方を誘導して兵力を増強することができる。そのうえで本丸へ押し寄せればいい。

多田の推測は正しかった。

虎生谷曲輪から逃げ帰った雑兵が、武田勢の侵入を知らせると、城中の将士は動揺した。

「なに、虎生谷を敵勢が登ってきおったかや。あれほど切り立った崖を、夜中に登れるとは思えぬずら。何ぞのまちがいでねえか」

城将笠原清繁は、しまったと臍をかむ。

彼は昼間には虎生谷曲輪に水汲みの雑兵三百余人を置いていたが、夜には本丸へ引き揚げさせていた。

まさか崖をよじ登って夜討ちを仕掛けてくることはあるまいとたかをくくっていたのが、取りかえしのつかない手落ちとなった。

笠原は本丸の人数をこぞって虎生谷奪還に向わせたが、狭隘な道を塞がれたのでどうにもならない。

虎生谷曲輪を奪われては、城中はたちまち水不足となり、四、五日のうちの落城を免れない。

笠原は使い番に命じた。

「そのほう早速に上野平井へ走り、管領殿に後巻きをお頼みいたして参れ。われらが城はもはや水の手を断たれしゆえ、こののち四、五日も保ちませぬとな」

上杉憲政は急報をうけると一万余の援軍を編成し、大挙救援におもむいた。

憲政麾下の金井秀景が総大将となり碓氷から信濃に入り、浅間山麓小田井原（北佐久郡御代田町小田井）に布陣した。

志賀城を包囲していた晴信のもとへ、北佐久郡岩尾城主である武田方の属将真田幸隆から急報がとどいたのは、八月五日であった。

「上野平井の上杉が、一万の兵をこぞって信濃にむかいおりまする」

晴信は全身に電撃を走らせる。

信濃に侵入している武田勢の四囲はすべて敵であった。

志賀城攻囲の最中に背後から大敵の攻撃を受ければ全滅のほかはない。いますぐに兵を引いても、笠原、小笠原、高田連合軍に急追され、総崩れになるのはあきらかであった。

「いかがいたすか」

晴信は幕僚を集め、軍議をひらいた。

「お屋形さまには、道はひとつとはやご了簡なされておらるるずら。管領の人数をば、道中にて討ってとるか、われらが討ち滅ぼされるか、二つにひとつしか道はなきことにございす」

板垣信方が眼光するどくいいはなった。

甘利備前守虎泰が語気はげしくいい募る。

「いまは思案いたすいとまもねえずらか。これよりただちに小田井原へ駆けつけ、伏奸を仕懸けて管領の人数を討って取るばかりにございす。板垣殿とわれらのほかに、横田、多田の両人あらば、三千の兵にて万余の敵を打ちやぶってご覧にいれ申す」

甘利は板垣信方とおなじく侍大将をつとめている。

戦巧者としての高名は諸国へ聞え、合戦場に出ずれば猛牛を野に放つがごときいきおいで荒れまわり、甘利出陣と知った敵は戦わずして敗走するといわれた猛将である。

横田備中守高松は、おなじく侍大将で、近江佐々木源氏の流れを汲む荒武者であった。

彼は先手必勝をこころがけ、合戦に際しては常に武田勢の先手に立ち、阿修羅のはたらき

をあらわす。

板垣、甘利、横田、多田の四将は、三千の精兵を率い小田井原へ急行した。

八月五日の夕刻、板垣隊の物見が、旗差物をたてつらね宿営している上杉勢の陣所を発見した。

板垣信方は甘利ら三将と敵陣を偵察し、騒めくさまを望見してあざわらった。

「管領が兵は、人数多きをたのみて、おちつかざるさまじゃ。夜討ちを仕懸けるのも一法にてあろうが、やはり伏奸のうちに誘いこみ、一網打尽となすが上々の策にてあるだ」

「いかさま、さようじゃ。では夜のうちに支度をととのえるといたすずら」

翌日の夜明けまえ、板垣信方が千余の兵を率い、ときの声をあげ上杉の陣所を急襲した。

さきに潜入していた軒猿が、陣所の馬繋ぎ場の柵をあけて軍馬を暴走させ、諸方に火を放つ。

上杉勢は突然きりこまれて混乱したが、まもなく立ち直った。

彼らは敵前での宿営であるため、不意討ちに備えていたので、板垣勢が小兵力であると見破ると陣容をたてなおし、逆襲してきた。

板垣勢はしだいに斬りたてられ、後退してゆく。

半町ほど退いたあと、総崩れとなり逃げ走った。

「待て、深入りいたさば敵の術中に陥るぞ」
上杉勢の組頭たちが声を嗄らして制止し、上杉勢は足をとめた。
彼らは埋伏の敵を警戒していた。
板垣隊は上杉勢と半町ほどをへだてて睨みあう。
そのうち、たがいの中間の森蔭から七、八百の武田の兵があらわれ、板垣隊と合流した。
上杉勢は楯を叩いてあざける。
「あれが武田の伏奸にてありしか。わずかあれしきの伏兵にて、万余のわれらが同勢を討てようか」
彼らは総力をあげての攻撃を前面の武田勢に加え、粉砕しようと、鉾矢形の陣形をとり、寄せ太鼓を雨のように打ち鳴らす。
上杉勢は本陣でたからかに法螺貝を吹き鳴らし、左右に展開すると、地を踏みとどろかせ、喊声とともに突撃してきた。
板垣隊は踏みこたえることもなく潰走しはじめた。
「それっ、叩っ斬れ」
「一人もあまさず討ってとれ」
上杉勢が侍槍の集団を先頭に、板垣隊に追いすがろうと陣形を前後へ延ばしたとき、右手から武田の密集部隊が槍先をつらね、天地も崩れよとときの声をあげ、突っこんできた。

「武田の伏奸じゃ」
「なに、まだ隠れおりしか」
上杉勢は歯噛みして、右手の敵に立ち向おうとしたが、潰走していた板垣隊が引き返し、槍を突きいれてきたのでうろたえた。
彼我いりみだれての凄惨な白兵戦がはじまり、密集した軍兵が刀槍をふるい、たがいの首を奪いあう修羅の光景が出現した。

初秋の陽が照りわたる小田井原は、血に染んだ軍兵の屍体が散乱し、やぶれた旗差物、折れ砕けた兵具で足の踏み場もない有様となった。
上杉勢は武田の伏兵に突き崩され、隊形を崩し大混乱に陥り、おびただしい屍体を残し、潰走していった。
晴信は四つ（午前十時）過ぎに、敵の首級三千余を実検した。
名のある侍大将十五人の首級は、軍礼にもとづきあらためる。
晴信は甲冑をつけ床几に腰をかけ、太刀の柄に手をかけて鍔もと三寸ほどをくつろげ、左眼で首の片面を見る。
彼の左脇には午歳の侍が白木の弓に塗り弦をかけ、三角の尖り矢をつがえひかえる。
右脇には子歳の侍が塗弓に白弦をかけ、雁股の矢をつがえてひかえる。

諸侍は厳重に武装して槍先をつらね、晴信の左右を固める。
首披露の侍は小具足をつけ、乱髪に鉢巻を締め、首を折敷に角違いにすえ、横顔を晴信の目にかけるようにして、左手に折敷を支え、右手で首の髻をつかみ、胸乳の前あたりに捧げ進み出る。
右膝頭を地につけ、左膝を立てて首級を実検に供するとき、晴信は左眼で三度首を睨み、心中に呪文をとなえる。
「本覚法身本有如来
生死怨敵即時皆滅」
実検が済んで首持ちが退くとき、晴信は扇子で自分と首級のあいだの空間に十文字を切り、呪文をとなえる。
「法然具足薩般若
心数心王過刹塵
各具五智無降智
円鏡力故実覚智」
このとき晴信の左右にひかえた侍が、掛け声とともに空中に矢を放つ。
諸軍勢は辺りをゆるがし、ときの声を三度放った。
野面に血の臭いが満ちていた。人体は血の袋である。疵口から血の流れつくした屍体は、

生前とは一変して萎えちぢみ、子供のような体つきになっている。
朱色に染められた野に、いきづまるようなまぐさいにおいがたちこめ、烏、銀蠅が飛びまわっている。
晴信は雑兵三千人の首級を置きならべた前に騎馬で出向き、ゆるやかに歩ませて実検を終えたのち、板垣信方に命じた。
「雑兵どもが首は志賀の城へはこび、夜のうちに大手に立てならべよ」
「承知つかまつってございす」
籠城勢の士気を減殺するため、上杉勢の首を志賀城の城門前に立てるのである。
武田方の夫丸人足たちは、腐臭をはなちはじめた上杉勢の首級を牛車に積み、運んでゆく。
「臭え、臭え。お前ら、怨霊になってとりつかねえでくりょう」
「迷わず成仏してもらわざあ、俺たちゃかなねえっつら」
人足たちは牛車に追いすがってくる烏の群れを追いはらいつつ、志賀城へむかった。
八月七日の夜があけると、志賀城の将士は大手門のまえに胡麻を撒いたように置かれたものを見て眼をこらし、胸をとどろかせた。
「ありゃ、何だ。首じゃねえか。どれだけあるだ。三千か、四千か」
「そんなに少なかねえずら、六千のうえもあるずら」

「ありゃ、どこの衆だ。いっさら分らんでねえか」
城兵は不安に身をおののかせ、血にまみれた蒼白の首級を眺める。
「武田の奴輩が、夜のうちに並べたじゃん。そうすりゃ、ありゃ味方か。上杉の衆かも知れねえぞ」
まもなく、武田勢が大手門の前に据えている大井楼のうえに、侍があらわれた。
彼は大音声で告げる。
「城中の者ども、よっく聞け。われらは昨日の夜のひきあけどきに小田井原の上杉が陣所へ取り懸け、一万余の敵を斬りたて打ちやぶり、おのしどもが待ちに待ちたる援兵どもは、四つ（午前十時）までに散り散りとなりて負け犬がごとく逃げうせしぞ」
城兵たちはどよめく。
彼らが待ちかねている上杉の援兵が敗軍すれば、落城の非運を逃れられない。
武田の侍は言葉をついだ。
「さて、おのしどもが眼のまえに竹串に刺して立てつらねしは、上杉の侍どもが首級じゃ。あと幾日かのうちには、おのしどももかように首胴はなればなれとあいなるのじゃ。いまより褌を洗うて、死出の支度をいたしおくがよい」
城主の笠原清繁は、小田井原の上杉勢敗戦の急報を前日のうちに受けていたが秘していた。

だが、三千の首級を眼前に並べられては、城兵の士気阻喪をくいとめられない。
組頭たちは懸命に部下を力づけようとした。
「あの首は、上杉の衆のものか分ったものではねえ。あやつらは、われらを気落ちさせんがため、近在の百姓を殺め、首にしてきたずら」
だが夜になると、間道伝いに逃亡する城兵の数がふえた。
一夜で三百人ほどが減ると、翌日には城兵の顔に怯えの色があらわれた。
「いまのうちに逃げにゃあ、皆殺しにされるずら」
「武田の奴輩は、女房子供もみせしめに撫で斬りとするらしいじゃ」
噂がひろまると、つぎの夜には女房子供を連れた雑兵が、群れをなして逃亡した。
武田勢は城兵が逃げやすいよう、わざと間道の周辺に兵を置いていない。
「命あっての物種ずら。早う逃げざあ」
雑兵たちは刀槍を手に、なだれをうって逃げ去ろうとする。
侍衆は声を嗄らし、制止した。
「こりゃ、何といたす。この期に及び見苦しきふるまいをいたすでない。逃ぐる奴は斬り棄てようぞ」
「なにを、むざと斬られようか。日頃より主人面をさらしくさって、気にくわぬおのれどもは、これでもくらえ」

雑兵たちは槍薙刀をふりまわし、喊声をあげ襲いかかる。
侍たちは多勢に押され、ひきさがらざるをえなかった。
八月十日の朝になると、城内に残留する将士の数は千人を割った。
「もはや引導を渡す頃おいとあいなり申してごいす」
板垣信方は数十人の軒猿を夜明けまえに城中へ潜入させ、付け火をさせた。
外曲輪の陣小屋から火の手があがったのは、明け六つ（午前六時）まえであった。
折からの東風に煽られた火焔はたちまちいきおいを増し、水不足に悩む城兵たちは土砂をかけ鎮火させようとしたが、火は柵門に燃えうつり、白煙は視界を覆った。
鹿柴が燃えあがると、武田勢が押し入ってくる。
寡勢の城兵は支えかね、二の曲輪に退く。
武田勢は間道も封鎖し、城中の残兵を一人も余さず討ちとろうと、間断なくときの声をあげ津波のように押し寄せてくる。
夜に入って、二の曲輪から出火した。
城兵が懸命に消火につとめ、いったん消しとめたが、九つ（午前零時）頃ふたたび燃えあがり、ついに二の曲輪も放棄せざるをえなくなった。
十一日は天明とともに武田勢の我攻めがはじまった。法螺貝を吹き鳴らし、寄せ太鼓を絶え間もなく打ち、返り血に全身を染めた野獣のような武田の軍兵が肉迫してくる。

「あやつどもを一人なりとも数多く、冥途の道連れとせよ」

城将笠原父子、援将高田父子以下、城兵三百余人が死力をつくして雲霞の敵勢を迎え撃つ。

彼らの死闘は九つ（正午）までつづいたが、笠原父子、高田父子は乱闘のただなかで敵刃を受け落命し、城兵も全滅した。

武田勢は城方の最後の一人まで追いつめ、鏖殺した。

降参した男女の運命は悲惨であった。

「妙法寺記」は、つぎのように記している。

「志賀殿御上（夫人）ヲバ小山田羽州給ッテ駒橋へ御同心申シ候。サルホドニ男女イケドリナラレ候テ、コトゴトク甲州へ引越シ申シ候。

サルホドニ二貫三貫五貫拾貫ニテモ、身類（親類）アル人ハ承ケ申シ候」

笠原清繁夫人は、武田の部将小山田出羽守信有が貰いうけ、駒橋（大月市駒橋）へ同行した。

また捕われた男女はすべて甲州へ送られた。甲州に親戚のある者は二貫から十貫の値で身請けをされたというのである。

晴信は志賀城を陥れてのち、八月二十二日に甲府へ凱陣した。

「妙法寺記」は、この年の甲州の様子をつぎのように述べている。

「コノ年モ信州甲州取リアイヤマズ。一年二度ヲハタラキ成ラレ候。ハヤ奉公ノ人々ハ、信州御陣ニ迷惑致シ候テ言語ニ及バズ」

甲州の住民たちは、一年に二度も出陣を強いられ、暮し向きは窮迫していた。

「世間ツマルコト無限」と「妙法寺記」に語られるほどであった。

浅間山麓小田井原で管領上杉の軍勢を寡勢で撃破し、要害志賀城を陥れた武田の戦力は、西上野の諸豪族と北信濃の強豪村上義清に脅威を与えた。

坂木（埴科郡坂城町）の葛尾城に拠る村上義清は、佐久、小県、更級、埴科、高井、水内の諸郡を従え、戦国大名としての実力を備えている。

武田と拮抗しうる兵備を擁する義清は、佐久郡を晴信に侵蝕され、小県郡も劫掠の危機にさらされると、決戦が間近いとみて合戦支度を急いだ。

村上氏は清和源氏頼信の後裔で、南北朝末期頃から葛尾城に蟠踞し、信濃守護小笠原氏と領地争いをくりかえし、対立してきた。

同族は高井郡に高梨、井上、綿内、小県郡に室賀、埴科郡に清野、水内郡に栗田、島津の諸氏がいる。

葛尾城は標高八百十六・五メートル、比高三百八十六・五メートルの峻険な山頂にある要害である。

上田盆地から長野盆地に流れている千曲川沖積地沿いの山なみにあるので、本丸曲輪からは、三水、出浦、新山、山田、和合の支城と狼火で連絡がとりやすい。

またはるか遠方の更級郡に点在する石川、塩崎、和田、小坂、佐野の諸城、小県郡の小泉、天白城も見え、偵察の要所である。

晴信は甲府に帰ると間を置かず、村上義清攻撃の準備をはじめた。

板垣信方は、積極策を進言した。

「鉄は熱きがうちに打たねばならぬでございす。いま間を置かば、葛尾が村上は力をたくわえるゆえ、手ごわき相手となり申す。されば、年があらたまれば早速に人数を催し、村上と雌雄を決せねばなりませぬだ」

天文十七年（一五四八）正月十八日、晴信は麾下諸侍の士気を振起するため、「信州本意においては、相当の地をあてがう」旨の朱印状を主な家来たちに与えた。

信濃経略の戦果があがれば、褒賞として多くの所領を与えるというのである。

二月一日、晴信は一万の兵を率い甲府を進発し、葛尾城攻略にむかった。

武田勢は降雪のなか大門峠を越え、小県郡に至り、上田原に布陣した。

上田原は現在の上田市の西方一里余、千曲川の対岸にある。

村上義清は葛尾城にたてこもろうとせず、七千余の兵を率い出陣し、野戦で勝負を決しようとした。

二月十四日、両軍は千曲川をはさみ対峙する。

村上義清は決戦をまえに策を練る。

武田勢は近年の連戦連勝に気を許し、信濃衆を見くびっている。義清は晴信の慢心の隙をつく作戦をたてた。

緒戦では敗走し、敵の先手が深入りしてくれば急に反撃して包囲逆襲する戦法である。

武田勢もしばしば試みる詭計で、目あたらしいものではないが、倨りたかぶって攻め寄せてくる敵に用いれば、意外の効果がある。

降雪のやんで凍てつく朝、戦機は熟した。

晴信は旗本本陣に二旒の旌旗を押したてさせた。

一旒は絹地に朱漆を施し、金泥で「南無諏訪南宮法性上下大明神」の神号を大書したものである。

いま一旒は、絹地に紺漆を施したうえに、快川禅師の揮毫した金泥のつぎの文字が二行に記されていた。

「疾如風徐如林侵
掠如火不動如山」

「疾きこと風の如く、徐かなること林の如し。侵掠は火の如く、動かざること山の如し」というのは、孫子の軍争篇からえらんだ四句であった。

合戦は雪雲の垂れこめた下で、辰の刻（午前八時）にはじまった。
武田勢先手は板垣信方の部隊である。
村上勢の先手は高梨政頼、村上清政の二隊である。
双方は下ノ郷という集落の附近で遭遇激突した。
たがいに旌旗を伏せ、戦意を燃えあがらせて突撃、乱戦となった。

北風が烈しく吹き荒れ、みぞれの降る日和であった。
板垣信方は村上の先手が二隊であるのを見て、率いる軍兵を二隊に分け、激突の間際に一手の密集隊形となり、村上左翼に殺到した。
武田の弓衆は敵の侍槍集団が馬腹を蹴って雪原を踏みにじり突き入ってくると、馬を狙い矢を放つ。
馬が矢疵を負って倒れ、乗り手が転落すると武田の足軽勢がむらがり飛びかかって首級をあげる。
双方の先手でめざましくはたらくのは足軽勢であった。彼らは印地（礫）を打って敵の鋭鋒をくじき、長巻をふるって敵の乗馬の足を薙ぎはらう。
村上勢は一歩も退かず斬りむすぶ。彼らは三人一組となり、庇いあって進退するのでつけ

いる隙がすくない。

板垣信方は旗本に護られつつ戦場に進み出て、采配をふるい楯を叩いて大声疾呼する。

「かかれ、かかれ。まっすぐに踏みやぶれ。切り抜けよ」

雪中長途の行軍に疲労している武田勢は、はじめは村上勢を烏合の衆とみくびっていた。連戦連勝を重ねている彼らは、信濃衆を相手の合戦であれば密集隊形で中央突破をはかり、後背へ切り抜ければかならず突き崩せると見ていた。

だが村上勢は獰猛に襲いかかってくる。

津波のように幾段もの備えでときの声をあげ、正面から刀槍をふるい地鳴りのするような攻撃を仕掛けてきた。

板垣隊の足軽勢が斬りたてられ、あとにつづく侍槍が前に出て懸命に槍をふるうが、前進の足取りがとまった。

白兵戦になれば、押されたほうが敗北する。足軽勢が崩れたときは敗走するよりほかはない。

信方は強引に前面の敵を撃破しようとはかった。

切先に炎を降らして突きあい斬りあい、半刻（一時間）ほど経つうちに、武田方二の先手の甘利虎泰隊が敵の右手から突入した。

村上勢は意外なほどの脆さを見せた。

いままで頑強に切りむすんでいた先手の足軽が太刀をかつぎ、背をまるめてわれがちに逃げ走る。

高梨政頼、村上清政の二隊がともに総崩れとなり、雪に覆われた河原をこけつまろびつ退却してゆく。

村上勢の中軍、旗本本陣勢は後方に旗幟(きし)をつらね、魚鱗の陣形を張って粛然と動かずにいる。

板垣隊、甘利隊の軍兵は、いきおいにのって村上主力の前面へ逃げる敵を急追していった。

合戦に際し敵が崩れても、中軍が備えをかためているときは深追いせず兵を引くのが合戦の要訣であるが、敵の後陣が備え厚く見えるときでも、行動をおこさないうちであれば、退却する先手を捕捉撃滅すべきであるとの戦法もある。

板垣信方は、味方をまとめ深追いを避けるべきであろうかと気迷いをしたが、二の先手の猛将甘利虎泰が侍槍の先頭に出て、狂ったように突撃してゆくので、強気で押しきろうと決断した。

「押せ、押せ、押せ。突き倒せ」

信方は怒号し、背後から本陣勢も動きだした。

晴信も主力をこぞって決戦を挑むつもりになったのである。

寄せ太鼓が乱打され、晴信本陣では聞く者の肺腑にひびく法螺貝の音が、総攻めをうながす。

「妙法寺記」に戦況を記している。

「去ルホドニ、タガイニ見合イテ川ヲ小楯ニ取リ候テ、軍ヲイレツ乱レツメサレ候」

村上勢の主将村上義清は、味方の先手に追いすがってくる板垣、甘利勢の背後から、才間河内守、初鹿野伝右衛門、馬場信春、飯富虎昌、原虎胤らの武田諸隊が迫ってくるのを見て、全軍に出撃を下知した。

村上勢は楯を叩き、ときの声を空にとどろかせ、四隊に分れ突撃する。

板垣、甘利に追われていた村上先手も足をとめ、ふりむいて武田勢に逆襲を仕懸けてきた。

四隊に分れていた村上勢は、武田勢の前面で一手となり、錐を揉みこむように突入する。

前面を遮る武田の軍兵は、えい、えいと掛け声をかけて突きいれてくる村上勢の槍先に突き負け、見る間に死人手負いの山を築く。

晴信本陣を中心に整然と進退していた歴戦の武田勢も、縦横に荒れ狂う村上勢に寸断され混乱した。

武田の諸軍は数十人の小人数に分れ、悪鬼のように刀槍を閃かせて迫る敵と必死の激闘をかさねる。

力尽きて敵に組み敷かれる者の最期の絶叫、槍に胴をつらぬかれる軍馬の悲鳴が剣戟の響きと交錯し、雪原が血に染められてゆく。

「退くな、退けば皆殺しにされようぞ」

遠征軍である武田勢は、敵地のただなかで生き残るために、現状を固守して戦いぬかねばならない。

全軍が潰走すれば追撃を仕懸けられ、甲斐へ戻るまえに全滅する。

武田諸隊は、おびただしい損害を出しつつ、懸命に戦う。

日没まで死闘がつづき、ようやく両軍は鉾を収めた。

武田、村上両軍の損害はそれぞれ三千人に近い。人馬の屍体は河原に山のように積みかさねられ、荼毘に付す火焔が終夜天を焦がした。

武田の諸将は身辺に護衛を置く余裕もなく、白兵戦の間に命を落した者が多かった。

晴信の信州経略の作戦を主導していた諏訪郡代板垣信方は、侵入してきた村上足軽勢に包囲され、近侍の家来の奮戦もむなしく乱刃のもとに倒され、首級を奪われた。

甘利虎泰、才間河内守、初鹿野伝右衛門も討死を遂げ、首のない屍を野にさらした。

晴信本陣にも敵の侍槍がなだれこみ、いりみだれての斬りあいとなった。

三百人ほどの近習勢が切先をつらね、死にものぐるいの接戦を展開し、半刻（一時間）ほどの死闘ののち、ようやく敵をしりぞけた。

晴信は右肩に一太刀斬りこまれ、浅手を負ったが、郡内勢を率いる小山田出羽守が駆けつけ、激しく戦って敵の猛勢をくいとめたので、命拾いをした。

晴信は手痛い敗北を喫した。

「爺を死なせようとは思わなんだ」

彼は疵の疼きに堪えつつ、飛雪の舞う空に板垣信方の俤をうかべる。家督を継いでのち、連戦連勝をつづけていた晴信の、最初の辛い体験であった。

武田勢は戦力の半ばを失ったが戦場を退去せず、降雪のなかで野陣を張った。

晴信が退陣の命令を下さないのである。

彼は陣小屋で寒気に堪え、疵を癒していた。千曲川の対岸には村上勢が旗幟をつらね、炊煙をたてている。

村上義清も武田勢との一戦で優勢を保ちえたとはいえ、やはり甚大な被害で戦力を半減し、再度の合戦を仕懸ける気構えはないようであった。

晴信は戦死者の法要をおこなったのち、合戦支度をきびしくととのえ、村上勢の押し寄せてくるのを待つ。

――村上ずれに背を見せられようか。いつなりとも仕懸けてこい。相手になってやらあず

眼ざめている間じゅう、敗戦の恥辱が晴信をさいなんだ。

これほどの恥辱を忍ぶくらいなら、死んだほうがましだと、晴信は血の出るまで唇を噛む。

板垣信方の作戦によって、向うところ敵なく破竹のいきおいであった信濃経略の、今後の見通しは立たない。

まもなく信濃の諸豪族の反撃があるものと、覚悟しておかねばならない。

村上勢を相手に死闘をおこない、かろうじて惨敗を免れた武田勢の軍兵たちは、意気あがらなかった。

多数の戦死者を出し、恩賞も期待できず、敵中に孤立している状況では、どのような苦境に追いこまれるか知れない。

「早う去にてえずら。ここに長居しても、よき事はねえら」

「勝手を知らぬこの辺りで、夜討ちを仕懸けられりゃ、手のつくしようもねえずら」

将兵は弓槍を手に夜中も篝火を焚き、警戒を厳しくした。

晴信に退陣をすすめる幕僚が多かったが、彼はかたくなに拒んだ。

いったん引き揚げ、軍勢を再編成して新規の作戦をたてるほうが有利であると分っていながら、晴信は意地を張っている。

「儂は甲府へは去なぬ。もう一度合戦取りあいをいたし、義清が首級を挙げねば去なぬ」

満身創痍の武田勢が、敵地に長期の宿陣をつづけるのは、破滅の危険を招くようなものである。

武田勢を鬼神のように恐れていた信濃の小豪族たちは、にわかに活気をとりもどしはじめた。武田になびくのをやめ、村上に帰服する者が続々とあらわれてくる。

諏訪郡は郡代板垣信方の戦死によって、動揺をあらわにしていた。

村上義清が戦力増強を急ぎ、伊那の小笠原長時の合力を懇請している内情は、軒猿の探索によって、逐一晴信のもとに達している。

それでも晴信は兵を撤退させない。彼は敵中に孤立すれば、それでも構わない、斬り死にを遂げようと自暴自棄になっていた。

上田原の戦いで武田勢が甚大な損害をこうむり、板垣信方以下多くの重臣が斬り死にを遂げたとの通報は、二月十五日に諏訪の駒井高白斎のもとに届いた。

十九日になって、高白斎は朋輩の今井相模守と相談し、甲府にいる晴信の生母御北様に事情を告げた。

「お屋形さまには上田の原にて、思いもかけぬ手痛き目にお遭いなされ、板垣はじめ甘利、才間、初鹿野ら多勢を死なせ、このうえは一歩も退かぬと敵中に兵をとどめおられてございます。このうえ退陣なさらねば、ついには破滅ともなりかねませぬずら。それゆえ、なにとぞ

御北様よりお言葉を頂戴いたし、退陣あすばされるようおとりなし願えれば、このうえのことはなしと勘考つかまつりまするに」

御北様は早速晴信に帰国を促す書状を認め、野村筑前守、春降出雲守を使者として上田原につかわした。

晴信は御北様の書状を披見したが、退陣を聞きいれない。

「母者とてわれらが存念をご分別いたされてはねえら。儂はこのままにては去ねぬ。何としても義清が首を貰いうけねば去ねぬずら」

彼が上田原を立ち退いたのは三月五日であった。

二十日余りの村上勢との対陣ののち、ようやく意地を納めたのである。

晴信はいったん諏訪上原城に入り、二十五日まで在城した。

その間に板垣信方の弟室住玄蕃允を上原城代と定める。甲府に帰陣したのは三月二十六日であった。

晴信は遠征軍を解散し、戦死者の慰霊をおこないつつ、軍馬を集め、あらたな作戦に備える。

唯一の朗報は、その年の作物がすべて豊作の兆しをあらわしていることであった。

「妙法寺記」にいう。

「此年世中十分ニ超エタリ。惣ジテ地へ落スホドノ物ハ一切吉。世間富貴ナルコト言説ニ及バズ」

晴信が甲府で再起の機を待つうちに、信濃の情勢は変っていた。

林城（松本市林）に拠る信濃守護小笠原氏が、村上義清、安曇郡仁科氏、藤沢頼親らの勢力を糾合し、四月五日に諏訪下社に乱入した。

四月十五日には上社の御柱引き、下社の宮移りの祭礼があるので、その前に諏訪を劫掠（こうりゃく）したのである。

御柱引きの祭は、晴信が人数を出し無事に終えたが、「神使御頭之日記」には、

「乱入ゆえ、社参の人これなく候」

と記され、人気のない祭礼となった。

六月十日になって、小笠原勢はふたたび諏訪下社へ攻めいるゲリラ行動に出た。

板垣信方戦死のあと、不穏な諏訪郡の人心を動揺させるためであったが、こんどは下社の地下人（じげにん）たちが反撃した。

彼らの戦意は意外なほどさかんで、小笠原勢は騎馬侍十七騎、雑兵百余を討ちとられ、大将長時も二ヵ所の手疵を負い退却した。

諏訪郡では小笠原勢の敗戦について噂が立った。

「あやつどもが手痛き目に遭（お）うたは、下社の宮移りの御祭を妨げしために、神罰をこうむっ

たつら」

「神使御頭之日記」によれば、諏訪社神官がつぎの予言をした。

「村上、仁科、小笠原らは、末々も御柱引き、宮移りを妨げた神罰を受けるにちがいなし」

七月十日になって、諏訪湖の西方に蟠踞する西方衆と諏訪神家の一族である矢島・花岡の兵が小笠原長時に通じ、晴信に叛いて諏訪郡へ乱入した。

神長守矢頼真、千野靱之尉ら、武田方の豪族は家財を放棄して上原城へ避難した。

甲府の晴信に諏訪郡の騒動の情報が届いたのは翌十一日である。

「このたびは仕損じをいたすまいぞ」

晴信は多数の軒猿を派して、敵の動静を探った。

晴信の出馬は迅速であった。

彼は三千余の兵を率い、大井の森（北巨摩郡長坂町大井ケ森）に移動し、野陣を張った。

あとを追ってくる兵の数がしだいにふえ、数日のうちに六千をこえた。

軒猿は敵情を偵察し、駆けもどってきて刻々に変化する状況を注進する。

「西の一族衆、矢島、花岡らの雑兵どもが、諏訪の町屋にことごとく火を放ち、荒れ狂うてござりまする」

「いまだ小笠原は出てうせぬか」
「小笠原、村上の雑兵どもも出でておりまするが、その数は二、三百に見受けてごいす」
「ならばいまだ長時は出て参らぬずら。長時がいずれに本陣を置きしか、たしかめて参れ」
長時の陣所を軒猿たちがつきとめてきたのは、十五日朝であった。
「長時は塩尻峠に旗差物をなびかせ、あらわれてごいす」
「人数はどれほどじゃ」
「およそ五千と見てごいす」
「陣小屋をつらねておるのかや」
「さようにごいす。小屋の軒をつらね、馬繋ぎ場をもこしらえておりまするに」
晴天のつづく夏のさなかに、陣小屋を設けるのは、長期の滞陣をするためであろう。
「陣の備えは、いかがいたしおるか」
「陣屋のまわりに鹿柴を結うてはおりませず、夜中には篝を焚いてごいす」
「陣の左右に伏奸を置きし様子はあるか」
「さようの様子はねえと見てごいす」
「こののちも物見をつづけよ。そのうち、敵は夜中に物具をつけぬようになるにちげえねえら。それを見届けりゃあ、突っ走って注進いたせ」
軒猿たちは諏訪へ駆けもどっていった。

晴信は大井の森に布陣したまま、二日のあいだ動かなかった。

十八日の朝、彼は全軍に出陣を命じ大井の森を出て上原城に入った。

塩尻峠に布陣している小笠原長時は、武田勢が上原城に到着したのを、まだ探知していない。

小笠原の軍兵たちは、村上衆、仁科衆、西方衆、諏訪神家ら多数の味方を擁し、気を許している。

七月十日以来、彼らが諏訪一帯で劫掠の限りをつくしているのに、甲斐の晴信はあらわれない。

「あやつめが出てうせぬは、上田原の取りあいでよほど痛き目を見たゆえにちげえねえずら。このまま押してゆかざあ。もはや諏訪はわれらがものとなりしも同然じゃ」

小笠原勢は思いあがっていた。

彼らは捕えてきた女をなぐさみものにし、昼間から酒をくらい、軍律は乱れ、放恣(ほうし)なふるまいをして警戒を怠った。

甲斐から塩尻までは二十里ちかい距離である。武田勢が甲府を出たという情報は届いていたが、信濃に侵入した形跡はない。

連日の焼討ちで得た戦利品を陣小屋にたくわえ、武具をつけている者は一人もいなかった。

「暑い日なかに重てえものを身につけておることはねえら。裸でおらざあ」
物頭、小頭たちが褌ひとつの裸体で陣中を徘徊する有様である。
夜になっても伏奸を置くどころか、見張りの兵の数も減らした。
晴信は十八日の深夜に上原城の全軍に出陣を命じた。
彼は汗のにおいを放ちひしめきあう軍勢に下知した。
「これより塩尻峠にむかい、小笠原の陣所に乱入いたす。道中に山坂はあれども、疾駆（はやがけ）にて参るゆえ、いらざるものはこの場に残してゆくがええら。敵を討ちとったる者は、思いのままに恩賞をとらせるずら」
武田勢は旗を捲き、夜道を駆け塩尻峠へむかう。
乾ききった野道に砂埃が湧きあがり、人馬は砂塵のなかをあえぎつつ走った。
寝静まった村落では、不意におこった地鳴りのような物音におどろいた男女が、道に出て腰を抜かした。
「こりゃ、おどろくほどの人数ずら。いずれの衆かや」
武田勢は諏訪湖北岸から塩尻峠へ急行する。
十九日の朝、まだ陽の登らないうちに武田勢は塩尻に到着した。
塩尻峠は諏訪、筑摩両郡の境にあり、三里余の長い坂であった。坂は険しくはないが途中に大軍を防ぐに屈強の節所（せっしょ）がいくつもあった。

晴信は麓に全軍を集結させると、むかで組を先発させた。
三百人の精兵は峠の諸所に設けた敵の小塁を急襲し、たちまち占領する。
本陣への連絡用に張りめぐらされた鳴子縄は、すべて切断した。
敵の哨兵たちは、寝込んでいたので、声をあげる暇もなくむかで組の軍兵たちに首をはねられた。
小笠原長時の本陣は、塩尻峠の頂上から諏訪のほうへいくらか下った四ツ屋という在所にあった。
晴信は、むかで組が合図の狼煙をあげるのを見ると、全軍に突撃を下知した。
こんどは負けてはならない一戦である。もし敗北すれば、諏訪郡は小笠原、村上の勢力下に入り、晴信は信濃経略の望みを捨てねばならないばかりか、勢力の退潮を四隣の敵に見すかされ、破滅の一途を歩まねばならなくなる。
合戦の勝敗は、偵察の遅速により決するのが鉄則であった。
晴信は小笠原勢の動向を逐一把握しており、長時は武田勢の迅速な進撃を知らずにいる。
このような状況のもとでは、負けるはずもないと思えるが、晴信は緊張していた。
鶏鳴が聞える暁の峠道を、武田勢は押しあい登ってゆく。
四ツ屋の小笠原本陣では、味方の軒猿が付け火したので、はやくも火焔がちらついている。

小笠原長時は、武田勢の叫喚と寄せ太鼓の音を聞くとはね起き、兵を集め、火災の煙をくぐって峠を登ってくる敵を迎え撃つ。

小笠原勢は不意をつかれたが迅速に立ちなおり、激しく白兵戦をいどんできた。

「鋒鋩(ほうぼう)はなはだするどく、接戦数合わが軍辟易(へきえき)す」

という戦況で、晴信は不安に胸をとどろかせる。

陽がさしそめた卯の刻（午前六時）すぎ、小笠原勢が突然動揺しはじめた。

敵将仁科、西牧、洗馬、三村が謀叛して、後方から同士討ちをはじめたのである。

晴信は彼らへひそかに誘降の手をのばし、利をもって誘っていたのである。

「おのれ、謀(はか)られしか。このうえは晴信ともろともに冥途へ送ってやらあず」

小笠原長時はふるいたって、前後から襲ってくる敵を迎えうったが、長時間を前後に敵をうけて戦うのは無理であった。

一刻（二時間）あまり、必死の白兵戦をつづけた長時は、ついに血刀をふるい近習勢とともに敵中へ斬りこみ、血路をひらいて峠の北麓長井坂を下って塩尻の町へ敗走していった。

武田勢は総崩れとなった小笠原勢を急追する。

長時は六里の山道を、幾度か反撃しつつ北へ走り、ようやく林城に帰城した。

小笠原勢は林城への退路を武田勢にはばまれ、桜沢から西行して奈良井に出て、御嶺通を迂曲してようやく戻ることができた者も多かった。

彼らの損害は甚大であった。武田勢があげた首級は一千余で、ほかに討ち捨てにされた雑兵が多数あった。

晴信の奇襲作戦は大戦果をもたらした。

彼の軍旗である孫子の旗に記す通り、甲府を発してのち八日間を大井の森にいて動かず、戦機を把握するや疾きこと風のごときいきおいで攻めかかり、大敵を撃滅したのである。

――儂は爺の讐をうちし思いずら――

晴信は板垣信方の幻に、胸のうちで語りかける。

塩尻峠の一勝で、晴信の前途は急速にひらける。二月の上田原敗戦でうけた打撃を回復し、信州制覇の望みをふたたびつなげることとなった。

天文十七年（一五四八）は、晴信の生涯において運命の岐路ともいうべき重大な変化の起った年である。

今川、北条に比べ、領地の狭小な武田が戦国大名の雄として抬頭するためには、中世的な小勢力が割拠する信濃を併呑するのが必須の条件であった。

信濃を征服すれば晴信は東日本で恐怖すべき強大な戦力を養えるのである。

七月十九日の塩尻峠の勝利は、晴信にとって将来「関東の弓矢柱」となるために投じた重要な一石であった。

晴信は諏訪の残敵を徹底的に掃蕩した。

西方衆は所領を奪われ居館を焼かれ、追放の憂き目を見た。

武田勢は二十五日に上原城へ引き揚げる。八月十日には諏訪大社に詣で、太刀一腰を献上し、戦勝を謝した。

焼きはらわれた敵の塁（とりで）には、首のない屍体がいくつも転がり、腐臭を放ち、野犬に喰われ、烏についばまれるがままになっていた。

晴信は馬上から、屍汁のにじみでた無残な亡骸（なきがら）を眺め、戦いの厳しさをあらためて味わう。敗者は地上から消え去らねばならない。

甲府に凱旋した晴信は、将士の功績に酬い、褒美を与えた。

晴信の出したつぎの感状が現存している。

「今十九、卯刻、信州塚魔（筑摩）郡塩尻峠においての一戦のみぎり、頸弐（くびふた）つ討ちとるの条、神妙の至りに候。

いよいよ忠信をぬきんずべきこと肝要に候。よってくだんの如し。

天文拾七年戊申

七月十九日　　晴信（朱印）

内田清三どの」

晴信が塩尻峠一勝のあと、作戦行動をおこしたのは九月である。

晴信出陣のまえに八月十八日、武田の部将小山田出羽守が田ノ口城（南佐久郡臼田町田野口城山）を攻撃したが、かえって佐久衆の重囲に陥った。

「妙法寺記」にいう。

「コノ年ノ八月十八日ニ佐久郡田ノ口ト申シ候要害ヘ、小山田出羽守殿大将トナリ御ハタラキ候。

サルホドニ信州ノ人数甲州衆ヲ籠ノウチノ鳥ノヨウニ取リ籠メ候ヲ、色々調儀ナサレ候テ、キタル九月十二日御上意ノ御馬ヲ出サセ候。

合力ニナラレ、佐久郡大将ヲコトゴトク打チ殺ス。

サルホドニ討チ取ルソノ数五千バカリ、男女取ル数ヲ知ラズ、ソレヲ手際ニナラレ候テ、甲州人数ハ御馬ヲオイレ候」

晴信は九月六日に諏訪を出陣し、佐久郡前山城にむかう。

八ケ岳南麓の道をとり、矢戸（北巨摩郡大泉村谷戸）、海ノ口（南佐久郡南牧村）、宮ノ上（南佐久郡臼田町旧青沼村）を通過し、臼田（南佐久郡臼田町）に到着した。

九月十一日、晴信は大雨のなか辰の刻（午前八時）頃、前山城（佐久市前山字城山）攻撃を開始した。

武田勢のいきおいはすさまじく、大雨のなか猛攻をかさね、前山城はその日のうちに陥落した。

「高白斎記」に、つぎのように述べられている。

「諏訪ヨリ佐久郡前山ニムカイ御馬ヲ出サレ、（中略）十一日癸未、辰刻ニウチ立チ、臼田大雨、前山責メ落ス。敵数百人討チトラレル」

武田の戦力は、もはや信濃の諸豪族を圧倒するに足る強大なものになっていた。前山城の悽惨な敗戦の様子を知った附近の十三城は、戦わずして開城降伏した。

晴信は上田原敗戦によって失った領地をすべて回復し、上原城に凱旋する。

十月四日には、筑摩郡村井城（松本市芳川村井町）の普請をはじめた。

村井城は小笠原長時の拠る林城の南二里にある。

晴信はここを拠点として、小笠原氏攻略作戦を開始することにした。

晴信は翌天文十八年七月、伊那郡箕輪城建設の鍬立（くわだて）をおこない、八月には佐久郡に入り、九月には平原城に放火し、甲府へ戻った。

晴信はつぎの作戦準備のため、行動をつつしんでいた。

信濃の強豪小笠原、村上の両氏を撃滅すれば、晴信は北条、今川に充分対抗しうる実力をそなえることになる。

晴信は上伊那の守備をかため、佐久郡の村上方諸砦の攻撃をおこなうのみで、天文十九年（一五五〇）を迎えた。

晴信は諏訪御料人と閨（ねや）に臥しているとき、経略の企てをさまざまにめぐらす。

彼は調略を用い、小笠原の諸城をつき崩すこととした。

小笠原麾下の土豪たちは、もはや武田に対抗するすべはないと気力を失っている。

晴信の命を受けた調略の使者は、四方へむかった。

林城の支城である大城のほか、深志、岡田、柏原、山家、島立、浅間の諸城に、ひそかに誘降の使者がおとずれた。

晴信の耳目となって、小笠原麾下の調略に奔走したのは、真田幸隆であった。

幸隆は信濃小県郡の土豪海野小太郎棟綱の長男で、はじめ海野小太郎と称していたが、真田郷を所領として真田姓にあらためた。

彼は天文初年に更級郡の村上義清に攻められ、上野国箕輪城の長野氏のもとへ亡命していた。天文十三年（一五四四）に晴信に招かれ旗下に加わり、旧領回復を望んでいた。

幸隆は性来智略に長じている。彼は小笠原長時に属している安曇、筑摩二郡の豪族たちとは古いなじみであった。

武田家臣団は有力な寄親のもとに寄子が所属する、強固な組織により構成されていたが、小笠原家は長時が自らの旗本衆を率いるのみで、麾下の諸豪族はそれぞれの城地と兵力をたくわえ、合戦の際には別個の行動をとりつつ長時に協力するという手間のかかる時代遅れの

動員態勢をとっていた。

このように、長時と麾下諸将との連絡が緊密でない欠陥を、真田幸隆は巧みについた。

彼は旧知の小笠原方諸豪族のもとへひそかに訪れ、今後は晴信に就くべきであると説く。

「長時公ごときは、もはや甲斐の殿のまえには敵ならず。こののち数年を置かずして蹴散らさるるは必定と勘考いたす。されば、われらとともに晴信公に合力なさるるようおすすめいたす。そのほかには生き延ぶる道はござらぬのじゃ」

山間の小領主たちは、塩尻峠の一戦で小笠原勢を潰走させ、長時の本拠林城の間近に村井城を築城し、大兵を駐屯させている晴信を畏怖している。

情報の伝わりにくい地域に散在している彼らは、たがいに今後の方針を相談しあうが、名案をうちだせるわけもなく、焦慮に日を過ごしていた。

そこへいまは晴信の宿将となった幸隆がたずねてきて、利をもって武田への帰服を誘うと、心が動かざるをえない。

ひとりが幸隆の誘いに従うと、たちまち他の土豪たちも同意を示した。

長時の臣二木氏の「二木家記」には、つぎのように述べられている。

「そのとき長時公をそむき、晴信公のかたえなる衆、山辺（山家）、洗馬の三村入道、赤沢、深志の坂西、島立殿、西牧、各長時公の内にて、五千貫、三千貫取り候侍衆なり。御味方の大身衆は、犬甘殿、平瀬殿、刈屋原、麻績（おみ）、そのほか御旗本の衆ばかりにて候」

小笠原の大身の衆が、多く晴信方に寝返ったのである。

天文十九年（一五五〇）五月に、晴信は麾下諸軍に陣触れを発し、小笠原攻撃の軍勢を甲府に集結させた。

彼は閏五月二十三日、甲斐一宮浅間神社（東八代郡一宮町）に、願文を捧呈して戦勝祈願をする。

信濃経略に成功すれば、今川、北条に対抗して遜色のない大勢力をたくわえうるのである。

武田勢が戦備をととのえるうち、六月二日に晴信の姉である今川義元夫人が病死したため、出陣は一時延期された。

晴信が一万の兵を率い甲府を出陣したのは、七月三日である。

十日に村井城に着陣し、十五日夕刻には林城の出城であるイヌイ城を急襲し、たちまち陥れ、かちどきをあげて戌の刻（午後八時）に村井城に戻った。

たとえ出城であっても、空濠を幾重にもめぐらし、険しい地形に拠り、本丸への坂道はいなずまのように屈曲している小城である。

短時間の攻撃でたやすく陥るわけもなかったが、あらかじめ調略がゆきとどいており、城兵は戦わずに降伏したのである。

その夜、武田勢は林城に迫り、篝火をさかんに焚き、絶えずときの声をあげ、総攻撃の気勢を示した。

深夜に至り、林城をはじめ深志、岡田、桐原、山家の五城は、城兵の逃亡があいつぎ、ついに支えきれなくなり、守将たちも退散せざるをえなくなった。

小笠原長時は平瀬城（松本市平瀬）に落ちのびた。

また島立、浅間の二城も戦うことなく降参した。

小笠原の勢力は調略により完全に崩壊し、長時は平瀬城も捨て、葛尾城の村上義清を頼って落ちのびてゆく。

晴信は安曇、筑摩二郡を掌握すると、林城にかわり、深志城（松本市深志）を兵站基地にする。

「林城は破却いたし、かわって深志の城普請をいたそうずら」

七月十九日、深志城普請の鍬入れがおこなわれ、二十三日に総普請がはじまった。

晴信はしばらく村井城周辺で諸軍に野陣を張らせ、英気を養わせたのち、小県郡の村上義清攻撃作戦を開始した。

最初の攻撃目標は村上の属城戸石城（上田市神科）である。

戸石城は上田市北東約四キロの、伊勢山という東太郎山（標高千三百一メートル）の支脈のうえにあり、神川にのぞむ堅固で規模雄大な山城である。

村上氏の兵粮城ともいわれ、地中にまでおびただしい穀類が貯蔵されている。

武田の先手長坂虎房が八月五日に出陣、晴信は十九日深夜に長窪（小県郡長門町）に着陣する。

「高白斎記」につぎのように述べる。

「天文十九年八月十九日、辰の刻（午前八時）のお立ち、戌亥（午後八時から十時）の刻、長窪へ御着陣。

二十四日、戸石の城見積り（偵察）に、今井藤左衛門、安田式部少輔同心申し、辰の刻に出て酉の刻（午後六時）に帰る。

翌二十五日、戸石の城見積りに又、大井上野助、横田備中守、原美濃守差し越さる。

長窪の陣所の上に辰巳（東南）のほうに、黒雲のなかに赤雲立つ。

西の雲先たなびく気にて、二十七日辰の刻長窪をお立ち。未の刻（午後二時）海野口向の原へ御着陣。

鹿ひとつ、陣のなかを通る。

二十八日、戸石の城際、屋降と号する地に御陣すえらる。

二十九日、屋形様敵城際へ御見物のためお出で。矢入れはじまる。

酉の刻、西のほうに赤黄の雲五尺ばかり立って紅のごとくにして消える。

九月朔日、申の刻（午後四時）清野出仕。

三日、戸石の城際へ御陣寄せらる。

九日、酉の刻より戸石の城を攻めらる。敵味方の陣所へ霜ふりかかる。未の刻晴れる」

二十九日に戦闘開始の矢入れをしたのち、三日に戸石城の間際まで晴信本陣が前進し、九日夕刻から総攻撃をはじめた。

晴信は慎重であった。

「我攻めをして手負い死人を出すは愚かなる仕儀ずら。ゆるりと押していかざあ」

晴信は真田幸隆に村上方諸将にはたらきかけさせ、徐々に寝返らせてゆき、村上義清の戦力を弱めてゆく方針をとろうとしていた。

九月一日に村上の属将清野某が武田方へ降伏出仕し、十九日には高井郡の須田新左衛門が降伏した。

真田幸隆の調略が効果をあらわしはじめていたとき、二十三日寅の刻（午前四時）に清野の陣所から晴信本陣へ急使が到着した。

使者のもたらした情報は、容易ならないものであった。

奥信濃の高梨政頼と領地をあらそい戦闘状態にあった村上義清が高梨と和睦し、前日に武田方の埴科郡寺尾城（長野市松代町東寺尾）を包囲したというのである。

真田幸隆が急遽救援におもむき、二十八日に村上、高梨連合軍は兵を引いた。

幸隆は無事に帰陣したが、村上義清が高梨を味方にしたからには、戸石城を長期にわたり

包囲するのは危険である。

晴信は九月三十日に軍議をひらき、退陣を断行することに決した。

退陣をためらっていては、敵に包囲され、退路を遮断されかねない。

そうなれば、帰服していた土豪たちがふたたび村上方に就くにちがいなかった。

十月一日卯の刻（午前六時）、武田勢は陣小屋を焼きすて、退却をはじめた。

「退陣となれば、敵は追い討ちをしかけるにちげえねえら。人を損ずるは避けられまいが仕方もねえ」

晴信の覚悟した通り、村上勢は追いすがってきた。

武田勢の殿をかためる横田備中守高松は、雲霞の敵勢を支え、死にもの狂いの奮戦をつづけた。

卯の刻から酉の刻まで、十二時間もの長い追撃戦で、村上勢は武田勢に甚大な損耗を強いた。

「妙法寺記」には、退却戦の様子を記している。

「信州戸石ノ要害ヲオ退ケ候トテ、横田備中守ヲハジメトシ、随分ノ衆千人バカリ討死ナサレ候。

サレドモ御大将ハヨク退キメサレ候。

コノ辺リデハ小沢式部殿、渡辺雲州殿討死致シ候。

道具ハ国中皆捨テ候。歎キ言語道断限リナシ。サレドモ信州ノ取リアイヤマズ」

武田の将横田高松以下千余人の精兵が討ちとられる大敗戦は、後世に「戸石崩れ」と呼ばれるようになった。

戸石の敗戦の噂は誇大にひろまった。

戦闘のあった際、伊那文永寺（飯田市南原）に滞在していた醍醐寺理性院厳助は、つぎのように記している。

「十月朔日、信州村上領知分佐久郡において、甲州衆五千ばかり討死云々」

村上義清は武田勢の敗退によって勢いをもりかえし、佐久郡に侵入して野沢、桜井山などに焼討ちをしかけたが、大規模な攻勢を仕懸ける戦力はすでに持たなかった。

戸石城は、晴信が一ヵ月余を大軍によって包囲しても陥落しなかったが、翌天文二十年五月二十六日、真田幸隆が独力で陥れた。

彼は城内の将士を調略によって寝返らせ、戦うことなく開城させたのである。

戸石落城は、村上方に重大な打撃を与えた。佐久郡で孤軍奮闘し、武田勢を寄せつけなかった岩尾城（佐久市鳴瀬字城跡）の岩尾弾正行頼はついに真田の調略に応じ、天文二十年七月に降伏して若神子（わかみこ）に出仕した。

十月には中信濃の平瀬城、天文二十一年八月には小岩岳城も陥落する。

晴信は躑躅ケ崎館にいて、村上義清討滅の好機がくるのを待っていた。彼は信濃出陣の際、軍隊の迅速な移動をおこなうため、八ケ岳西麓の中腹を、ほぼ一直線に信濃へむかう軍用道路の建設を急いでいる。

上、中、下の三本の道路は、棒道と呼ばれていた。

また国境の各所から躑躅ケ崎館に情報を連絡する狼煙台、鐘つき堂が完備されている。

晴信は電撃作戦を実行するため、軍馬の飼育養成に力をそそいでいた。

天文二十一年に晴信の母大井氏が病没した。

臨済の高徳岐秀元伯が大導師となり、中興開基の礼をもって彼女を大井庄長禅寺へ葬った。

岐秀は京都妙心寺二十世大宗玄弘に学び、享禄年間に尾張の瑞宗寺に住していたが、大井氏に招かれ大井庄長禅寺に住したものである。

岐秀は晴信の幼少の頃からの師であった。

晴信は岐秀のもとで参禅し、学問を受けた。儒教、道教、周易、論語とともに孫子の兵法の奥義をもきわめた。

武田流軍学の神髄と伝えられる晴信の遺戒(いかい)に、つぎの言葉がある。

「公仰せらるるは、勝負のこと六分七分の勝ちは十分の勝ちなり。八分の勝ちはあやうし。大合戦はことさら右の通り肝要なり。

九分十分の勝ちは味方大負けの下作なり」

これは荀子の中庸の精神を教えたもので、人生の途上で大好運にめぐりあうと有頂天になって、わきまえがなくなり、諸事遣りすぎてしまい後始末もできない有様となる凡人にとって、貴重な教訓である。

晴信は在国のあいだに、治山治水をこころがけていた。

御勅使川の分流と、釜無川の築堤という二つの大工事である。

彼は治水工事に孫子「虚実篇」の理を応用した。

「それ兵の形は水にかたどる。水の行は高きを避け低きにゆく。兵の形は実を避け、虚を撃つ。水は地によって流れを制す。兵は敵によって勝ちを制す。ゆえに兵に常勢なく、水に常形なし。よく敵によって変化して勝ちをとるもの、これを神という」

「甲斐国志」によれば、当時の御勅使川の状況はつぎの通りであった。

「ふだんは水が至ってすくなく、跳んで渡ることができるが、いったん雨季になるとすさまじい激流となる」

水勢がはなはだ迅速であるため、千貫の巨石を積んだ堤であっても、ひとたまりもなく押し切られてしまうのである。

晴信は大草村下条南割地内で広さ十八間の岩石を削りとり、上流源村の駒場有野に石積出を築き、激流の向きを東北へふりむけ、釜無川の東岸赤巌の崖下をつかせる。

さらに御影村六科の西方に圭角の石堤を築き、水流を南北へ分けた。

これが将棋頭と呼ばれる堅牢無比の構造であった。

さらに釜無川との合流点では、大石を並べ水勢を弱める工夫をした。これは十六石と呼ばれるものである。

川中島

天文二十二年（一五五三）一月二十八日、晴信は佐久郡内山（佐久市）城代の小山田備中守昌辰に書状をつかわした。

「来月（閏正月）六日、晴信、義信父子は信濃に出勢する。戸石城再興の手配りをするためで、この旨を佐久の諸侍に触れよ」

晴信はいつわりの情報を流布させておいて、三月に出陣した。義信は天文七年（一五三八）に出生した晴信の嫡男である。

全軍は佐久口に向わず、深志城（松本市）をめざす。

三月二十九日朝、武田勢は深志城を立ち、午の刻（正午）頃に刈屋原（東筑摩郡四賀村刈谷原）に進出する。

三月三十一日には刈屋原城下を焼討ちして、四月二日には城を陥れ、城主太田長門守を捕えた。

攻城戦に巧みな武田勢にとって、防備手薄な小城ひとつを陥落させるのは、たやすいものであった。

夜討ちを仕懸け、むかで組で城内を攪乱させれば、敵はたちまち混乱状態となり抵抗する気力を失う。

おなじ日に、塔ノ原城（東筑摩郡麻績村）城主が開城降伏した。

三日に会田虚空蔵山（東筑摩郡四賀村）附近を焼討ちした武田勢は、葛尾城攻略の支度をととのえる。

村上方の勢力が微弱である安曇、筑摩方面からの攻撃をおこなう晴信の作戦は、着実な布石をすすめるものであった。

葛尾城（埴科郡坂城町）は、現在の更埴市、埴科郡戸倉町、同坂城町の境界にある五里ケ峯（標高千九十四メートル）の支脈、標高八百十六・五メートル、比高三百八十六・五メートルの頂上に本丸を置く山城である。

上田盆地から長野盆地に流れる千曲川沖積地の屈曲点に位置し、山頂本丸からは三水、出浦、新山、山田、和合の各支城と狼煙によって連絡がとれる。

また遠方の石川、塩崎、和田、小坂、佐野の更級郡諸城、小県の小泉、天白城も視野のう

ちに入る。

晴信はこの要害に拠る村上義清の戦力を弱めるため、真田幸隆に命じ、川中島の諸豪族に調略をおこなわせた。

屋代、塩崎、石川、高坂ら、葛尾城の外部拠点の守将らが寝返り、村上勢は決戦をまえに戦わずして崩壊の道を辿らざるをえない状況になった。

武田勢は四月六日に、先手として十二人の部将の率いる十二の部隊を葛尾城攻略にむけた。

その威容に圧倒された村上方には、寝返る者が続出した。

葛尾城の前面にあって、重要な防衛陣地である孤落城（埴科郡坂城町綱掛）は、村上方の大須賀久兵衛尉が突然叛乱をおこし、守将小島兵庫助らを討ちとり陥れた。

孤立無援の状態となった葛尾城は、九日辰の刻（午前八時）、武田勢と一戦を交えることなく落城し、村上義清は越後へ逃れ、長尾景虎を頼った。

武田勢は葛尾城を陥れたのち、十四日めの四月二十二日、八幡で五千の敵勢と遭遇し、激戦を展開した。

「高白斎記」に、つぎのように述べられている。

「四月廿二日御人数八頭（武田勢八隊）八幡ノ筋へオ立チ候。

敵五千バカリ打チ向ウノ由、廿三日葛尾在城ノ御味方衆、於曽源八郎討死。

廿四日辰刻、御馬刈屋原（筑摩郡）へ納メラル」

八幡は現在の更埴市内で、生島足島神社の所在地である。

武田勢は八幡の森を背に、四隊にわかれ音もなく待機している敵勢を、村上勢であろうと見ていた。

「人数は思いのほかに多いが、村上が一党のいなか侍どもであろうがや。ひと当ていたし、蹴散らしてやらざあ」

村上義清を鎧袖一触に屠り、意気あがる武田の諸隊は、敵と同様に四隊の密集陣形をとり、前進をはじめた。

姨捨山を背に粛然と待機していた敵勢は、武田方の動きにわずかに遅れ、朝霧のなかをゆるやかに押しだしてきた。

林立する旗差物が、揺れながら近づいてくるさまを見た武田方の歴戦の部将馬場美濃守信房が、冑の眉庇の下で眼をひからせた。

「あやつどもが旗色は、ただごとではねえずら。これは村上が手のものにはあらざるかや」

弓衆はすでにはげしい矢戦を交えていたが、敵の矢はいきおいつよく、武田先手の足軽勢の持ち楯を割る。味方の出足ははやくも弓勢に押されがちになっていた。

「あれは信濃の武者ではねえずら。越後の者かも知れねえ。油断すな者ども。おのれがまわりの形を乱すでねえぞ」

馬場信房はのちに信春とも名乗った、武田譜代の重臣である。

彼ははじめ甲信の国境に近い教来石（きょうらいし）（山梨県北巨摩郡白州町）に領地を有し、教来石景政と名乗っていたが、天文十一年（一五四二）、諏訪、伊那進攻の際に武功をたて、跡目の絶えていた馬場家のあとを継いだ。

「不死身の美濃」と呼ばれる運のつよい人物で、戦場では先頭に立ち、自隊を指揮したが、かすり疵を負うことさえなかった。

彼は前方から迫ってくる敵勢の異様な気迫を察知して、警戒すべき状況であると判断した。

旗色というのは、軍勢の士気である。

眼前にあらわれた敵は、行動が敏活で統制がとれており、いまにも白兵戦がはじまろうとしているのに、馬のいななきのほかには物音をたてない。

五千の兵が魚鱗の陣形で、左右四隊が横並びに均衡をとりつつ草を踏んで寄せてくるさまを見れば、熟練した武将の采配で動いている精兵（せいびょう）ぞろいであることが、一目で分る。

信房は右翼の一条信竜の隊が、気早く突撃態勢をとったのを見て舌打ちした。

信竜は晴信より八歳年下の異母弟である。

彼は乳呑子のうちに甲斐武田の初代太郎信義の長男、一条忠頼を始祖とする一条家の養子となった。

天文九年（一五四〇）、信虎の信州佐久侵入のとき初陣を経験した信竜は、気鋭の若武者である。

一条隊が鉾矢形をとって突撃をはじめると、他の七隊もあとにつづかねばならなくなった。総勢六千人である。

彼らはときの声をあげ、槍衆を先頭に草原を蹴散らして走る。

侍槍の集団が、足軽勢を追い越してゆく。寄せ太鼓、押貝の音が早朝の静寂をかき乱し、殺気をみなぎらせ歯を剝いた男たちが敵にむかい殺到していった。

たがいの距離が五町ほどに接近したとき、敵勢は旗を伏せ、四隊が一手に密集すると鉾矢形となり、天地にどよもす喊声とともに武田勢の中央へ突っこんできた。

「こりゃ、危ねえ。退かざあ」

信房は味方の四隊が横列のまま突っこんでゆく中央部に、一手となった敵勢が槍をふりあげ怒濤のように襲いかかってきたのを見て、収拾できない混乱に陥ると思った。

敵勢は四隊に対し四隊で戦うように見せかけ、直前で武田勢の中央突破をはかった。

彼らは叫号し、疾風のように突進してくる。矢を浴び倒れる者がいても、ふりむきもしない。

武田勢は一瞬に左右に追い分けられた。

敵は密集隊形のまま、いったん武田勢の背後に出ると転回して戻ってきた。

恐怖に駆られた武田の士卒は、反撃する余裕もなく逃げ走る。
敵勢は疾風のように迅速に行動した。数人が一組となり、一人の相手をたやすく槍玉にあげる。
彼らは冷静に行動していた。
大将の采配のままに、正確に武田勢を追いつめ蹂躙する。
「こりゃいけねえら。逃げざあ」
獰猛な武田勢が攻撃の機先を制せられ、四分五裂になって馬蹄にかけられ、戦意を失う。
馬場信房は使い番に退き鉦を打たせた。
追い討ちを仕懸けられ、半数が倒されようとも、この場に踏みとどまるよりは損耗がすくなくてすむと、彼はとっさに判断した。
敵勢の大将はよほどの器量人であろうと信房は察した。
武田の部隊は甚大な損害を受けつつ退却を敢行した。
敵勢は後からひた押しに追尾してくる。武田勢は敵をふりきれず、葛尾城外へ退却した。
「あれはいずれの人数かや」
「とても相手できねえ。逃げにゃあ死ぬぞ」
敵はきびしく追撃してきて、武田勢に甚大な損害を与えるが、日没まえにすみやかに引き揚げていった。

馬場信房は、敵の見事な進退に感嘆した。

「われらにかほどまでの痛手を与えなば、調子に乗りて深追いいたすのが当然なるに、日暮れのまえに退陣いたすとはおそろしき奴輩よ。この様子なれば、夜討ちを仕懸けてくるやも知れねえら。用心せざあ」

信房は篝火の数をふやし、見張りの人数を絶えず巡回させ、厳戒態勢をとった。

子の刻（午前零時）を過ぎてまもなく、闇にときの声があがり、おびただしい松明の火光が八幡の方角から急速に迫ってきた。

「それ、夜討ちじゃ。出合え」

「弓衆は前へ出よ」

「槍仕どもは射手の後ろへ集え」

番頭たちが声を嗄らして叫び、武田勢は迎撃の布陣をする。

そのとき、彼らの背後に天地にどよもすときの声とともに、敵の大部隊が殺到してきた。

虚をつかれた武田勢は前後の敵にむかい懸命に刀槍を向けたが、半刻（一時間）のちには突き崩された。

彼らは正体の知れない敵の容赦ない攻撃のまえに屍の山を築き、潰走した。

葛尾城を守っていた武田の一隊はとり残され、全滅に近い打撃を受け、城番の於曽源八郎は乱軍のなかで討死を遂げる。

刈屋原（東筑摩郡四賀村刈谷原）で敗兵を収容した晴信は、軒猿たちの偵察により、敵勢が長尾景虎の率いる越後勢であることを知った。

「越後の長尾が人数ならば、村上が手のようには扱えまい。いったん引くよりほかはねえら」

晴信は用兵の達人である。

平凡な武将であれば、甚大な打撃を与えた敵を撃滅しようと意地になり、損害をかえりみず反撃してゆくであろうが、晴信は精強な越後勢と無理に戦っても勝味はないと判断した。

彼は刈屋原から退陣して五月一日に深志城に帰還する。

長尾景虎は二十四歳で、三十三歳の晴信から見れば、血気にはやる若者の年頃であった。だが景虎は用兵の天才であった。

彼は天文十二年（一五四三）、十四歳の少年の身で、病弱な兄晴景にかわり、春日山城を出て栃尾城に入り、強力な地侍の叛乱を逐次鎮定し、勇名を馳せた。

景虎はその英邁を慕う国中の諸将に推され、天文十七年の暮れに兄晴景を隠居させ、守護代長尾家を相続した。

天文十九年、越後守護上杉定実が没したが後嗣がなく、景虎は越後国主の実権を握った。

彼は信濃府中（松本市）を制圧した武田勢が、善光寺平に迫ってくるのを警戒していた。

善光寺平は川中島附近で幅約八キロ、長さ約四十キロに及ぶ平原で、面積は二百六十二平方キロ余である。

周囲には戸隠連峯をはじめとする山岳がつらなり、高井、水内、埴科、更級の川中島四郡を抱いている。

一光三尊の阿弥陀如来で知られる善光寺は、越後、甲斐、上野からの街道のまじわる交通の要所である。

また松本平を経て伊那谷、天竜峡谷から遠江へ向うことができる。木曽谷を下れば美濃に出る。

善光寺平は甲府から百五十キロの遠方にあるが、春日山城からは七十キロ弱の距離にあり、越後に侵入しようとする敵勢を阻止する作戦を展開するための、重要な拠点であった。

武田勢が川中島をはさむ千曲川と犀川を渡河し、善光寺平を席捲すれば、さらに北進して田口、関山街道をとるか、飯山、富倉峠を越え、越後に侵入してくるであろう。

武田勢は天文二十一年八月に小岩岳城（南安曇郡穂高町）を陥れ、二十二年には刈屋原、塔の原（東筑摩郡明科町塔の原）を奪い、葛尾城をも手中にして川中島に進出してきた。

このため、景虎は村上義清をはじめ高梨、島津、栗田らの諸豪族の要請をうけいれ、武田勢と一戦を交えたのである。

晴信は甲府に帰陣すると陣容をととのえ、長尾勢が再度攻撃を仕懸けてきても対応できる

よう支度して、七月二十五日に一万余の軍勢を進発させた。
晴信は佐久口から乱入し、二十八日に佐久郡内山城、三十日には望月城を陥落させた。
八月一日には小県郡に入り、長窪城（小県郡長門町）、和田城（同郡和田村）を屠り、四日には高鳥屋城（同郡武石村鳥屋）をも陥れる。
晴信は籠城勢をすべて撫で斬りとし、全滅させた。

武田勢は高鳥屋城から内村川の谷への道路を扼（やく）する内村城をも陥れ、八月五日に村上義清の拠る塩田城（上田市）に襲いかかる。
塩田城は勝ち誇る武田の大軍に攻めたてられると、四囲の備えをたちまち破られ落城し、村上義清は越後へ落ちのびた。
塩田の外城十六が同時に陥落し、武田勢は塩田平を占領した。
「妙法寺記」には、つぎの記載がある。
「コノ年信州村上殿、八月塩田ノ要害ヲ引キノケ、行方知レズナリ候。
一日ノウチニ要害十六落チ申シ候。
分捕高名（こうみょう）、足弱イケドリ申シ候コト、後代ニアルマジク候」
信玄が足弱の女性を捕えて甲州へ送ったのが、あまりに非道の行為であると甲斐の国内で

さえ批判の声がおこっている。

晴信は塩田城を飯富虎昌に守らせ、軍功のあった諸将に恩賞を与えた。

真田幸隆をはじめ、室賀、小泉、浦野、禰津らの諸士に小県の地が分与される。

晴信はさらに奥信濃諸豪族に調略をしかけ、村上方の地侍たちを帰服させたのち川中島に兵を進めた。

「いつ越後の人数が出てうせるやも知れねえずら。ひと当ていたす支度を怠るでねえ」

晴信は使い番を走らせ、諸隊に厳戒を呼びかける。

武田勢一万余は、川中島布施（長野市南部、旧篠ノ井市布施）に宿陣した。

八月なかばの川中島は、朝夕には霧が濃く、こまかい驟雨が降り、気温が肌寒いまでにさがった。

晴信は連日軒猿をはたらかせ、越後勢の動向を探索させつつ、川中島制圧の作戦行動に移ろうとしていた。

譜代家老飯富虎昌、小山田信茂の二隊と、典厩信繁隊、真田幸隆隊が三手に分れ、行動するのである。

だが九月一日、越後の長尾勢が不意に武田の前衛拠点である布施の南方八幡の砦を襲った。

武田の物見が行動を把握できなかったほどの迅速な移動をおこない、戦場にあらわれた越

後勢は、夜明けまえに八幡の武田陣所に兵を潜入させ、放火した。彼らは混乱につけこみ、果敢な我攻めを強行し、わずか半刻（一時間）ほどのあいだに千余の武田勢を蹂躙潰走させた。

同じ日に村上一族の山田氏の拠る荒砥城（上山田温泉裏山）も、長尾勢の猛攻を受け落城する。

越後勢は五千の人数で疾風のように行動した。

三日には青柳（東筑摩郡坂北村青柳）一帯を焼く。

さらに同日のうちに会田の虚空蔵山城（東筑摩郡四賀村会田）を包囲した。

晴信は塩田城に在城していたが、自ら出陣して長尾景虎が指揮しているらしい越後勢との決戦を避けた。

彼は飯富、小山田隊三千を虚空蔵山城の後巻きにむけたが、二将にひそかに命じた。

「越後の者に総懸かりをするものではねえら。景虎は合戦に及びしきりに表裏をつかうゆえ、危ねえと見たときは兵を損ずるまえに逃げて戻らざあ」

晴信は景虎が戦場で鬼神のようにふるまい、変幻自在の進退を見せると聞いていた。

「かしこまってございす」

飯富、小山田は晴信にいいふくめられたが、心中で反撥した。

いずれも歴戦のつわものである。長尾景虎がいかに操兵に秀でた天才であろうとも、ひと

当てして蹴散らしてやろうという自負心があった。

二人は出陣のまえに相談した。

小山田信茂がいう。

「越後の者は合戦に取り組むとき、はじめは矢戦のみにて物静かであるが、挑みあうときになれば電光の激するごとしよ」

「いかさま、さようじゃ。冑を傾け、旗を伏せて岩石のよう押し寄せて参らば、敗軍するよりほかはねえら。これを撃ちやぶるには、あやつどもが槍先を怖れず、冑を踏みつけ、まっつぐ突き抜くよりほかはねえら」

飯富虎昌が眼を光らせると、信茂がうなずく。

「その通りじゃ。したが、伏手を置かれなば難儀ずら」

「うむ、伏手の用心も抜かりなくいたさねばならねえ」

彼らは前後と左右に小部隊を置き、密集隊形で虚空蔵山城救援にむかった。

四日の夜明けまえ、武田の二隊は虚空蔵山の見える辺りまで進んだ。

城の周囲の闇に火光がゆらめいている。長尾勢が田畠薙ぎをしたのち、火をかけたのであろう。

飯富虎昌の物見が行手から駆け戻ってきて注進した。

「この先の川の向う岸に、越後の人数が出張ってございす」

「飯炊く煙はあがっておるか」
「陣所にひとしく煙があがってございす」
「さようの仕儀ならば、いますぐに突きいるべし」
武田勢は腹ごしらえをおえていた。
長尾勢が朝餉をとろうとしているときに突撃すれば、敵の虚をつけよう。
二隊は密集して鋒矢形の陣形をつくり、前進した。
辺りがほのじろく明けてきた。
小川の対岸を眺めた虎昌と信茂は息を呑んだ。
朝餉をしたためていると想像していた長尾勢が霧のなかに旗差物を林立させ、川の対岸にひしめきあい集結している。
虎昌は気をふるいたたせ、総面の付け髭をふるわせ喚いた。
「ときの声をあげい。寄せ貝、寄せ太鼓を鳴らせ」
武田勢は早朝の大気をふるわせ喊声をあげると、敵にむかい揉みあい奔流のように殺到する。
武田菱の陣笠をかぶり、おなじく武田菱の自分指物を背にひらめかす雑兵の群れにまじり、萌黄糸縅、藤縅の胴丸をつけ、星兜をかぶった武者が槍を小脇に馬を躍らす。
長尾勢も一団となり地を蹴って向ってきた。

虎昌は敵勢が五千よりすくないと見た。
――埋伏の人数がおるのかや――
彼はとっさに判断すると、一団の侍槍を率い、血しぶきあげて斬りあいをはじめた先手へ出てゆく。
味方の兵を深入りさせては、敵の術中に陥る。
彼は馬上で槍をふるい、前をさえぎる敵の騎馬兵を横なぐりに叩きおとし、先頭に出た。
「お頭さまを死なすでねえ」
軍兵たちは虎昌の旗が敵に向ってゆくのを見て、奮いたつ。
武田勢はしだいに敵を圧倒してゆく。
長尾勢は刀槍をふるい懸命に挑みあいつつ後退しはじめた。
「敵は崩れたぞ。それ押せ、押せ」
武田勢はいきおいに乗って血刀をふるい、なだれるように前へ駆け走る。
虎昌は大音声に制止した。
「待て、敵は伏手を支度いたしおるずら。深入りして落度すな」
彼が叫んだとき、武田勢の左右から矢が雨のように飛んできた。
「それ、敵の伏奸じゃ。あわてるでねえ。おちつけ」
組頭、小頭が叫び、はやる軍兵を押しとどめようとしたが、血を見て気をたかぶらせた軍

兵たちは、狂いたって敵を求めて走る。
「退き貝じゃ、退き貝を吹け」
虎昌の下知で、退却を命じる法螺貝が吹かれた。
だが武田勢の前進の足どりはとまらない。
長尾勢の本隊は、武田勢の左右から伏兵が矢を射つつ長槍の穂先をそろえ突き入るのを見ると、退却の足をとどめ、猛然と引きかえしてきた。
虎昌が退き貝をくりかえし吹かせるなか、武田の士卒は死力を尽して斬りあう。
やがて長尾の本隊が、伏兵と合流して退却しはじめた。
虎昌はその有様を見て、きおいたった。
「伏奸ももろともに逃ぐるぞ。それ、追いかけて討ってとれ」
寄せ太鼓が乱打され、武田勢は喊声をあげ敵を追う。
一町ほども追撃したとき、左右の草原におびただしい旗幟があらわれ、あらたな、伏兵が鉦鼓を鳴らし突撃してきた。
「はかられしか。寄れ、まんまるになって退陣じゃ」
虎昌と信茂は懸命に態勢をたてなおそうとしたが、叫喚怒号のうちに下知の声はかきけされ、味方は岩石のようにたくましい長尾勢の侍槍に突きたてられ、陣形を縦横に踏みやぶられる。

虎昌を護衛する騎馬侍が、兜の眉庇と目の下頬当のあいだに、陣太刀を横なぐりに打ちこまれ、顔の上下がふたつにわかれ、火の球のように鮮血を宙に噴出させつつ落馬する。

長尾の侍たちは、馬上で巧みに刀槍を操る。

彼らは槍で敵の胄を殴りつけ、相手が転げ落ちると馬蹄で踏みにじる。

信濃の群小豪族の兵とは比較にならない精兵ぞろいの長尾勢が、前途をはばむなにものをも粉砕するいきおいで武田勢に斬りかかり突き伏せると、もはや虎昌らの采配は通じない。

二刻（四時間）ほどの攻防ののち、武田勢は戦場におびただしい人馬の屍を残し退却した。虚空蔵山城はその日のうちに長尾勢に占領された。

「高白斎記」には、つぎのように記されている。

「九月朔日、越後衆ハタラキ、八幡ヤブレ、荒砥自落（戦わず落城）。

三日、土田、青柳（筑摩郡）ヲ敵放火。（中略）会田ノ虚空蔵落去」

晴信は虚空蔵山城が陥落したのちも、全軍を率い長尾景虎に決戦を挑もうとしない。

彼は足軽衆にゲリラ活動をおこなわせ、麻績（東筑摩郡麻績村）、荒砥の忍び焼きをするなど小反撃を試みるにとどめた。

「勝山記」によれば、晴信は虚空蔵山城が陥落した四日、卜筮をおこない前途を占い、つぎの卦が出た。

「晴信公御吉凶は大吉。敵景虎吉凶は大凶」

晴信は、麻績、荒砥の忍び焼きをおこない、長尾勢の首級四十余を得た十四日にも、占いをした。

今度もまた晴信は大吉、景虎は大凶と出た。二度も同じ卦が出たのは、晴信が麾下将兵の士気をふるいたたせるための方便として卜筮を用いたためのようである。

九月十五日申の刻（午後四時）頃、物見が晴信本陣に駆けこんできた。

「景虎は前夜のうちに退陣いたせし様子にございす。敵の陣所に人の気配はありませぬ」

「なにゆえに退きしかや」

晴信は推量をめぐらすが、理由は分らない。

斥候を放つと、長尾勢の退却はまちがいないと判った。

「いまだ後詰の人数と荷駄の者を追い討ちいたせまするに」

晴信はただちに侍衆に追撃を命じた。

武田の侍槍は馬を飛ばして長尾勢のあとを追い、かなりの戦果をあげた。

晴信はこのとき戦功をあげた家来に、つぎの感状を与えている。

「去癸丑（天文二十二年）八月、越後衆出張のみぎり、信州布施において頸壱討ち捕るの条、比類なき戦功に候。

いよいよ忠節神妙になすべきものなり。よってくだんの如し。

弘治三年丁巳三月廿八日

晴信（花押）

大須賀久兵衛尉殿」

長尾勢は追撃を受けると、十七日には反撃に転じ、南条（埴科郡坂城町南条）に放火した。

晴信は景虎が決戦を挑んできたかと警戒し、追撃をやめた。しばらく様子をうかがううち、二十日までに長尾勢は越後へ撤退していった。

晴信は十月七日に塩田城を出て、夕刻に深志城に戻り、十七日には甲府へ凱陣した。

晴信の川中島席捲の作戦は、景虎に妨げられ失敗した。

晴信は神速果敢な景虎の戦法に対し、ひたすら守勢をとり、名より実を得ようとした。自軍の損害を最小限にとどめようとする晴信の戦法は、地味ではあるが景虎に充分対抗しうる虚実の妙味をそなえている。

景虎が勝ち戦にもかかわらず九月二十日に越後に凱陣したのは、早急に上洛しなければならない事情があったためである。

彼は前年の天文二十一年四月二十三日に従五位下に叙し、弾正少弼（だんじょうしょうひつ）に任ぜられた。

住国ならびに隣国の敵を治罰した功を後奈良天皇が賞せられたもので、景虎は上洛して御礼を述べたいと願っていた。

天文二十二年、彼が上洛の途にのぼろうとしているとき、信濃の村上義清らが晴信に追われ、救援を求めてきたのである。

景虎は川中島の武田勢を制圧し、目下の危機は解消したと見ると、ただちに兵を引き、上洛の途についた。

戦国乱世に大名が領国をはなれ、百数十里の道程をいとわず上洛するのは、難事であった。

景虎は道中に陸路をとれば、敵国を通過しなければならなかったので、海路をとり若狭に出て、京都へむかった。

長尾景虎が上洛するのは、関東進出の名分を得たいためである。

当時関東管領上杉憲政は、北条氏康の攻撃を受けて後退をかさね、上野（群馬県）の平井城に追いつめられていた。

憲政は天文二十一年（一五五二）正月に平井城を放棄し、景虎を頼った。憲政は景虎に関東の回復を懇請したのである。

景虎は上洛して、任国、隣国の逆徒を追討せよとの天皇の綸旨を受けたいと念願していた。

だが綸旨は景虎の父為景、兄晴景も在国のまま受けている。

景虎は上洛し、天皇に謁見したい。彼は日本の象徴である天皇を尊崇し、将軍の権威を回復しようと考えている。

下剋上に沸きかえっている戦国時代に、景虎の考えは古風であるといえたが、朱子学をまなんだ彼は大義名分を守ることに終始した。

長尾家と京都との交流の歴史は古い。

京都の公家三条西家は、麻織物の交易を通じ、越後と縁故が深い。

三条西家は越後の特産品である麻布を扱う商人に青苧座という座をつくらせ、その座役銭を主な収入としていた。

三条西家は長尾家と懇親をかさねてきた。

景虎は天文十九年（一五五〇）に将軍から白傘袋と毛氈の鞍覆いの使用を許され、守護職なみの格式を許されたとき、上洛する予定であったが、延引していた。

そのため、天文二十二年九月末に万難を排して京都へ向ったのである。

景虎は上洛にあたり、まず家来の神余親綱を先発させ、礼物を運ばせた。

朝廷には剣、黄金、巻絹を献上し、叙位叙官奏請の労をとってくれた大覚寺義俊（近衛尚通子）に青銅千疋（三十貫）、将軍義輝に長光の太刀と青銅を献上し、夫人には樽代五百疋を贈った。

また上洛の沿道の領主にも贈物をして懇親をはかった。

近江の六角定頼に太刀と鷹を贈り、越中・加賀の一向一揆に対しては、信濃笠原から戦乱に追われ越後福島（直江津）に移住していた本誓寺第十世超賢に、仲介を依頼した。本願寺門徒の勢力範囲である加賀、能登、越中の通行の安全を保障してもらうためである。

上洛した景虎は後奈良天皇に拝謁し、天盃と御剣を賜った。御剣は六寸二分、目釘の形から瓜実の剣と呼ばれるものであった。

景虎は在京中に禁裏の拝観を許され、つぎの綸旨を賜った。

「平景虎、任国ならびに隣国に敵心をさしはさむ輩を治罰せよ。威名を子孫に伝え、勇徳を万代に施し、いよいよ勝を千里に決し、忠を一朝に尽すべし」

景虎は天皇に拝謁したことを生涯のよろこびとした。

彼は十一月十二日に京都を立ち、紀州高野山参詣の旅に出た。

十三日に大坂を通行する際、景虎は石山本願寺第十代証如へ贈物をとどけた。

「本願寺証如上人日記」に、つぎの記載がある。

「天文二十二年十一月十三日、越後国長尾弾正少弼より音信として、太刀、馬、鳥目千疋来。頼資披露」

証如はつぎの返礼をした。

「十一月十四日、長尾へ返礼として太刀、緞子十端、縞織物二十端、早朝堺へ、使は麻生なり」

証如の返礼は、太刀の値段二貫余、緞子は十三貫半、縞織物は十五貫で、景虎の贈物よりはるかに高価であった。

本願寺の手厚い返礼は、景虎の祖父の代以降、越後から追放されていた一向宗寺院の帰住を願ってのことであった。

景虎が高野山に登ったのは、真言宗の高僧として知られた無量光院の住職清胤に会うためであった。

高野山は女人禁制で、武装も禁じている。景虎は黒漆の陣笠をかぶり、名刀備前国宗を仕込んだ戒杖を持ち、左腕に百八の数珠を巻いて登山したといわれる。

景虎は真言宗に入信し、下山した。

京都に帰った彼は、紫野大徳寺に参禅した。

前住職第九十一世徹岫宗九は、十二月八日に景虎に三帰五戒と法号を授ける。

十二月八日は「臘八」と呼ばれ、釈尊が悟りをひらいた日であった。

「越之後州平氏景虎公、授衣鉢法号三帰五戒。曰宗心。

天文廿二年癸丑臘月八日

前大徳寺徹岫宗九（花押朱印）」

晴信は景虎とはちがい、実利を重んじる性格であった。

彼は他国への侵略をはじめるまえに、謀略をかさね、敵の重臣を寝返らせる。家中の士には勝利の暁に手厚い恩賞を与えると約する。

勝ちを得たときには約束を実行する。

晴信は家来に実利を与えることによって、士気を振起した。彼は戦略に熟達し、合戦に際し、再起を望めないほどの打撃を与えることはなかった。

信濃経略にあたっても、降伏した小領主は許して先手衆として用いる。戦功をたてた場合は征服した相手の所領を分け与えた。

大勢力である小笠原、村上らは討滅する方針を変えない。

彼は孫子の兵法を実戦に活用した。

長尾景虎との戦いに及んでも、その鋭鋒をいったんは避けて退却し、機を見てふたたび進出する硬軟両様の作戦を用いていた。

景虎上洛の留守中、晴信は信濃の占領地域の地侍を懐柔し、調略を用いて北信濃征服の手筈をととのえている。

晴信は越後の強敵景虎との決戦をひかえ、今川、北条との間の外交関係を緊密にするため、政略をめぐらしていた。

晴信の姉は今川義元に嫁していたが、天文十九年（一五五〇）六月、三十二歳で世を去ったため、姻戚関係は消滅した。

このため天文二十一年（一五五二）に義元の娘が晴信の嫡男義信に嫁ぎ、たがいの絆をつよめた。

輿入れは十一月となった。

義元の娘は二十二日に駿府を出て興津に宿泊する。

「高白斎記」によれば二十三日内房（静岡県富士郡芝川町）、二十四日南部（南巨摩郡南部町）、二十五日下山（同郡身延町下山、穴山氏居城）、二十六日西郡（中巨摩郡釜無川以西）を経て、二十七日酉弐刻（午後七時）頃、甲府穴山氏の居館に到着する。

子丑刻（二十八日午前一時頃）、新婦の輿は義信の新居に入った。

「妙法寺記」は輿入れの様子につき、つぎのように述べている。

「此年霜月廿七日、駿河義元御息女様ヲ甲州晴信様息武田大吉様ノ御前ニナオシメサレ候。去ルホドニ甲州一家国人ノキオイ言説ニ及バズ候。武田殿ノ人数ニハ更ニ熨斗付八百五十僕、義元殿人数ハ五十僕御座候。

輿十二挺、長持廿カラ、女房衆ノ乗鞍馬百疋御座候。

両国ヨロコビ大慶ハ後代ニ有ルマジク候。

ソノウチニモ小山田弥三郎殿一国ニテ御スグレ候」

晴信は今川氏との同盟関係を固めるいっぽう、北条氏との和親をも実現しようとした。今川、北条はかつては姻戚関係を結び親密な仲であったが、義元の代になると敵対しあうようになった。

義元は天文十四年（一五四五）七月、山内上杉憲政と呼応して北条氏を攻撃する。義元は富士川以東の駿河に進出している北条勢力を駆逐しようとしていた。

上杉憲政は頽勢を挽回するため扇谷上杉朝定と協同して、北条綱成の拠る武蔵河越城を包囲する。

晴信も九月十五日に甲、駿の同盟にもとづき出陣して大石寺（富士宮市上条）に進出した。

義元は晴信の援軍を得て北条勢を圧倒し、富士川以東の富士、駿東二郡を制圧し、長久保城（駿東郡長泉町長窪）を攻撃した。

北条氏康は上杉と今川・武田の両勢力に対処せねばならず、窮地に陥った。

「この辺りにて、治部大輔（義元）殿を、相模守（氏康）と和議させざあ」

晴信は元気のころの板垣信方、駒井高白斎を今川家へつかわし、義元の軍師太原崇孚と和睦について協議させた。

高白斎らは力説した。

「北条はいまは敵なれども、今川家とは代を重ねしご親戚にてございます。されば、ながく争う

はたがいの不為とあいなりますれば、和談なされてしかるべきと存じまするが」

信濃経略に全力を傾けねばならない晴信は、北条と長期にわたり拮抗することは避けたい。

義元も西上を望んでいるので、北条との争いを好んではいない。

天文十四年十月二十日、晴信の斡旋により上杉、義元、氏康の間に誓句が交され、二十九日に三者の和睦が成った。

このとき義元は富士、駿東両郡を得た。

さらに九年後、武田、今川、北条の三国同盟が結ばれた。晴信の娘を氏康の子氏政に嫁がせ、氏康の娘を義元の子氏真に嫁がせ、三者はそれぞれ姻戚となったのである。

北条、武田の婚約は、天文二十二年春に成立した。「高白斎記」同年の条につぎの記載がある。

「正月十七日甲午、小田原ヨリノ使者ニ御対面ノ時、小山田、宮川バカリ烏帽子着申サレ候。廿日、氏康ヨリノ御状ナラビニ紬十端、彦六郎（穴山信君幼名）方へ給ワリ候。（中略）二月廿一日戌刻、来ル甲寅（天文二十三年）ノ年、小田原へ御輿ヲ入レラルベキノ由、晴信公ヨリ御誓句。氏康ヨリノ御誓句ハ去ル正月十七日ニキタル」

天文二十二年正月十七日、小田原の使者が甲府にきて氏康の誓書を入れ、晴信も二月二十一日に誓書を送った。

この時、北条氏康はすでに越後の長尾景虎と敵対している。晴信はまだ長尾勢と衝突していなかったが、近い将来に川中島での攻防がはじまると見て、甲、相同盟を締結させたのである。

これらの婚約が履行されたのは天文二十三年（一五五四）である。同年七月、北条氏康の娘が今川氏真に嫁し、十二月に晴信の娘が氏康の子新九郎氏政に嫁した。

「妙法寺記」に、輿入れの行列について、つぎのように述べられている。

「此ノ年極月、晴信様ノ御息女様ヲ、相州氏康ノ御息新九郎殿ノ御前ニナサレ候。サル程ニ甲州武田家国人イロイロサマザマノキラメキ、或ハ熨斗付、或ハ金覆輪鞍。輿ハ十二挺。米岐女ノ役ハ小山田弥三郎殿ナサレ候。御供ノ騎馬甲州ヨリ三千騎、人数ハ一万人、長持四十二挺。請ケ取リ渡シハ上野原（北都留郡上野原町）ニテ御座候。相州ヨリオ迎イニハ遠山殿、桑原殿、松田殿、コレモ五千バカリニテ罷リ越シ候。去ルホドニ甲州ノ人数ハ皆コトゴトク小田原ニテ越年召サレ候。小山田弥三郎殿ノ御内ニハ小林尾張守殿、氏康ノ御座へ参リ候。カヨウナル儀ハ、末代ニアルマジク候アイダ、書キツケ申シ候」

甲、駿、相の三国同盟が完全成立に向いつつあった天文二十二年十二月、長尾景虎は京都から帰国した。

天文二十三年七月、晴信は信濃下伊那に出兵し、八月に知久頼元を降した。

天文二十三年十二月、越後国刈羽城主北条丹後守高広が、景虎に叛いた。

北条氏は源頼朝に仕えた高名な大江広元の子孫である。広元は相模国毛利庄を所領とし、子孫は毛利氏を称する。

広元の四男季光は宝治元年（一二四七）の三浦泰村の乱に際し、義兄泰村に協力して、北条時頼に討たれた。

季光の三男毛利利光は、乱の起る前に越後国刈羽郡佐橋庄南条にきていた。

北条氏は中越で強大な勢力を誇る豪族である。安田景元（柏崎市安田）と同族で、長尾為景の代から景虎に至るまで、協力を惜しまずにきた。

北条高広が叛いたのは、晴信の調略があったためと推測される。

高広は天文二十三年九月頃から叛乱の準備をはじめていたようである。

彼は晴信に使者を遣わし援助を求め、晴信は十二月五日付の書状で、家来の甘利昌忠を送り協議させている。

高広の行動を察知したのは、親戚の安田景元であった。

景元は弘治元年（一五五五）府中の直江実綱に注進する。
景虎は上条（柏崎市）に在陣の柿崎景家らに出陣を命じ、二月に自ら刈羽城を攻めた。
北条高広は期待した晴信の援軍があらわれず、独力では対抗のすべもなく景虎に降伏する。
同月、晴信の長子義信は、佐久郡に起った叛乱を鎮圧した。
義信は十八歳であったが、麾下の兵を指揮して一夜に九城を攻略した。小諸城陥落の際、義信は落武者掃蕩をおこない、三百人ほどを討ちとった。
晴信は慎重な作戦をおこないつつ、しだいに川中島へ勢力を伸ばしてきた。
景虎はこのうえ、晴信の侵略を無視できない状況に立たされた。

武田義信が佐久、伊那両郡にわたり作戦を展開していた四月、景虎は精兵五千を率い信濃に入った。
戦術の天才である景虎は、合戦に大兵を用いる必要はなく、五千の兵をもって天下の兵にあたることができるといっている。
景虎は善光寺城山に本陣を置き、善光寺西南十町（一キロ余）の旭山城（長野市安茂里）と対峙の態勢をとった。

旭山城は標高七百八十三メートル、比高九十メートルの旭山山頂にあり、東麓を裾花川が南流する要害の地である。

「妙法寺記」につぎの記載がある。

「善光寺ノ堂主栗田殿ハ旭城ニ御座候」

また「善光寺文書」にも、

「善光寺領朝日山、先代より如来之御山に相定」

とある。

善光寺別当は大御堂主の里栗田家と小御堂主の山栗田家の両家が併立していた。前者は景虎方、後者は晴信方である。両家は元来長尾家の勢力下にいたが、晴信が調略により山栗田家を寝返らせたのである。

晴信が景虎に対抗して川中島大塚に進出し、犀川をはさみ布陣したのは、七月であった。

「妙法寺記」にいう。

「此ノ年ノ七月廿三日ニ、武田ノ晴信信州へ御馬ヲ出サレ候。去ル程ニ村上殿、タカナシ殿、越後ノ守護長尾ノ景虎ヲ頼ミ奉ル。

オナジク景虎モ廿三日ニ御馬ヲ出サレ候テ、善光寺ニ御陣ヲハリメサレ候。

武田殿ハ三十里コナタナル大ツカニ御陣ヲナサレ候。善光寺ノ堂主栗田殿ハアサヒノ城ニ御座候。

アサヒノ要害ヘモ武田ノ晴信人数三千人、サゲ鉢ヲ射ルホドノ弓ヲ八百張、鉄砲ヲ三百挺カラ御入レ候」

文中三十里とあるのは、六丁を一里としているので、現在の約二十キロメートルに相当する。

武田方からの援兵三千人、弓、鉄砲の装備は、武田の武者が甲斐へ帰還してのち妙法寺住職に語ったことで、誇大である。

武田勢は当時、鉄砲の装備は僅少であった。このときから十七年後の元亀三年（一五七二）十二月の三方原の合戦で、徳川勢を撃破したときに、武田勢は鉄砲射撃にかわるものとして、投石兵をはたらかせている。

投石兵は周縁を刃物のように薄く削った印地（礫）を投げ、敵を制圧する。

戦国期の合戦では印地打ちは威力を発揮し、礫による死傷者が多かった。

旭山城は連郭式山城で、地勢険しく、本郭には大規模な石垣、石塁が用いられ、大軍の長期にわたる攻囲にも堪えうる機能的な構造をそなえている。

また、長尾、武田両雄の対陣は七月二十三日となっているが、実際にはそのまえから交戦している。

晴信は七月十九日犀川附近でおこなわれた小戦闘で殊功をたてた者に感状を与えた。つぎにあげるもののほか、九通が現存している。

「今十九、信州更級郡川中島に於て、一戦を遂ぐるのとき、その方被官の頸壱討ちとるの条、戦功の至り感じ入り候。
いよいよ忠信をぬきんずるは神妙なるべきの趣申合せらるべく候。謹言
天文廿四年乙卯七月十九日　　晴信（印）
大須賀久兵衛尉殿」

景虎が自軍の兵に与えた感状には、八月二十二日付の福王寺孝重あてのものがあり、つぎの文言が記されている。

「今度信州川中島において高名。殊におもしろき者討捕り、比類なきこと神妙に候」

おもしろき者とは、名の聞えた武者のことである。

武田方には、今川義元の派遣した一宮出羽守の率いる富士郡の兵数百が援軍として到着していた。

八月二十九日、今川氏真は晴信の甥穴山信君につぎの書状を送り、安否をたずねている。

「その以後は申し承らず候。よって高白斎注進の分は、越後衆出張せしむるといえども、さしたる儀なく退散の由、まずもって御心安く候。
その後いかがに候か。承りたく候。これによって陣中へ飛脚をもって申し候」

景虎は短期決戦を望み、しきりに攻めかけるが、晴信はひたすら防備をかため、動かな

い。

晴信は側近の穴山信君、原虎胤らにいう。

「景虎めは、こなたが動かざるに焦れおって仕懸けて参るが、戦巧者ゆえ我攻めにはこぬ。先に仕懸けしほうが負くると知っておるゆえじゃ。儂とて国許が気がかりにて一日も早き退陣を望んでおるが、ここにて先に退くわけにもゆかぬずら。われらも難儀なれども景虎も同様じゃ。こうなれば辛抱くらべだ」

景虎は総大将であるのに、合戦がはじまれば槍を執り先頭に出て突撃する猛将である。晴信は激突すれば甚大な損害をこうむると見て、ひたすら持久策をとることにした。

景虎は忍者を用い旭山城に夜討ちを仕懸けさせ、火を放ったが成功せず、戦況は膠着状態のまま推移する。

十月になって景虎は諸将につぎの誓詞を書かせている。

「一、景虎何か年御張陣候とも、おのおの儀はいかんとも候え、拙者一身の事は二無く御諚次第在陣いたし、御馬前において走り廻るべきこと。

一、陣中においてけんか無道を召使いの者いたすにおいては成敗すべき事。

一、備え方の儀、存じ寄りの子細候わば、残らず心底申し達すべき事。

一、行方の儀につきては、いずこへなりとも自然と存じ、御量のごとく走り廻るべきこ

と。

一、御馬を入れられ、重ねて御出陣候とも、一騎にてもはせ参じ走り廻るべき事。

天文廿四年十月」

景虎がこのような誓詞を部将に差しださせたのは、長期の滞陣で士気が乱れていたためである。

軍紀の厳正であるべき越後の精鋭のうちから、無断で帰国し、陣中で上司の指揮に従わず、朋輩のあいだで喧嘩をするなど不心得者が続出していたのである。

大軍に長期の野陣を張らすうちには、さまざま生活の不自由が嵩じてくる。川中島の短かい夏が過ぎれば、時雨、霧の多い秋になり、気温も下る。

兵站にも支障が生じ、兵粮、秣に窮し、酒も呑めない日々を過ごすうちには、士気の低下は免れない。

だが景虎はいかなる困難をも克服し、武田勢が撤退するまで、対陣をつづけるつもりであった。

景虎が退却しないかぎり、晴信は兵を引けない。先んじて退却すれば、川中島における彼の勢力圏は消滅する。

晴信は長尾家中のめぼしい侍大将に、ひそかに調略を仕懸けている。彼は反感をもつ者か

らのたしかな反応をたしかめていた。

晴信は九月十日、諏訪社上社の神長守矢頼真に怨敵退散の祈禱を頼んだ。

兵站線の延びきった武田勢は、物心両面で窮地に立っていた。

「妙法寺記」に、

「人馬の労申すばかりに無く候」

と記すように、晴信はついに余力をつかいはたし、今川義元に調停を依頼した。

景虎は義元の斡旋に、旭山城を破却するという条件をつけて和議に同意し、閏十月十五日、ようやく和議がととのった。

景虎は弘治二年八月二十八日付の、天室光育あての書状で、このときの和議の事情を述べている。

「去年の事は、旭の要害にむかい、新地を取りたて敵城擒にいたすのうえ、晴信に対し興亡の一戦を遂ぐべきのほか、よんどころなく候ところに、甲陣（武田勢）浮沈に及び、駿府（今川義元）に属し無事の儀様々悃望あり、誓詞ならびに条目以下相調えらるるの上、色々義元御異見の間、万障をなげうち、旭の地ことごとく破却し、和与の儀をもって馬を納め候」

晴信は、和議を成立させねば総退却を余儀なくされる瀬戸際に立たされている。

「事ここに及んでは仕方もねえら。まずは景虎が申し条を聞きいれざあ」

彼は景虎の望む通りの誓詞草案をしたため、長尾陣所へ使者に持参させ了解を得ようとし

た。

講和の段階では、景虎のほうがいくらか優位に立っていた。晴信は旭山城破却のうえ、追放した北信濃の地侍を旧領に帰らせ、甲、越双方が現勢力を保ったまま相互に侵害することのないよう誓詞をしたため、景虎と交換した。

景虎はようやく納得し、撤兵した。

彼の天室光育あての書状に、撤兵の心境が語られている。

「これによりかの国（信濃）味方中、今に安泰に渡られ候。自讃のように候といえども、宗心（景虎）助成せしめ候わずんば、おのおの名絶うたがいなく候」

景虎は誓詞の内容を信じ、守ろうとしたが、晴信にとって、それは一枚の紙片にすぎない。

天神地祇（てんじんちぎ）に誓うといっても、方便であると彼は思いきめている。

晴信は冬期にむかい甲斐からの糧道が閉塞する絶望的状況から免れるため、和議に及んだのであった。

彼は旭山城を破却したが、景虎の構築した城山、頼朝山の二砦も、今後相互に侵略の意志がないのであれば不必要であると説き、これを同時に破却した。

北信濃の村上、高梨、須田、島津らへの処遇は、一応旧領への帰還を許すということであったが、武田勢は状況の変化によってはどのような結果をもたらすか予断を許さない不穏の

動きをあらわしている。

甲府に帰国した晴信は、躑躅ヶ崎館で冬を過ごすあいだ、翌春からの作戦につき諸将を集め軍議を交した。

彼は越後の諸侍に調略を仕懸け、内乱をおこさせ、景虎に北信濃へ力を及ぼす余裕を与えまいとする。

「まず調略して寝返らするは、葛山城といたすかや」

晴信は連夜の荒淫に疲れた眼差しを、重臣たちにむける。

彼は諏訪御料人のほかに五、六人の側室を閨に侍らせるうえに、男色をも好む。

身内にたぎってくる闘争心は、胸奥で情慾に通じている。

真田幸隆が応じた。

「葛山衆の落合が一党が詰めたる城にござりまするかや」

「うむ、落合は景虎に合力いたしおるが、利を用いて誘わばいかがあいなるか」

「それは、こなたの手に乗らぬといえませぬ」

「乗ればおもしろき絵が描けようが」

「調略をいたす値打ちはあると見てごいす」

葛山城は善光寺から戸隠を経由して越後にむかう街道の要地である。

「それならば、やらざあ。いかにして仕懸けるかのう」

「まずは菩提寺の坊主殿を籠絡いたしまするに」

晴信は声もなく笑う。

「さすがは信濃のささらほーさらの悪玉だ。眼のつけどころがいいずら」

真田幸隆の用いる忍者が、ただちに密書をたずさえ葛山へ出向き、城山の中腹にある落合家の菩提寺、静松寺の住職に手渡す。

幸隆と旧知の間柄である住職は、さっそく城主落合遠江守に武田への帰服を説いた。

遠江守はたやすく応じ、寝返りをした。

八月になって、真田幸隆は埴科郡雨飾城（長野市松代町東条）の攻撃にとりかかった。

雨飾城は尼巌山の頂上にある山城で、東条一族と村上残党が死守しているので、容易に陥落しなかったが、幸隆は苦戦のあげくようやく攻略に成功した。

その頃越後では景虎が退隠するという、思いがけない事件が起っていた。

景虎こと長尾入道宗心は、葛山城が調略により武田の傘下へ移った弘治二年三月、国政を放棄し出家を志した。

さらに六月には師の天室光育に遺書をのこし、世を捨て出家して旅に出た。

景虎が政権を捨て出家したのは、越後の地侍のあいだで土地争いがおこっていたためである。

景虎は川中島での二百日に及ぶ滞陣に疲れはてて帰国するなり、奥郡の中条藤資と黒川実

氏との間の土地争いの裁決を迫られることとなった。
両者の背後には重臣の大熊朝秀（ともひで）と本庄実乃（じつの）の勢力争いがからんでいる。
景虎は領主としての裁断を下すことなく、突然引退したのである。
景虎は高野山におもむき、仏門に入ろうとしたが、春日山城代の長尾越前守政景があとを追い、懸命に説得した。
「お屋形さまが武門の身にありながら遁世なさるるなら、内外の患いに負けて逃れしと評判されまする。たとえこの悪口を忍ばるるとも、長尾御代々の武名をけがすこととあいなりまするれば、なにとぞ一時も早うお戻り下されませ」
二十七歳の景虎は、政景の説得に応じ帰国せざるをえない立場にあった。
彼が戻らなければ、信濃から侵略の鉾先（ほこさき）をむけてくる晴信に対抗できる者はいない。
景虎は春日山城に戻った。

景虎が引退の望みを捨て越後国主の座に復帰することになると、執政府で権力をふるっていた重臣大熊備前守朝秀の立場が危うくなった。
頸城（くびき）郡板倉郷箕冠城主の大熊は、上杉家が越後守護として入国して以来の家臣で、公銭方（こうせんかた）をつとめていた。

景虎の父長尾為景が主家の上杉家と対立したとき、朝秀の父政秀は上杉方に就き為景と戦った。

朝秀は父の死後に上杉家をはなれ、景虎を越後国主の座に就かせるため尽力した。

だが今度の土地争いによって、大熊の行動が家中の諸将に批判されるようになった。

日頃、公銭諸税の取りたてに厳しかったことも反感を買っていたので、有力な地侍たちは大熊と対立している本庄実乃を支持した。

晴信は長尾家中の内紛を知ると、さっそく密使をつかわし調略を仕懸けた。

使者はいう。

「御辺は上杉旧臣にて、長尾の下風につくべきお家柄にてはござらぬ。本庄ごときに頭をおさえらるるを、耐え忍ばれるいわれはあるまい。

われらが主人は、御辺さえご承引下されば万に及ぶ人数にて後巻きをいたす所存にござる。さらには陸奥会津黒川（会津若松市）の蘆名殿にも合力いたさせますれば、御辺にはすみやかに府中春日山城を攻め落され、越後をわがものとなさるるが、上分別にござろうと存ずる」

大熊朝秀は誘いに乗った。

彼は箕冠城にたてこもっては戦勢不利とみて、城を棄て越中へ奔った。

晴信は自軍を動かさず、会津の蘆名盛氏に大熊支援を懇請したが、盛氏は応じない。

会津の家臣で会津中丸城主の山内舜通が晴信の誘いに乗り、越後赤谷（新発田市）の小田切安芸守を朝秀に協力させる。

朝秀は小田切とともに越中口から越後へ攻めいった。

春日山城の景虎は、有能な朝秀の出奔を惜しんでいたが、大熊勢越後侵入の急報をうけると、ただちに迎撃の兵を向ける。

八月十四日、景虎は庄田定賢、上野源六らを国境に向わせ、二十三日に駒帰（西頸城郡青海町）で対戦、大熊勢を撃破潰走させた。

朝秀は甲斐へ逃げ、晴信の家臣となった。「甲陽軍鑑」品第四十上に、つぎの記載がある。

「殊に大熊、輝虎の儀にちがい、甲州へ参り候て、山県同心になり、数度の手柄ゆえ出頭、小宰相（小幡山城守の娘）の婿に仰せつけられ取りたて給う」

朝秀が大功をたてたのは、上州箕輪城攻略のときであったといわれる。

「甲陽軍鑑」足軽大将衆の項にも朝秀の名が記されている。

「一、大熊備前守　騎馬三十騎　足軽七十五人」

宝永年中につくられたという甲府古図には、甲府一条小路沿いに、長坂長閑の屋敷の隣りに大熊屋敷があるという。

弘治三年（一五五七）正月二十日、景虎は信濃更級八幡宮に祈願をささげ、晴信の悪逆を訴え、信濃の平安を望んだ。

「ここに武田晴信と号する佞臣あり。彼は信州に乱入し、住国の諸士ことごとく滅亡を遂ぐ」

という書き出しの願文は、つぎのような要旨である。

「晴信は信州に乱入し、悪業をはたらき神社仏閣を破壊した。隣州の国主として晴信に遺恨はないが、恨みを呑んで敗亡した隣人を見捨てはおけず、近年助成をいたします。

神は非礼を受けずとか。たとえ晴信が表面において神を敬うとも、故なく諸家の国を奪い、罪なき者を悩乱させる所業に、神が感応されるわけもありません。

何卒景虎の一団扇（軍配）をもって本意のごとく天下を静謐ならしめ、天下に名をおこし立願成就せしめ給えば、当国の一ヵ所を寄付していよいよ丹誠をぬきんずるものであります。

弘治三年正月廿日　　長尾弾正少弼
　　平景虎
八幡宮御宝前」

弘治三年二月、晴信は大軍を催し、葛山城攻略を開始した。

葛山城は善光寺西北一里の芋井村にある。

東、西、南の三方は峻嶮な崖で、攻撃するにも登坂が容易ではない。北方のみがゆるやかな傾斜で、この方向から押し登るよりほかはない。

村上義清の旧臣落合備中守は、晴信から調略を仕懸けられ、城中に異分子が潜在する悪条件にもかかわらず、武田の万余の軍勢を相手に死闘をくりひろげた。

城内の弱点は水利にあった。晴信に寝返っていた静松寺の住職が武田方に水源を教えたので、開戦と同時に水の手が断たれ、落城は必至となった。

剛気の落合備中守は、降伏勧告に応じることなく最後まで戦い、全滅する。

「ひとりも生かすでねえ。のこらず斬れ」

城兵は裏山伝いにわずかな人数が逃亡したのみで、大半は武田勢に討たれ、無惨な屍をさらした。

晴信はこの合戦で軍功をたてた室賀兵部大輔という家来に、つぎの感状を与えている。

「去る十五日、信州水内郡葛山の城に於て、そのほうの被官清兵衛頸ひとつ、小田切駿河守討ち捕るの条、戦功感じいり候。

いよいよ忠信をぬきんずべき旨、申しふくめらるべく候。恐々謹言

弘治三丁巳三月廿日　　晴信（花押）

室賀兵部大輔殿」

室賀の家来である清兵衛という兵卒が、葛山城に在城していた景虎の部将小田切駿河守を討ちとったのである。

葛山城が陥落すると、善光寺が晴信の勢力圏に入った。

葛山城は景虎が武田方の拠点である旭山城を制圧するため、必要不可欠の要害であったが、深雪により越後、戸隠、飯縄からの軍事行動不能な時期を晴信に狙われ、陥れられた。

長沼城（長野市長沼穂保）にたてこもる上杉方の島津貞志は、間近の葛山城陥落に動揺し、戦わずに城を捨て一里北方の要害大倉城（上水内郡豊野町）へ後退した。

景虎に協力していた飯縄社の社人は晴信に降伏する。戸隠社三院の衆徒は越後へ逃亡した。

三月二十八日、晴信は降伏した飯綱権現の神主仁科千日に安堵状を出し、武運長久を祈願させた。

景虎は晴信が行動を開始したことを知ると、ただちに信濃出兵の支度をはじめていた。二月十六日、越後岩船郡平林城主色部勝長に参陣を求めるつぎの書状を発した。

「信州鉾楯の儀、去々年駿府（今川義元）の御意見をもって、無事に属し候いき。然れどもその後の例式晴信の一刷、曲なき儀どもに候といえども、神慮といい、駿州の御刷といい、このかたより手出しいたすべきにあらず候条、堪忍に及び置き候。今度晴信出張し、落合方家中引き破り候ゆえ、葛山の地落去。

これにより島津方も大蔵の地へまずもってあい移られ候。このうえは是非に及ばず候間、ここもとの人数ことごとくかの口へ合せしめ、景虎も中途に至り出陣候。

雪中御大儀たるべく候といえども、夜をもって日に継ぎ、御着陣待ち入り候。

信州味方中滅亡のうえは、当国の備え安からず候。今般に至っては、ひとかどの人数あいたしなまれ、御稼ぎこのときに候。恐々謹言。

二月十六日　　長尾弾正少弼景虎

色部弥三郎殿

御宿所」

景虎は国中の諸将にこのような陣触れの書状を送ったが、降雪に妨げられ、容易に出陣できなかった。

越後勢が信濃に出陣するという注進は、三月十四日に甲府の晴信のもとへ届いた。

「放っておきゃええらに。この雪じゃあ、越後からは峠を越えてこれねえ」

晴信は動揺の色を見せなかった。

彼は越後勢との幾度かの対戦で、景虎の性癖をのみこんでいた。

「あやつは、用兵の神にちげえねえら。したが、さわらぬ神に祟りなしとは昔から申すものじゃ。さわらねば、景虎は辛抱しかねて越後へ退陣いたす。そのあとは、われらが領地といたすのよ」

景虎が出陣してくると、晴信は兵をなるべく衝突させまいとする。

長尾勢が武田勢を発見して攻撃を仕懸けると、たちまち逃げる。数千の規模の軍勢であっても三里、五里先まで逃走するので、捕捉撃滅できない。

長尾勢の矢面を逃れた武田の諸隊は、側面にまわり、思いがけない方向からの攻撃の機をうかがっている。

このため長尾勢は表面では連戦連勝のように見えるが、実際は拠点と主要な連絡路の確保にとどまり、兵站線の安全を脅やかされ、長期間信濃の占領地域にとどまれず、引きあげてゆく。

晴信は長尾勢が退いたあと、自らの勢力圏を望むがままに伸張できた。

景虎が富倉峠を越え、北信濃に兵をすすめたのは、四月十八日である。

晴信は三月中に甲府を出陣し、信濃深志城に着陣していた。

景虎は善光寺に兵を入れると、十九日から二十一日の間に武田方の占拠していた山田の要害（上高井郡高山村）と福島城（須坂市福島）を襲った。

山田は善光寺の東約五里、福島は東二里弱の千曲川東岸にあった。

武田勢は長尾の「懸り乱れ龍」の旌旗を見ると、戦うことなく遁走する。

景虎は先陣に馬を進めつつ、武田の軍兵が戦意をあらわさないのを見て慨嘆する。

「何と逃げ足早き奴輩よ。蠅のごとく追えば逃げ、去れば戻る。如何ともしがたき厄介なる性垂れどもよ」

景虎は二十五日には旭山城一帯の武田方砦数ヵ所に火を放つ。

さらに旭山城を修理し、本営をそこに移す。武田勢は、電撃作戦をおこなう長尾勢の行動を妨げることなく、ひたすら遠巻きにして情勢の転換を待とうとした。

景虎は晴信と雌雄を決する一戦をなしとげたいが、晴信は筑摩郡深志城を出ることなく、川中島での景虎の進退に注目するばかりである。

景虎は五月十二日、香坂（埴科郡）附近で武田勢を捕捉し、攻撃を仕懸け、一帯を焼き払った。

「あやつどもが野鼠のごとく逃げ隠れいたすなら、いずくまでも追いつめてやらあず」

景虎は気を逸らせ、翌日には坂木、岩鼻（埴科郡と上田市の境界）まで兵を進め、武田勢二千と遭遇し、突撃した。

彼は全軍の先頭に立ち、馬上で胸を反らせ「エイ、エイ」と叫ぶ。

後に従う将兵は、「オウ、オウ」とこたえ、すさまじい殺気に武田勢は慴伏した。

長尾勢が決戦に及ぶとき、弓衆が先頭へ出て、まず矢戦で敵を圧倒し、つづいて槍衆、足軽衆の順に突撃する。

槍衆は槍を錫杖持ちにして、喊声をあげつつ敵に殺到し、突き崩すのである。

つづいて足軽衆が突撃する。

寄せ太鼓をかついだ小者が走り、そのうしろから撥で太鼓を叩く小者がついてゆく。

白兵戦がたけなわになった頃、五十人一組の侍槍の集団が敵中へ突き入る。

長尾勢の用いる長柄の槍は三間柄であった。また長巻を用いる足軽も多かった。刀身二尺五寸から三尺二寸、柄の長さ三尺前後である。

順慶長光二尺四寸四分、左文字二尺二寸五分半の二刀を横たえた景虎が先陣に馬を躍らせると、全軍は勇躍して敵に向う。

坂木、岩鼻で接触した武田勢は、一矢を酬いることなく全速力で逃げた。

景虎は高梨政頼あての書状で、

「打ち捕らえざること無念のことに候」

と嘆いている。

景虎が川中島で諸方に行動しているとき、晴信は長尾勢の鋭鋒をかわし西北に迂回し、水内郡犀川の上流を渡河して、小川、鬼無里の方向から安曇郡北部へ乱入し、小谷一帯を劫掠して小谷城を陥れた。

小谷城から東北へ間道を三里進めば、見山峠を越え、国境の関川上流へ出て、関川野尻へむかうことができる。

野尻から越後糸魚川へ通じる街道があるので、景虎は後方を脅やかされたことになる。

このように両軍虚実の応酬をくりかえすうち、八月中旬に上野原で両軍が激突した。

上野原の位置については諸説がある。

「川中島戦史」では上水内郡若槻村上野（長野市内）としている。

「上杉謙信伝」では上水内郡戸隠村上野。「信濃における甲越関係」という書中には、下水内郡常盤村（飯山市内）としている。

ほかに小県郡神科村（上田市内）の説もある。

このうちでは、長野市北部の若槻村上野の説がもっとも真実に近いというのが、おおかたの史家の推測であるという。

上野原の決戦がどれほどの規模でおこなわれたかは、まったく不明である。

景虎が会戦のあとで出したつぎの感状が残されている。

「今度信州上野原の一戦において、はたらき比類なく候。向後（きょうご）いよいよかせぎのこと肝心に候。謹言

弘治三年八月廿九日　　景虎（花押）

南雲治郎左衛門どのへ」

信州上野原合戦での甲、越両軍の被害について、「北越軍談」はつぎのように記してい

る。

「はじめは甲兵討ち負けるが、新手の人数もりかえして支え挑み、越衆戦い疲れたりしを長尾左衛門尉、斎藤下野守諸隊にすぐれ、奮撃して相引に引き退く。甲州勢千百十三人討死。味方八百九十七人命を落す」

戦死者の数から見れば、激戦であったことがあきらかである。

負傷者の数は戦死の三倍とするのが通例であるから、両軍ともに甚大な打撃をうけている。

「北越軍談」の記述によれば、両軍が遭遇した当初は、二、三日対陣して動きをあらわさなかった。

やがて晴信が攻撃を仕懸けようとする。

「山蔭の木立に奸を伏せ置き、馬を放しかけ、足軽どもに追わせりゃ、越後の者どもは馬を押えんとて打ち出てくるら。そのときこなたより馬武者どもを繰りだし追い散らすだ。そうすりゃ、景虎は癇のはげしい大将ゆえ、こらえかねて人数を出してくるぞ。さればこなたの足軽どもは逃げて敵を谷間へ引きこみ、間を置かず奸の者どもを山手より押しまわし後陣を突っ切るのじゃ。

巧みに進退すれば景虎を討ち取れるか知れねえぞ」

晴信は数頭の馬を逸走させ、足軽数十人にあとを追わせつつ敵陣に接近させた。

「見ておれよ。いまに吊りだされてくるらに」
武田勢は長尾の人数を罠にかけようと待ちかまえる。
だが越後勢は誘いに乗らなかった。
「やはり景虎はただ者じゃねえずら」
晴信は作戦を変えた。
翌朝夜明けまえに、武田勢は陣を払って退こうとした。
長尾勢は法螺貝を吹き寄せ太鼓を乱打して追撃してきた。
「それ、引き返して取り合いいたせ」
両軍の死力をつくしての乱戦は卯の刻（午前六時）から未の刻（午後二時）までつづいた。
一進一退の激闘のあげく、両軍は互角の戦果をのこしたがいに兵を引く。
長尾勢の戦闘行動は終始武田勢を圧倒していたが、合戦ののち景虎は領土拡張の欲望が薄いため現地にとどまらず、越後へ帰陣していった。
晴信はいったんは兵を引くが、ふたたび川中島に戻り、善光寺、戸隠一帯を制圧する。
善光寺、戸隠社はかねて景虎の勢力下にあったが、こののち晴信が支配することになった。
「善光寺本尊阿弥陀如来像を甲府へ移し、新寺を建てようぞ」

晴信は甲府に新善光寺の建立を思いたつ。

景虎が弘治元年（一五五五）に善光寺大御堂の諸仏像を越後府中（柏崎市）へ運び、春日山城下に御堂を建てていたのを、かねがね羨望していたのである。

晴信が善光寺阿弥陀如来像を甲府へ移したのは、永禄二年（一五五九）九月二十五日であった。

十月三日には、甲府東郊の板垣の地（甲府市善光寺町）に新善光寺の作事をはじめる。寺院が完成し、入仏式を施行したのは永禄三年二月十六日であった。

景虎が戦闘局面で終始武田勢を圧倒していたのに、晴信のように北信濃への執着をあらわさなかったのは、彼の本来の希望が関東平定にあったためである。

北信濃へは晴信の進出をおさえての、現状維持を目途に出陣するのみであった。

この頃、鳶加藤という素っ破が春日山城をおとずれた。

彼は常陸茨城郡に生れ、小田原の野武士の棟梁風摩次郎太郎の配下となった忍者である。身の丈五尺二、三寸で、風態は四十がらみの百姓親爺である。とりわけて目立つ特徴はないが、上州箕輪城主長野業正が召し抱え、異能を認め、越後へつかわしたのである。

景虎は鳶加藤を城内へ呼び、引見した。

「そのほう、いかなる芸を見せてくれるかや」

景虎に問われた鳶加藤は、つつしんで答える。
「それがしは牛を呑んでご覧にいれまするゆえ、お支度願わしゅう存じまする」
列座の侍たちは顔を見あわせ、どよめく。
景虎は念をおす。
「さようの技を、まことにいたせようかのう」
「幻術にていたせまするに」
景虎は小姓に命じた。
「牛をひいて参れ」
景虎は支度のととのうのを待つ間に、日頃召使う軒猿の長にひそかに命じた。
「おのしはあの椎の木のうえに登り、鳶加藤が幻術をしかと見届けておれ」
軒猿はいわれるままに、椎の梢に登った。
牛があらわれると、鳶加藤はそのまえに半間四方の敷革を置き、両手で印を結び呪文を低声にとなえるうち、裂帛の気合をかけた。
鳶加藤の五体はたちまち巨大にひろがり、身の丈五間ほどになると、口をあき牛を吸う。
牛は頭から呑まれ、そのまま鳶加藤の腹中におさまる。
群臣はすさまじいまでの幻術を目のあたりにして、手を打ち、驚きの声をあげてどよめく。

そのとき樹上の軒猿が大声で告げた。
「いま牛を呑みしにはござりませぬ。ただその背に乗りておるのみなれば、しかとおたしかめ下されませ」
景虎と諸将が見直すと、鳶加藤の五体は縮まり、牛の背にまたがった姿があらわれた。
彼は眼をいからせ、樹上の軒猿を睨む。
術を見破られたのを無念と思ったのか、鳶加藤は庭前に膝をつき、景虎に言上した。
「いま一手つかまつりまするゆえ、よくご覧下されませ」
「よかろう、いたしてみよ」
景虎は醒めた口調でいう。
鳶加藤の幻術が危険きわまりないものであるのを、景虎は知った。
鳶加藤は懐中から瓢箪の種子をとりだし、眼前の地面に播いた。
景虎と侍臣が息をのみ凝視するうち、播かれた種子から芽が出て苗となる。
「これは面妖じゃ。いま播きし種子が苗となりしよ」
侍たちがどよめき総立ちとなるなか、蔓と葉が生え、花が咲く。
鳶加藤が扇子をとりだしそれを煽げば、花は実をむすんだ。
「されば料理をつかまつりまする」
鳶加藤は瓢箪の実をむしりとり、小刀で切り刻む。

そのとき椎の樹上から地響きたてて軒猿が墜落した。満座の侍衆が視線をあつめるところに、首胴を異にして朱に染んだ屍体が転がっていた。

「これは何といたせしことじゃ」

「いかさま、座興にもほどがあろう」

侍たちは声を呑み、言葉を忘れる。景虎は鳶加藤の芸を褒めもせず座を立ったが、夜になってのち彼を呼ぶ。

「そのほう、これより近習頭山岸宮内少輔が宅へ忍び入り、常に寝所に立て置く薙刀を取りきたるべし」

「かしこまってござりまするに」

鳶加藤は闇のなかへ身を溶けこませる。

しばらくののち、寝所のそとで鳶加藤の声がした。

「お指図のごとく、山岸殿が薙刀をこれに持参いたしてござりまする」

景虎は灯台の光芒に照らされた薙刀を見る。

「山岸はこれを取られ、気づかざりしか」

「何事もご存知なく、いびきをかきなされてござりまいた」

「そのほうが手のうちは、至極のものじゃのう」

景虎は一言褒めたのち、使者を走らせ山岸宮内少輔を呼び寄せる。

「これを見よ」
山岸は薙刀を見せられ、眼を見張った。
「なにゆえ、これが殿の御前にあるのでござりまするかや」
「鳶加藤がかすめ取って参ったのじゃ」
山岸は腕をこまねき、嘆息をもらした。
「それがしは生死を賭しての合戦の場を往来し、齢を重ねしが、かようなる手抜かりに及びしことはござりませなんだ。枕辺にありし薙刀を盗まれて気づかざりしは、まことに不覚の至りにござりまする」
景虎は笑みを洩らし、山岸にいう。
「おのし、今宵は鳶加藤が宿をしてやるがよい。これも何ぞの縁というものじゃ」
「かしこまってござりまする」
山岸は鳶加藤とともに座を立とうとして、景虎に呼びとめられた。
「おのしは残れ。加藤は下りてよし」
鳶加藤が去ってのち、景虎は山岸に内心を告げた。
「鳶加藤めは、まことに業正が希代の曲者と披露いたせしが、もっともじゃ。合戦に使うて、敵をうかがうには便ありといえども、あやつがもし敵に内応いたさば、ゆゆしき仇とあいなろう。

つまるところは、あやつのごとき曲者を扶養いたせしとて無用の凶賊じゃ。虎狼を養うにひとしきものであろう。また他国へ追い放すも、向後われらに仇なす気遣いなしとはいえぬ。当地を去らせず成敗いたすが上策じゃ。今宵はそのほうに預けるゆえ、明日には斬って棄てよ」

山岸はわが屋敷に戻り、鳶加藤を一室に押しこめ、十数人の番卒をつけ見張らせる。

鳶加藤は様子をうかがい、自分が処断されると察した。

彼は夜更けてのち、番卒どもに声をかけた。

「それがしは、いままで余人に見せしことなき妖術がござるゆえ、披露いたそう。御辺がたが睡気もさめるでござろうよ。されば壺を五つか六つ、所望いたす」

番卒たちは、めずらしい妖術を見たさに陶器の壺をあつめてきて、横一列に並べる。

「さて、傀儡の遊びをいたして進ぜよう」

鳶加藤は、体のどこからか土人形を壺の数だけ取りだした。

「これをご覧あれ。それぞれが壺に入りては跳ねて出て、踊りをいたすほどにのう」

番卒たちが見守るなか、鳶加藤は土人形を壺のなかへ入れ、手拍子をうちつつ、小歌を口ずさむ。

人形は生命ある物のように壺から飛び出して踊りはじめる。

「これは奇態な」

「かような妖術が遣えるものか」
番卒は感じいって踊りまわる人形に見入った。
やがて鳶加藤の歌声がとぎれ、人形たちは壺に戻った。
「やれ、おもしろや。かようの芸を見たるはまことに眼福と申すべきじゃ」
番卒たちがわれにかえったとき、部屋のうちに鳶加藤の姿はなかった。
「あやつがおらぬ。それあとを追え」
松明をかかげてあとを追ったが、鳶加藤の姿はどこにも見えなかった。
景虎は山岸からの注進を受けると、様子を詳しく聞きとったのち、命じた。
「こののち国中にてあやつを見かけしならば、是非にも搦めとって参れ」
鳶加藤は越後府中を退散してのち甲府へ奔り、晴信の家老跡部大炊助信春に頼り、武田家への仕官を願った。
晴信は戦陣の物見に用うればよいと、鳶加藤を数ヵ月のあいだ扶持したが、突然誅殺した。
その理由は、鳶加藤の忍びの技が、異常なまでに冴えていたからである。
晴信は平生座右に置いている秘蔵の古今集を、昼間に盗んでみよと鳶加藤に命じた。
鳶加藤は、障子を明けはなした書院で、晴信のほか四、五人の小姓が見張るなか、古今集を首尾よく盗みとり、危険きわまりない人物であると晴信に嫌われたのである。

永禄元年（一五五八）閏六月十九日、晴信は山城醍醐寺理性院から伊那文永寺、安養寺の再興訴願を受けた際、今年の秋には越後に出撃するので勝利の祈願を依頼したいと申し送った。

両寺の再興は、大願成就ののちにかならず実行すると約束している。

八月には戸隠社に社殿修築の費用を寄進し、戦勝を祈願させる。

晴信はその際、信濃に居を移すことの可否と、甲、越和談を破棄し干戈に及ぶことの可否を易占に問う。結果はつぎの通りであったという。

「いま居を信濃に移さば、すなわち当歳のうち、一国卓錐の地を残さず、予が掌握に帰すべし。もし越士干戈を動かさば、占筮坤卦の吉文に任せ、敵たちまち滅亡し、晴信勝利を得ること必せり」

晴信は、自らに有利な易占を家中に公表し、士気をもりたてようとした。

彼は景虎と一戦を交え、雌雄を決すべく軍備をととのえていた。

同年五月、将軍足利義輝は管領細川晴元の家宰三好長慶とその家老松永久秀に京都を追われ、近江朽木に陣を置き、懸命の抗戦をつづけていた。

義輝は景虎と晴信を和睦させ、景虎の上洛をまって三好の勢力を駆逐しようとはかる。

越後春日山城の景虎は、年初から関東出馬の支度を急いでいた。北条氏康に追われ、彼を

頼ってきた関東管領上杉憲政の願いをいれ、関東平定の軍をおこすのである。

晴信と景虎の一進一退の攻防はつづいていた。

晴信は永禄元年（一五五八）前半に、越後に侵入している。景虎は二度にわたり信濃に出兵し、晴信の拠点を襲撃した。

閏六月十四日、越後国瀬波郡（岩船郡）の村上城主本荘繁長が、同郡平林城主色部勝長らと郡をあげて信濃へ出陣の際、勝長に誓詞を送り協力を誓った。

この事実は、景虎が越後国衆のすべてに総動員令を発した証拠である。

本荘繁長は揚北（あがきた）衆の強豪であった。秩父平氏の系統で鎌倉幕府の頃に小泉庄地頭として越後に入った。

その後本荘を領地とした者が本荘氏、色部条（いろべのじょう）を領地とした者が色部氏となる。

本荘氏は永禄元年まで府中長尾に帰服せず独立を保っていたが、永禄元年に春日山城におもむき景虎に謁見し、麾下の大兵力をその指揮にゆだねた。

将軍義輝は永禄元年二月二十日、景虎につぎの御内書を下している。書状は幕臣大館晴光の使者が春日山城へ持参した。

「晴信と和談のこと、去年内書を成し、委曲申しつかわすのところ、大略同心のおもむき、

もっとも然るべく神妙に候。
いよいよ相違なくその意を得べきこと肝要に候。なお晴光申すべく候なり。
二月廿日　　将軍（花押）
長尾弾正とのへ」

景虎は御内書の意をうけ、信濃から兵を引くことを承知した。
将軍は晴信にも使者をつかわし、信濃侵略の非を責め、撤兵を求めた。
晴信は聖護院門跡道澄（どうちょう）の使僧森坊が将軍御内書をとどけると、彼を要害山城に滞在させ、饗応をかさねる。
森坊は温泉に旅の疲れを癒し、連日山海の珍味でもてなされ日をかさねる。
酒食に飽きかけた頃、躑躅ケ崎館から迎えがきて、山を下った。
晴信は居館の大書院で森坊と会った。
彼はおもむろに要件をきりだす。
「越後が長尾との和談につきては、まずはそれがしを信濃守護職に補任（ぶにん）下されてのちのことにいたして下されよ。それがしははや信濃をすべて平均（へいきん）いたしおりますれば、守護の座に就きて然るべしと存ずる」
信濃全土を掌中にしているとの晴信の巧みな駆けひきに、森坊はだまされた。
「お屋形殿の仰せらるるところを聞かば、もっともと存ずる。京へ戻りしうえは、御所様に

そなたがご存念のほどを申しあぐるといたそう」

「なにとぞ、よしなにおはからい下されたい。信濃は遠国ゆえ、御所様にはかの地の様子がお分りなされぬ。信濃はもはやこの晴信が手に入りておるものを、景虎めがねたんで分け取りいたさんと攻め入って参るのでござるのじゃ」

森坊は甲府にとどまるあいだ、連日歓待をうけた。

晴信は戦国大名のうちでは出色の知識人である。臨済禅の僧たちと詩会を催し、詩作を練り、周易、論語を学んでいる。

かつて大納言三条西実澄、参議中納言四辻季遠らが甲府にきたとき、晴信は彼らを要害山積翠寺に招待し、和漢連句の勝会を催したこともあり、漢詩、連歌に巧みであった。

森坊は晴信から莫大なみやげの品を貰い、帰京した。

晴信は信濃を侵略したのではなく、民衆たちの要請によって、無能な土豪を一掃し、国中の治安を回復させたので、その功を褒められこそすれ、弾劾されるいわれはないと詭弁をふるい、森坊をまるめこんだ。

晴信の策動は成功した。

森坊が帰京して間もない三月十日、将軍義輝は御内書を発し、武田、長尾の双方に命じた。

「信越国切りで和融せよ」

景虎は、将軍の使僧が晴信にたぶらかされたことを知り、憤激した。

「なにゆえ、かようのご書状がなされしか。晴信めがまたもや怪しき手を用いしに違いなし」

御内書の内容が、越後は景虎、信濃は晴信が支配して、双方が国境の外へ侵攻することを禁ずるとしているのは、信濃が晴信の領土であると認諾したことになる。

晴信は侵略者であるのに、正当な領主の権利を将軍に認めさせたのである。

「かような御内書一枚にて、晴信が悪業を見過ごせぬ。いまに見よ、かならず無道者を討ち滅ぼしてつかわすっちゃ」

景虎は歯がみした。

晴信は自らの信濃領有権を得てよろこんだが、この際さらに守護職を得ようと考えつく。

「将軍家は三好長慶に京を追われ難渋のあまり、景虎を上洛させ御所に戻りたしと願うておるずら。いまならば、何を望んだとて聞きいれっつら」

晴信は将軍の使者に、つぎの要求をした。

「信越国切りの御諚にはつつしんで従いまするが、それがしを信濃守護職に補任なされて下され」

信濃守護職は、南北朝以来小笠原氏が任じられてきたが、小笠原長時が晴信に逐われたのちは空職になっている。

守護職の実権はもはや存在せず空名のみが残っているに過ぎないが、晴信には利用価値がある。

信濃守護職となれば、正式に一国を領有することになり、景虎が攻め入ってくれば、これを侵略者として討滅する名分ができるのである。晴信は将軍御内書に従い、いったん兵を引いたのち、秋になってふたたび北信濃へ進攻した。

彼は将軍から信濃守護職に補任するとの将軍御内書を得て、はじめて将軍家へ返書を送った。内容の大略は、つぎの通りである。

「ご書状によれば、私が夏に越後へ乱入したのは上意を軽んずるものとか。たいへん驚いた次第であります。

先日お使者より信濃守護補任の御内書を頂戴しましたが、それならば他国より信濃への侵略は許されないはずです。それにもかかわらず、景虎は二度にわたって信濃へ乱入し付火(つけび)をいたしました。

これこそご上意にそむく所業の第一とあげつらってしかるべしと存じます。

また、去年甲越和睦のご裁決をいただき、信府で城普請をはじめましたが、景虎も御内書を頂戴したのに、御請書を出さぬうちに信濃海野を焼討ちした不届きは許せぬ所業です。

晴信が越後へ攻めいったのはその報復で、いささかも上意に背くものではありません。

今度かさねて越後へ乱入したのは、夏の戦いに越後府中を占領し破却するつもりであったのに、上意を奉じて帰陣したためです。

帰陣ののち、私は御使僧に申しました。私が信濃守護に補任されたのちは、和融の成るとか成らぬとかは、景虎に仰せらるべきことであると。

ところが御使僧は越後へ向おうとして追い返されたのです。これこそ景虎が上意に重ね重ね背いたことにまぎれなしと考えます。

信越国切りのことは承知しました」

晴信は将軍義輝を動かし守護職の座につくと、それを楯にとって信濃侵略の正当化をはかろうとした。

畿内では義輝が三好長慶と和約して、帰京した。

景虎は永禄二年（一五五九）四月三日、五千人の精兵を率い、春日山城を進発し京都へむかった。

「上杉年譜」に景虎の部隊進発の様子が記されている。

「供奉の元老には長尾右京亮実景、長尾遠江守藤景、本庄新左衛門実乃、直江与兵衛実綱、柿崎和泉守景家なり。

旗本の武者奉行には吉江織部佐景資、北条下総守高常なり。（中略）

同年四月三日、越府をご進発ありて上洛し給う。

五千の従者前後左右を輔翼す。その行粧(ぎょうそう)、目をおどろかせり。
越中の行路は松倉の庄司椎名衛門大夫康種これを奉じ、道、橋、旅館等を輔佐し、御馳走はなはだもって厳重なり。加賀国は本願寺門跡の随士これを饗応す」
景虎は不在中に晴信が越後へ侵入してくるかも知れない不安をおしきって、義輝の政権を強化するため、上洛を敢行した。
景虎が越前に入ると、国主朝倉義景は一行が支障ない旅行のできるよう、道、橋、旅館を修理し、酒肴をととのえて待っていた。
義景は景虎の宿所を訪問し、珍味佳肴をつくす盛宴をひらいて夜明けまで痛飲した。
「たがいに兵術雄略を談じ給えば、聴く者は寒心股慄(こりつ)してこれを感ず」
と「上杉年譜」に記されている。
江州へ入ると、近江守護職佐々木修理大夫義秀が、景虎の通過に便宜をはかる。
「国の所々において囲繞(いにょう)渇仰し奉ることは、武威権勢至大なるによってなり」
と年譜に述べられている。
今川義元、織田信長らが上洛するとき、道中で前途を阻む大名勢力を撃破せねばならなかったが、景虎は何の紛争もおこさず、歓待された。
五千の兵力をともなっているにかかわらず信用されたのは、景虎の厚い道義心がよほど各地の大名に聞えていたのであろう。

景虎は巨大な富を擁している。
所領には日本最大の金銀生産量を誇る越後、佐渡の鉱山がある。
上田荘の上田金山、岩船郡の高根金山、佐渡西三川金山、鶴子銀山からも莫大な金銀の運上を得た。
越後上布とその原料の青苧も重要な産物である。
青苧は麻の一種で、木綿が普及していなかった当時、衣服の材料として珍重されていた。
景虎は頸城平野、魚沼一帯から産出する青苧を京都へ出荷し、収益をあげた。
直江津に入津する苧船からとりたてる運上のみで、年間四万貫を得ている。
四万貫を石高になおせば、三十五、六万石である。
府中長尾家は景虎の祖父能景の代から朝廷、幕府と親密な関係をむすんできた。
そのような京都と越後の交易ルートを確立してきた実績が、朝倉、佐々木ら守護大名の信頼を得ていた。
景虎は四月二十日、西近江から坂本に入った。
「行列は五千の従者を一千二備になし、また一千二備にして後陣とし、三千を六備に作り麾下とす。（中略）
同廿日西近江より坂本に至り、目代舟橋弥兵衛尉が宅を旅館に点ず。
供奉の輩は堅田、十津、平野、大野の間に輻湊す」

坂本着陣の翌日、将軍義輝から上洛を催促する書状がとどいた。

「坂本に至り着津の由、然るべく候。早々参洛肝要に候。自然とかくの儀申す輩ありといえども、さらに異儀あるべからず候条、その旨を存ずべく候。なお藤安申すべく候也。

四月廿一日

長尾弾正少弼とのへ」

長尾景虎が義輝に謁見したのは、四月二十七日であった。

「細川家記」に謁見の情景を記している。

「永禄二年己未五月、長尾景虎上洛、人数五千余なり。将軍家に拝礼、太刀一腰吉光、馬一疋代黄金十枚。

母公慶寿院殿に蠟燭五百挺、綿三百把、白銀千両献ぜらる。御奉者藤孝君なり。

義輝公御喜悦、様々御懇志の御諚あり」

五月一日には正親町天皇に拝謁し、幣物多数を献じた。

天皇から天盃と御剣を拝領する。

景虎は日を置いて禁中拝観を許され、庭前で御盃を頂き、その際のお頼みに応じ内裏修理の費用を献じる。

景虎が越後を留守にしたとの報は、間を置かず甲府の晴信のもとへ伝わった。

「景虎めは愚か者よ。痩せ公方にどれほど合力いたせしとて、何にもならぬわ。いまのうちに実りを取らざあ」

晴信はただちに麾下諸部隊に下知して北信濃に侵入させ、さらに越後をうかがう。

五月に松原神社（南佐久郡小海町）に願文を納めて、敵城の自落退散、越軍滅亡を祈願して、越後へ乱入した。

この願文に、「釈信玄」の署名がはじめてなされている。

晴信は出家して信玄と号するようになったのである。

武田信玄が越後の国境に出兵したとの通報が京都に届くと、将軍義輝はつぎの命令を景虎に下し、信玄追討を命じた。

「甲越一和の事、晴信に対し度々下知を加うるといえども同心なく、結局分国の境い目に至り乱入の由、是非なく候。

信濃国諸侍の事、弓矢半ばの由に候あいだ、始末景虎意見を加うべき段、肝要に候。

なお晴光申すべく候なり。

六月二十六日　　義輝（花押）

長尾弾正少弼とのへ」

京都での景虎は、公家衆との連歌の会をひらき、歌道を論じる日を送り、高野、比叡の社寺に詣でる。

だが景虎上洛の目的は、三好、松永の徒党を撃滅して将軍の地位を確固不動のものとするにある。義輝の下知があれば、ただちに戦端をひらく覚悟をさだめていた。

（中巻に続く）

単行本は一九九三年七月　小社刊

武田信玄(上)
津本陽
© Yo Tsumoto 1996
講談社文庫
定価はカバーに
表示してあります

1996年9月15日第1刷発行

発行者——野間佐和子
発行所——株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01
電話 出版部 (03) 5395-3510
販売部 (03) 5395-3626
製作部 (03) 5395-3615

デザイン——菊地信義
製版——凸版印刷株式会社
印刷——豊国印刷株式会社
製本——株式会社千曲堂

Printed in Japan

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。 (庫)

ISBN4-06-263228-0

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

講談社文庫刊行の辞

二十一世紀の到来を目睫に望みながら、われわれはいま、人類史上かつて例を見ない巨大な転換期をむかえようとしている。

世界も、日本も、激動の予兆に対する期待とおののきを内に蔵して、未知の時代に歩み入ろうとしている。このときにあたり、創業の人野間清治の「ナショナル・エデュケイター」への志を現代に甦らせようと意図して、われわれはここに古今の文芸作品はいうまでもなく、ひろく人文・社会・自然の諸科学から東西の名著を網羅する、新しい綜合文庫の発刊を決意した。

激動の転換期はまた断絶の時代である。われわれは戦後二十五年間の出版文化のありかたへの深い反省をこめて、この断絶の時代にあえて人間的な持続を求めようとする。いたずらに浮薄な商業主義のあだ花を追い求めることなく、長期にわたって良書に生命をあたえようとつとめるところにしか、今後の出版文化の真の繁栄はあり得ないと信じるからである。

同時にわれわれはこの綜合文庫の刊行を通じて、人文・社会・自然の諸科学が、結局人間の学にほかならないことを立証しようと願っている。かつて知識とは、「汝自身を知る」ことにつきていた。現代社会の瑣末な情報の氾濫のなかから、力強い知識の源泉を掘り起し、技術文明のただなかに、生きた人間の姿を復活させること。それこそわれわれの切なる希求である。

われわれは権威に盲従せず、俗流に媚びることなく、渾然一体となって日本の「草の根」をかたちづくる若く新しい世代の人々に、心をこめてこの新しい綜合文庫をおくり届けたい。それは知識の泉であるとともに感受性のふるさとであり、もっとも有機的に組織され、社会に開かれた万人のための大学をめざしている。大方の支援と協力を衷心より切望してやまない。

一九七一年七月

野間省一

宮尾登美子
東福門院和子の涙（まさこ）

佐藤雅美
恵比寿屋喜兵衛手控え
長屋王横死事件

豊田有恒
江戸城の宮廷政治
〈熊本藩細川忠興・忠利父子の往復書状〉

山本博文
朝焼けの賦（ふ）〈小説・村田新八〉

赤瀬川隼
半蔵の槍

嶋津義忠
信長殺すべし〈異説本能寺〉

岩崎正吾
疑惑

B・パーカー
佐藤耕士 訳
江戸風鈴恋物語
〈時代小説傑作選〉

日本文芸家協会編
武田信玄（上）（中）（下）

史上初めての武家出身の中宮、二代将軍の娘和子姫。涙を秘めた慈愛の生涯を描く長編。

争いは世の常。江戸のトラブル相談所に持ち込まれる強かな姿模様を描く直木賞受賞作。

平城京の権力争いのなか、藤原氏に殺されたとされる長屋王。その死の真相に迫る意欲作。

現代日本の政治風土を作った江戸時代初期の幕閣の権力抗争を細川家文書から解読する。

師と仰ぐ西郷隆盛と大久保利通の対立の狭間で煩悶する人間村田を浮彫りにする感動の作。

戦国忍者の誇りを賭けて、徳川幕藩体制に戦いを挑んだ伊賀・闇の軍団。本格忍者小説。

新事実の発見により日本国史上最大の謎がついに解明された！　超本格歴史推理の傑作。

湿地帯で発見された妹の死体。予期せぬ展開で明かされる衝撃の真実。第一級サスペンス！

恋に生き、武士道に殉ずる江戸の人々。現代史の激変を彷彿とさせる時代小説傑作の数々。

中世の花、信玄と謙信の宿命的対決。武田三代の栄枯盛衰を圧倒的迫力で描く歴史巨篇。

講談社文庫最新刊

平岩弓枝	**はやぶさ新八御用帳**(五)〈御守殿おたき〉
白石一郎	**出世長屋**〈十時半睡事件帖〉
伴野朗	**元寇**
早乙女貢	**秘剣柳生十兵衛**〈隻眼一人旅〉
佐江衆一	**子づれ兵法者**
中村隆資	**天下を呑んだ男**〈「秀吉」が生まれた朝〉
東郷隆	**大砲松**
D・グターソン 高儀進訳	**殺人容疑**
柴田錬三郎	**英雄・生きるべきか死すべきか**(上)(下)〈柴錬三国志〉
宮城谷昌光	**重耳**(じ)(上)(中)(下)

下谷の捨て子は大名家の姫か？　江戸の香り豊かに、南町奉行所内与力隼新八郎の活躍。福岡藩江戸藩邸の風紀の乱れは目に余るほど。隠居中のおなじみ半睡に白羽の矢が立った。日本最大の国難、その歴史の裏に秘められた驚愕の真実とは。血沸き肉躍る傑作冒険譚。

家光の寵臣十兵衛は、浪人となり廻国修業の旅へ。徳川政権の恐るべき秘密を描く長編。

子供を賭けて真剣での勝負を挑む兵法者など、『黄落』の作者が描く新剣豪小説の傑作七編。

東海道吉田宿で一人の針売りが「天下人」に変わった。一升八文の酒が歴史を創りだす。時は幕末、縁あって上野彰義隊に入った松三の破天荒な半生。吉川英治文学新人賞受賞作。

欧米で大ベストセラー、各賞受賞の裁判小説。被告の日系アメリカ人をめぐる人生ドラマ！

蜀の孔明と魏の仲達。存亡をかけ虚々実々の死闘を繰り返す。中原に散った英雄達の挽歌。

不遇と放浪の人生の中で徳を積み、春秋の覇者となった奇蹟の名君、重耳を描く歴史長編。

高任和夫　過労病棟
高橋幸春　蒼氓の大地
竹田真砂子　鏡花幻想
立石泰則　堤清二とセゾングループ
立石泰則　女性を創造する〈アコール物語〉
谷村志穂　十四歳のエンゲージ
谷村志穂　少女よ、大志を抱け
谷村志穂　眠らない瞳
竹河聖　神宝聖堂の王国I〈鉄剣の戦士〉
陳舜臣　阿片戦争全三冊
陳舜臣　新西遊記(上)(下)
陳舜臣　枯草の根
陳舜臣　旋風に告げよ(上)(下)
陳舜臣　風よ雲よ(上)(下)
陳舜臣　英雄ありて
陳舜臣　妖のある話
陳舜臣　太平天国全四冊
陳舜臣　中国五千年(上)(下)
陳舜臣　相思青花(上)(下)
陳舜臣　中国の歴史全七冊
陳舜臣　敦煌の旅
陳舜臣　シルクロードの旅
陳舜臣　北京の旅
陳舜臣　長安の夢
陳舜臣　景徳鎮の旅〈中国やきもの紀行〉
陳舜臣　東西南北望〈歴史エッセイ〉
陳舜臣　中国発掘物語
陳舜臣　続・中国発掘物語
陳舜臣　小説十八史略全六冊
陳舜臣　戦国海商伝(上)(下)
陳舜臣　夢ざめの坂(上)(下)
陳舜臣　琉球の風全三冊
陳舜臣　中国詩人伝
筒井康隆　心狸学・社怪学
筒井康隆　乱調文学大辞典
筒井康隆　ウィークエンド・シャッフル
都筑道夫　猫の舌に釘をうて
都筑道夫　新顎十郎捕物帳
都筑道夫　新顎十郎捕物帳2
津村節子　霧の棲む里
津村節子　恋人
津本陽　塚原卜伝十二番勝負
津本陽　明治兜割り
津本陽　日本剣客列伝
津本陽　拳豪伝
津本陽　修羅の剣(上)(下)
津本陽　勝つ極意　生きる極意
津本陽　危地に生きる姿勢
津本陽　千葉周作(上)(下)
津本陽　下天は夢か全四冊
津本陽　鎮西八郎為朝
津本陽　幕末剣客伝
津本陽　武田信玄(上)(中)(下)
辻真先　幻の流氷特急殺人事件
辻真先　沖縄県営鉄道殺人事件
綱淵謙錠　人物列伝幕末維新史
津村秀介　紅葉坂殺人事件

津村秀介　瀬戸内を渡る死者
津村秀介　京都着19時12分の死者
津村秀介　新横浜発12時9分の死者
津村秀介　寝台特急18時間56分の死角
津村秀介　大阪経由17時10分の死者
津村秀介　人を乗せない急行列車
津村秀介　異域の死者〈上野発17時40分の死者〉
津村秀介　松山着18時15分の死者
津村秀介　小樽発15時23分の死者
津村秀介　寝台急行銀河の殺意
津村秀介　最上峡殺人事件
津村秀介　恵那峡殺人事件
津村秀介　横須賀線殺人事件
津村秀介　能登の密室〈金沢発15時54分の死者〉
津村秀介　湖畔の殺人
津村秀介　海峡の暗証〈函館着4時24分の死者〉
霍見芳浩　地球時代の「会社の常識」
霍見芳浩　脱・大不況
鷲井通眞　会社逃亡
司凍季　からくり人形は五度笑う
綱島理友　全日本荒唐無稽観光団
角田實　サブリミナル英会話
出久根達郎　無明の蝶
出久根達郎　本のお口よごしですが
出久根達郎　佃島ふたり書房
戸川昌子　大いなる幻影
伴野朗　五十万年の死角
伴野朗　第三の原爆
伴野朗　南海の風雲児・鄭成功
伴野朗　元寇
豊田有恒　古代史を彩った人々
豊田有恒　大友の皇子(みこ)東下(あずまくだ)り
豊田有恒　長屋王横死事件
戸川幸夫　ヒトはなぜ助平になったか
豊田穣　初代総理伊藤博文(上)(下)
豊田穣　日本交響楽　全七冊
豊田穣　飛行機王・中島知久平
豊田穣　海軍軍令部
豊田穣　悲運の大使野村吉三郎
豊田穣　心臓告知
豊田穣　革命家・北一輝〈日本改造法案大綱と昭和維新〉
土居良一　過去からの追跡者
常盤新平　遠いアメリカ
常盤新平　ニューヨーク紳士録
常盤新平　聖ルカ街、六月の雨
常盤新平　そうではあるけれど、上を向いて
常盤新平　彼女の夕暮れの街
常盤新平　ファーザーズ・イメージ
童門冬二　坂本龍馬の人間学
童門冬二　武田信玄の人間学
童門冬二　織田信長の人間学
童門冬二　小説蜂須賀重喜〈阿波藩財政改革〉
鳥井加南子　天女の末裔(すえ)
藤堂志津子　マドンナのごとく
藤堂志津子　あの日、あなたは
藤堂志津子　さりげなく、私
藤堂志津子　きららの指輪たち

藤堂志津子　蛍　姫
藤堂志津子　プ　ワ　ゾ　ン
藤堂志津子　目　醒　め
豊田行二　秘書室の殺人
豊田行二　若妻舞衣子の秘密
鳥羽　亮　剣の道殺人事件
鳥羽　亮　一心館の殺人剣
鳥羽　亮　首を売る死体
鳥羽　亮　警視庁捜査一課南平班
鳥越　碧　雁金屋草紙
東郷　隆　〈定吉七は丁稚の番号〉〈定吉七番シリーズ〉
東郷　隆　ロッポンギから愛をこめて〈定吉七番シリーズ〉
東郷　隆　ゴールドういろう〈定吉七番シリーズ〉
東郷　隆　大砲松
戸塚真弓　パリ住み方の記
富岡幸雄　背信の税制〈庶民いじめの構造〉
時実新子　父さんごめんね母さんごめんね
銅谷志朗　満員御礼！〈大相撲なんでも早わかり〉
夏目漱石　こころ
夏樹静子　天使が消えていく
夏樹静子　見知らぬわが子
夏樹静子　黒白の旅路
夏樹静子　ガラスの絆
夏樹静子　誤認逮捕
夏樹静子　二人の夫をもつ女
夏樹静子　ベッドの中の他人
夏樹静子　重婚
夏樹静子　砂の殺意
夏樹静子　遠ざかる影
夏樹静子　家路の果て
夏樹静子　ビッグアップルは眠らない
夏樹静子　国境の女
夏樹静子　最後に愛を見たのは
夏樹静子　女の銃
夏樹静子　駅に佇つ人
夏樹静子　そして誰かいなくなった
中井英夫　虚無への供物
永井路子　王者の妻(上)(下)
中沢けい　海を感じる時
長井彬　原子炉の蟹
中津文彦　黄金流砂
中津文彦　ラトビアの霧
中津文彦　山田長政の密書
中川靖造　海軍技術研究所〈エレクトロニクス王国の先駆者たち〉
中川靖造　創造の人生井深大
南條範夫　細香日記
南條範夫　室町抄
南條範夫　有明の別れ
南條範夫　天保九年の少年群
長尾三郎　サハラに死す〈上温湯隆の一生〉
長尾三郎　エベレストに死す〈天才クライマー加藤保男〉
長尾三郎　マッキンリーに死す〈植村直己の栄光と修羅〉
長尾三郎　古寺再興
長尾三郎　生き仏になった落ちこぼれ
長尾三郎　負代の名工・西岡常一棟梁を聞く
長尾三郎　魂に触れる〈大仏師父子の「心の王国」〉
南里征典　成城官能夫人
南里征典　武蔵野薔薇夫人

南里征典　麻布憂愁夫人
南里征典　田園調布真紅夫人
南里征典　自由ヶ丘密会夫人
南里征典　赤坂哀愁夫人
南里征典　鎌倉誘惑夫人
南里征典　道玄坂濃蜜夫人
南里征典　山手背徳夫人
永倉万治　この頃は、めっきりラブレター
永倉万治　メモリーズ・オブ・ユー
永倉万治　東京恋愛事情
永倉万治　みんなアフリカ
永倉万治　陽差しの関係
永倉万治　アナタの年頃
永倉万治　荒木のおばさん
長倉洋海　激動の世界を駆ける
中村武志　日白三平随筆　男はいつも孫悟空
中村勘九郎　役者の青春
中川昌彦　三国志に学ぶ〈変革期の勝ち残り方〉
中西智明　消失！
中島らも　しりとりえっせい
中島らも　今夜、すべてのバーで
中島らも編・著　なにわのアホぢから
中町信　下北の殺人者
中町信　湯煙りの密室
中町信　津和野の殺人者
鳴海章　荒鷲の狙撃手(上)(下)
鳴海章　ナイト・ダンサー
鳴海章　日本海雷撃戦(上)(下)〈コリア・クライシス〉
永井明　ストレス学入門
永田徹　稲垣晴代　雇用新時代を生きぬく〈いま必要なコンセプト思考〉
楢山芙二夫　傷だらけの銃弾
中丸三千繪　マリア・カラス・コンクール——スカラ座への道——
中村隆資　天下を呑んだ男〈秀吉〉が生まれた朝
西村京太郎　天使の傷痕
西村京太郎　名探偵なんか怖くない
西村京太郎　D機関情報
西村京太郎　殺しの双曲線
西村京太郎　名探偵が多すぎる
西村京太郎　ある朝海に
西村京太郎　脱出
西村京太郎　四つの終止符
西村京太郎　おれたちはブルースしか歌わない
西村京太郎　名探偵も楽じゃない
西村京太郎　悪への招待
西村京太郎　名探偵に乾杯
西村京太郎　七人の証人
西村京太郎　ハイビスカス殺人事件
西村京太郎　炎の墓標
西村京太郎　特急さくら殺人事件
西村京太郎　変身願望
西村京太郎　四国連絡特急殺人事件
西村京太郎　午後の脅迫者
西村京太郎　太陽と砂
西村京太郎　寝台特急あかつき殺人事件
西村京太郎　日本シリーズ殺人事件
西村京太郎　L特急踊り子号殺人事件
西村京太郎　寝台特急「北陸」殺人事件

西村京太郎　オホーツク殺人ルート
西村京太郎　行楽特急（ロマンスカー）殺人事件
西村京太郎　南紀殺人ルート
西村京太郎　特急「おき3号」殺人事件
西村京太郎　阿蘇殺人ルート
西村京太郎　日本海殺人ルート
西村京太郎　寝台特急六分間の殺意
西村京太郎　釧路・網走殺人ルート
西村京太郎　アルプス誘拐ルート
西村京太郎　特急「にちりん」の殺意
西村京太郎　青函特急殺人ルート
西村京太郎　山陽・東海道殺人ルート
西村京太郎　十津川警部の対決
西村京太郎　南神威島
西村京太郎　最終ひかり号の女
西村京太郎　富士・箱根殺人ルート
西村京太郎　十津川警部の困惑
西村京太郎　殺者はオーロラを見た
西村京太郎　津軽・陸中殺人ルート
西村京太郎　十津川警部C11を追う
西村京太郎　越後・会津殺人ルート〈追いつめられた十津川警部〉
西村京太郎　華麗なる誘拐
西村京太郎　五能線誘拐ルート
西村京太郎　シベリア鉄道殺人事件
西村京太郎　恨みの陸中リアス線
西村京太郎　鳥取・出雲殺人ルート
仁木悦子　猫は知っていた
仁木悦子　粘土の犬
仁木悦子　林の中の家
仁木悦子　灯らない窓
仁木悦子　緋（ひ）の記憶
仁木悦子　赤い猫
仁木悦子　青い風景画
西村寿行　帰らざる復讐者（しゅうしゃ）
西村寿行　赤い鯱（しゃち）
西村寿行　黒い鯱
西村寿行　白い鯱
西村寿行　碧（あお）い鯱
西村寿行　緋（ひ）の鯱
西村寿行　遺恨の鯱
西村寿行　幽鬼の鯱
西村寿行　神聖の鯱
西村寿行　呪いの鯱
西村寿行　癌病船
西村寿行　鬼の跫音（あしおと）
西村寿行　異常者
西村寿行　癌病船応答セズ
西村寿行　旅券のない犬
西村寿行　わらの街
西村寿行　風紋の街
西村寿行　空蟬（うつせみ）の街
西村寿行　陽炎（かげろう）の街
西村寿行　ここ過ぎて滅びぬ
新田次郎　聖職の碑（いしぶみ）
新田次郎　武田勝頼　全三冊
日本文芸家協会編　侍たちの風雪〈歴史ロマン傑作選〉
日本文芸家協会編　篝火の燃ゆる街道〈歴史ロマン傑作選〉

講談社文庫　目録

日本文芸家協会編
四季の江戸図絵
〈歴史ロマン傑作選〉

日本文芸家協会編
暮六ツの鐘鳴る刻
〈歴史ロマン傑作選〉

日本文芸家協会編
剣鬼らは何処へ
〈歴史ロマン傑作選〉

日本文芸家協会編
雲流るる城下町
〈歴史ロマン傑作選〉

日本文芸家協会編
絵ごよみ八百八町
〈歴史ロマン傑作選〉

日本文芸家協会編
稲妻を斬る
〈歴史ロマン傑作選〉

日本文芸家協会編
花明かりの宿場町
〈歴史ロマン傑作選〉

日本文芸家協会編
大川端上げ潮どき
〈時代小説傑作選〉

日本文芸家協会編
花散る里の伝説
〈時代小説傑作選〉

日本文芸家協会編
熾烈なり秘剣往来
〈時代小説傑作選〉

日本文芸家協会編
われもまた剣法者
〈時代小説傑作選〉

日本文芸家協会編
闇に立つ剣鬼
〈時代小説傑作選〉

日本文芸家協会編
剣よ風を呼べ
〈時代小説傑作選〉

日本文芸家協会編
江戸風鈴恋物語
〈時代小説傑作選〉

日本推理作家協会編
犯罪ロードマップ
〈ミステリー傑作選1〉

日本推理作家協会編
殺人現場へどうぞ
〈ミステリー傑作選2〉

日本推理作家協会編
ちょっと殺人を
〈ミステリー傑作選3〉

日本推理作家協会編
あなたの隣に犯人が
〈ミステリー傑作選4〉

日本推理作家協会編
犯人はただいま逃亡中
〈ミステリー傑作選5〉

日本推理作家協会編
サスペンス・ゾーン
〈ミステリー傑作選6〉

日本推理作家協会編
意外や意外
〈ミステリー傑作選7〉

日本推理作家協会編
殺しの一口料理
〈ミステリー傑作選8〉

日本推理作家協会編
犯罪ショッピング
〈ミステリー傑作選9〉

日本推理作家協会編
闇のなかのあなた
〈ミステリー傑作選10〉

日本推理作家協会編
どんでん返し
〈ミステリー傑作選11〉

日本推理作家協会編
にぎやかな私意
〈ミステリー傑作選12〉

日本推理作家協会編
凶器は狂気
〈ミステリー傑作選13〉

日本推理作家協会編
犯罪見本市
〈ミステリー傑作選14〉

日本推理作家協会編
殺しのバフォーマンス
〈ミステリー傑作選15〉

日本推理作家協会編
故意・悪意・殺意
〈ミステリー傑作選16〉

日本推理作家協会編
とっておきの殺人
〈ミステリー傑作選17〉

日本推理作家協会編
花には水、死者には愛
〈ミステリー傑作選18〉

日本推理作家協会編
殺人者へのレクイエム
〈ミステリー傑作選19〉

日本推理作家協会編
死者たちは眠らない
〈ミステリー傑作選20〉

日本推理作家協会編
殺人はお好き？
〈ミステリー傑作選21〉

日本推理作家協会編
二転・三転・大逆転
〈ミステリー傑作選22〉

日本推理作家協会編
あざやかな結末
〈ミステリー傑作選23〉

日本推理作家協会編
頭脳明晰、特技殺人
〈ミステリー傑作選24〉

日本推理作家協会編
誰がための殺人
〈ミステリー傑作選25〉

日本推理作家協会編
明日からは、殺人者
〈ミステリー傑作選26〉

日本推理作家協会編
真犯人は安眠中
〈ミステリー傑作選27〉

日本推理作家協会編
完全犯罪はお静かに
〈ミステリー傑作選28〉

日本推理作家協会編
あの人の殺意
〈ミステリー傑作選29〉

日本推理作家協会編
もうすぐ犯行記念日
〈ミステリー傑作選30〉

日本推理作家協会編
1ダースの殺意
〈ミステリー傑作選・特別編1〉

日本推理作家協会編
殺しのルート
〈ミステリー傑作選・特別編2〉

日本推理作家協会編
真夏の夜の悪夢
〈ミステリー傑作選・特別編3〉

日本推理作家協会編
57人の見知らぬ乗客
〈ミステリー傑作選・特別編4〉

日本推理作家協会編
新美南吉
童話集こんぎつね 最後の胡弓ひきほか十四編

C・W・ニコル
風を見た少年

C・W・ニコル
C・W・ニコルの自然記

C・W・ニコル
C・W・ニコルの海洋記

C・W・ニコル
C・W・ニコルの旅行記

C・W・ニコル
C・W・ニコルの野性記

C・W・ニコル
C・W・ニコルの自然生活

C・W・ニコル
C・W・ニコルの黒姫日記

C・W・ニコル
C・W・ニコルの森と海からの手紙

1996年9月15日現在